
けいおん! LOVE!LOVE!LIVE!

伝説・改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ LOVE！LOVE！LIVE！

【Nコード】

N9852L

【作者名】

伝説・改

【あらすじ】

共学となった桜校に日暮遼祐と言う少年が入学する。

そして遼祐は、同じく入学した平沢唯と運命の出会いをして……。

ドタバタ学園ミュージッククラブコメディ小説！

1 「出会い！そして入部！」

「…………すけ、りよ……………きて」

うるせえなあ。いいから寝かせろよ。まだ春休みだろうが。

俺は聞こえてくる声に心の中で反論し、体を壁側へと回した。

「おきろ、おなかすいたぞ」

何故だろう。この言葉に俺の怒り部分が反応した。

「だあ、うつせえっ！朝飯ぐらい自分で作れ！それにまだ春休みだろうが！！昼まで寝かせろ！！」

勢いよく飛び起き、家事がまったくできないこのダメ姉貴に言った。
「……………は？何言ってるの？」

姉の頭に疑問マークが浮かんでいる。それはこっちもだ。お前こそ何言ってる。

「今日あんた入学式でしょ。桜高の」

しばしの沈黙……………。

入学式？桜高？それぞれの単語を俺は頭の中で関連するキーワードを検索しはじめ……………。

「だあああああああ！！しまったあああああ！！」

俺はベッドから飛び出し、部屋を飛び出し、洗面所まで直行した。

顔を洗って歯磨きをし、ワックスで髪を整えた後、部屋へ引き返す。

来ている服を桜高の規定服であるブレザーへとジャージからランクアップさせた。

そしてあらかじめ机の上に置いてあった鞆を持ち、玄関へ直行、靴を履いて玄関の扉を開き、階段を下りて我が自宅であるマンションっぽいアパートを後にした。

「ちよつと〜！朝ご飯はあ〜?!」

「コンビニでもなんでもいいからとにかく勝手にすませろ！！」

ベランダから顔を出して俺に叫んでいるダメ姉にいい飛ばし、俺は目的地である桜高へ駆けだした。

そして幾多の罫（主に信号とか近所のおばさんとか車とか）をくぐりぬけようやく桜高の校門に到着した。

息が切れているので下を向いて整え、整うと桜高を見る。

「はあ……はあ……間に合った……」

俺は校舎を見る。綺麗だ。

俺は時計を見る。綺麗だ。ホント、時間的な意味で。

「はははは、まだ1時間も余裕があるじゃん」

……家で時計見ときゃよかった。

っていつかそのことぐらい言えバカ姉貴。

溜息をつき、俺は校門をくぐる。

これから先、3年間通い続ける高校の校門を。

生徒はまだほとんどいなかった。せいぜい元気だけがとりえそうなバカな男子や、「あれ〜？間違えて早く来ちゃった〜」的な女子ぐらい。

クラス表は玄関の近くの掲示板に張ってあるとか言っていたが、まだ余裕があるため、見ずに学校の外をうろろろすることにした。外は綺麗で池があったり、小さな森林があったりと俺が前いた中学では考えられないぐらいの綺麗さだ。

……まああの学校は花があるだけですげえんだけどな。

半周ぐらいしたところに普通の木があった。卒業樹かどうかしらないが多分そうだろう。

そんな事を思っていると、俺は木の根っこでしゃがんでいる女子生徒の存在に気がついた。

……何やってんだ。あんなところで。

「お〜い、なにやってんだ〜？」

……返事がない、ただの屍のようだ。

ってそうじゃない。めげずに徐々にその女子生徒に近づいて、

「もしも〜し」

女子生徒の体がぴくんと動く、そしてこっちを向き、俺と目があっ

た。

しばしの沈黙……ってさっきやったか。

「何やってんだ？こんなところで」

「え〜とね、このてんとう虫さんを見てたの！」

……テントウムシ？

おいおい、小学生かこいつは。

俺は女子生徒の隣にしゃがみこみ、木の根っこに生えている草の上にいるてんとう虫を眺めた。

「なんでてんとう虫とにらめっこしてたんだよ」

「だって、かわいいじゃん」

そうか？俺はありのほうがいいな。

「ありさんは顔が怖いよ」

あ、そいやそうだ。幼稚園の時図鑑見て泣きかけたのを思い出した。

「ってか、そんだけ？」

「うん」

……あ〜、なんとも言葉にしにくい。

「まあいいや。それより時間だから教室行かないと遅れるぞ」

腕にはめているデジタル時計を見るといつのまにか残りのタイムリミットは30分をきっていた。

「あ、ホントだ。じゃあ一緒に行こ？」

「へ？俺も一緒に？」

「うん、わたしね、まだクラス表見てないんだ」

そりゃ偶然。俺もだ。

「あ、そいやまだ名前言っってたな。日暮遼祐ってんだ」

「わたし、平沢唯って言うの。よろしくね、りょうくん」

りょうくん？

「うん。遼祐だからりょうくん」

りょうくんか。りょうく。

「ッ！」

りょうくん……、りょうくん……。

頭が痛くなってきた。同時に誰かがりょうくんって言う声が聞こえてくる。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。んじゃ行くこっぜ平沢」

「うん！」

俺たちは一緒にクラス表を見に行った。

それにしてもなんだったんださっきの？

「え〜と、俺の名前は……あ、3組か。……って、お前も一緒のクラスだぞ」

「えっ！？りょうくんと同じクラス！？わーいわーい！」

そこまで喜ぶことか？まあいいか。

教室の場所を確認し、俺たちは1年間勉強することになる教室へ向かった。

さて、教室を見つげるだけで25分も費やしてしまった俺たちは教師へ到着する頃には既に俺たち以外の生徒の皆さまは席へおつきになられていた。

……恥ずかしい。

そう思いながら平沢と共に席についた。

たまたまなのか、偶然なのか、運命なのか、俺の後ろは平沢だった。まあ名字も同じ『ひ』だし。近いのは当たり前か。と言う事で答えは『当たり前』だ。

え？選択肢にない？固い事言うなよ。たかがクイズだろ？

……ごめん、これ言いたかっただけなんだ。

席へついてしばらくすると担任らしき人物が教室へ侵入してきた。

女性で正直言うとおんま美人ではなかった。

なんだよ、俺はてっきり高校の女性教師っていうのは美人ばかりだと思ってたのに……。

「え〜と、皆さん。入学おめでとうございます。自己紹介を始めたところですが入学式が始まるため、これから体育館へ移動します」

うわあ、入学式だ。俺の嫌いな行事ベスト3を万年キープしてる奴だよ。

「めんどくせえなあ、サボるか」

小声で後ろにいる平沢に話しかけた。

「駄目だよ、ちゃんと出ないと怒られちゃうよ」

怒られるのが怖くてサボれるか。

と男が相手ならそういいたいところだが、初日だし、真面目に式に出る事にした。

平沢って見た目以上にしっかりしてるんだな。見た目めっちゃふわふわしてそうなんだが。

「……………」

「……………」

隣で寝ているのは平沢だ。

こいつを真面目な奴だと思った俺がバカだった。

いや、真面目なのは真面目だと思うよ？多分。

ただどさあ……………」

「さて、我が桜高が共学になった訳は……………」

「起きろ平沢」

「はっ！？わたし寝てた!？」

「寝てたよ、奇跡だぞ。校長の話が始まって30秒で寝るなど」

「えへへへ、どういたしまして」

「褒めてねえ！」

溜息をついて前を向いた。

横目で平沢を見ると校長の話聞いていた。

よく見ると可愛いなこいつ……………しかも黒タイツだし。

……………って関係ねえ!!

それにしても、高校生か。

今の服装を見て見る。

一番上のボタンが外れ、ズボンに入っていないカッターシャツ。

ボタン全開のブレザー。
ゆるめたネクタイ。

どう考えても1年生の服装じゃねえ。明らかに不良じゃねえか。
だがそんな事は気にしない。これが俺の服装だ。なんか文句あるか？
…… よろしい。

そんな事を思っているうちに殺人的麻酔力を持つ校長の話は終了し、
入学式は終了を迎えた。

先生の自己紹介。俺たちの自己紹介を終え、この日の日程は終了した。

「唯、一緒に帰らない？」

誰かが唯に話しかけていたので振り向くと、眼鏡をかけた女子が平沢に声をかけていた。

確か……真鍋和だったっけ？

「うん、いいよ。あ、りょうくんも一緒にいい？」

「りょうくん？」

真鍋は誰のことか分からないらしい。

「俺だよ」

「ああ、日暮君ね。朝は唯がお世話になったそうね」
お世話つっても教室まで一緒に行っただけだな。

「唯一人だったら多分倍の時間をかけて教室に来るでしょうね」

ああ、そりゃそうかもな。

「酷いよ二人とも〜！」

俺たちは笑い合った。

ああ、やっぱり楽しいなあ、高校生活。

ああ、ホント楽しかったよ。

……あの存在を永久に忘れていたら……！！！！

そして時はぶっ飛び4月下旬。

高校生活にも慣れ始め、心のどこかにあった緊張感がなくなりかけた時期だ。

だが、その緊張感とは心の全体へ広がり、復活することになる。うっん、と後ろで唸り声が聞こえる。

俺も唸り声は挙げてないが挙げたい気分になっていた。

「どうしたのよ二人とも」

通りかかった真鍋が声をかけてきた。

真鍋が俺の机の上に広げてあるA4サイズの紙に目を通した。

「これって部活の希望用紙じゃない。二人ともまだ出してなかったの？」

しょうがないだろ。やりたい事ねえんだから。それに……。

ちなみに後ろの平沢さんは部活動を1度もした事がないそう。

「はあ……こうやってノートが出来上がっていくのね」

「部活やってないだけでノート!？」

「二人とも、ホントに高校生になって知り合ったの?どう見ても小学校のころぐらいから一緒にいる人達並に息がぴったりね」

ふふ、ツツコミが長すぎだな。

まだまだ俺のツツコミパワーには勝てないぞ。真鍋君。

「別にいいわよそんなの。それより早く決めないと色々とまずいわよ」

だよなあ……。

唯も結構気にしているらしく、(主にさっきのノート発言で)しばらくポーツとしていた。

それから次の日。

「え!? 遼祐まだ部活入ってなかったの!？」

「そんな驚くことかよ」

俺の目の前で弁当をがつついている門村浩文にそう言ってやった。

こいつは俺が幼稚園のころからの腐れ縁で中学は違ったが、高校で同じクラスになった。

「っていつか、遼祐中学の時は部活してなかったの？」

卵焼きを箸で刺して、口の中に入れようとしていた俺の手が止まった。

一応してたにはしてたさ。だけど……。

「……ああ、まあな」

卵焼きを口に放り込んだ。

「って言うか、お前なに部に入ったんだよ」

「僕は陸上部に」

「お前足速い上に頭がいいなんてどんだけ才能に恵まれてるんだよ」

「遼祐だって一応勉強はできてるし、運動神経だっついていいじゃん」

「お前よりは劣るがな」

ご飯をむりやり口に放り込んだ。

昼飯の後、無性に腹ごなしの散歩がしたくなった。

と、外に出て掲示板をふと見ると、なにやら唯が珍しそうな顔で掲示板とにらめっこしていた。

テントウムシの次は掲示板かよ。

「何見てんだ平沢」

「あ、りょうくん！ねえねえ、私入る部活決めたよ！」

しまったあああ！よりによってこいつ、先に入りやがった。

「どこに入るんだ？」

「軽音部！」

……けいおん？

「へえ、そうか。なんで？」

「だって、軽い音楽って書くから簡単な事しかしないんだよね？」

思いつきり俺はずっこけた。いや、マジで。

「ちげえよ！って言うかなんで部活まで簡単な物を！？」

「だって、私とりえがないし……」

「あ……」

そうだ。こいつもあんまり目立った特徴というものがない。

勉強ができるわけでもなければ運動もできるわけでもなかった。授業はまともに聞かんわ、話聞かんわでなんと俺にすぎりついてきたことか……。

「だから、部活は挑戦した事ないものにしようと思って……」
「やばい、涙目になってる。このままじゃあ……!!」

「ほ、ほら見るよ！ギターとかやるらしいぜ！」

「え、そうなの？」

何をする部だと思ってたんだ。

「カスタネットとか、ハーモニカとか」

楽器部へ行け。

溜息をつき、そして

「……よし、行ってみるか」

「楽器部に行くの？」

「バカ、ちげーよ。軽音部だよ、軽音部」

えっ？つと平沢が不思議な物を見るような眼で見ってくる。

「とりあえず見学だけでもしてみようぜ。とりあえず見て、それから考えてみるのも悪くないんじゃないか？」

「う、うん！そうするっ！ありがとう、りょうくん！」

平沢に笑顔が戻った。よかった、泣かれなくて済んだ。

その次の日。

「りょうくん！早く早く！」

「あ、分かった分かった！すぐ行く！」

平沢にせかさされ、教科書を鞆へぶち込む。やべ、ipodが潰されてる。

「あ、そいやお前先生に何か紙出してなかったか？」

部室棟への廊下を歩きながら昼休憩の平沢の行動についての疑問を俺は口にした。

「うん、入部希望書」

「バカ野郎！！見学するだけだつて言つただらうが！！」
大丈夫かよこの天然……。

「あ！そうだつたあ〜……どうしよあ〜」

「つたく……大丈夫かよおい」

俺は頭を抱えた。まあ、多分大丈夫か。自信ないけど。

「こ、ここだよねえ……？」

「そうだな。つてか、何故緊張してる」

「だつて……間違えて入部希望書を出しちゃつたから……もし辞めるつて言つたらきつと、白いメイクした人が……ぎゃああああ！！」
どんな想像してるんだお前は。クラウ　ーさんは架空の人物だよ。
俺は扉のドアノブへ手をかけようとした時だつた。

「お！もしかして平沢唯さん！？」

後ろから女子の声がしたので振り向くとカチューシャをつけた少女がそこにいた。

その少女は俺の手を握り、

「おまちしておりましたあ〜！いやあ、すごいオーラを感じましたよ〜、名前を見るだけで！見た目もすごいオーラを感じます！！」
どうやらこいつは俺を平沢と勘違いしてるらしい。

「いや、平沢唯は俺じゃなくて……あつちだぞ」

「へ？……平沢唯さんですね！いや〜見た目からオーラ全開ですね」
棒読みだぞ。そしてそのオーラとやらは誰にでも出てるのかおい。

「んで、そつちは？」

「ああ、俺はこいつの付き添いみたいなも……「みんな〜、入部希望者が来たぞ〜」……人の話を聞かんかこらあ……！」

完全に無視だ。少女は平沢の手を取り、軽音部の部室である音楽準備室へと連れ去つた。

俺も溜息交じりに後に続いた。

「よっこそ軽音部へ！」

「歓迎いたします！」

……美女がそこにいた。

黒髪のロングヘアの少女に金髪の少女。

この二人にはまさに美と言う言葉が似合いそうだ。

だが二人は俺を見て、金髪は疑問の目を、黒髪はちょっと動揺していた。

「そちらの男の子は？」

「俺は付き添いで……」「よーしムギ！お茶の準備だあ！」……

……このカチューシャは俺に恨みでもあんのか？

それから数分後、俺と平沢は机に座らされ、目の前には紅茶とクリームとフルーツたっぷりのケーキがあった。

「どうぞ、召し上がって」

俺はフォークを手に取り、ケーキを一口。

「……うめえ！」

つい口に出してしまうぐらい美味しかった。手作りか？

是非作り方を教えてもらいたいぐらいのうまさだ。

「平沢さんはどんなバンドが好きなの？」

平沢を横目で見ると、返答に困っていた。

バンドとかどんなのがあるか知らねえのかよ。っていつかバンドって言葉すら分かってるのか。

「好きなギタリストとかは？」

おいおい、やばいんじゃないやねえのこれ。

て言っても俺もあんま知らねえしなあ……、アニソン歌手とか声優ならまだなんとか。

「あのっ……！」

平沢が突然立ち上がった。

「実は私、本当はギター弾けないんです！しかもホントは見学しにきただけで……」

ああ、言っちゃった。代わりに俺が言おうと思ったのだが。

だがまさかちゃんと言うとは……やっぱ根はしっかり者なんだな、

こいつ。

「私……本当はもっと違う楽器をやるのかと」

「おいおい、あん時の俺の話聞いてなかったのかよ!? なんか悲しくなってきた……」

「どんな楽器ならできるの?」

「金髪が聞いた。ナイスフォローだ！」

「カステ……ハーモニカ!」

「ああ、それならここに……」

「ごめんなさいできません」

「お前ハーモニカ出来んかったんかい!？」

「そしてお前は何故ハーモニカを携行している。」

「さてと、どうするべきか。」

「あ、そういえば……」。

俺は昼休憩に真鍋から言われた事を思い出した。

『え? 平沢を軽音部へ入れてやるのを手伝ってやれ?』

『うん、あの子……中学の時は部活なんかしてなかったし、やっぱり、何か趣味が出来れば、きっとあの子も変わるんじゃないか?』

『て』

『はあ……』

『それにあの子……』

『うん?』

『ううん、なんでもない。おねがいできるかしら?』

『まあ……出来る限りはやってみるよ』

「な、なあ! 3人とも何か演奏は出来るのか?」

俺も立ち上がり、そういった。

「3人の演奏を見れば、何か変わるかもしれない。」

「そ、それだ!」

カチューシャは閃いたように顔が輝いた。

演奏を見れば平沢がもしかしたら入る気になるかもしれない。そう思ったから言ってみたんだが。

それから、3人は演奏の準備を始めた。

カチューシヤはドラムで、黒髪はベース、金髪はキーボードか。んじゃあ後はギターとかがいるのか。

俺と平沢は3人が楽器の調整をしているところを椅子に座って見ていた。

平沢は3人の姿を今までにない歓喜と興奮に満ちた目で見つめている。

俺もその姿を見ていた。

楽器か……そいや、俺もギターちよつといじってたな。

……いや、いじらされたっていうか。

「よし、始めるか!」

カチューシヤが準備完了の合図をすると、鉢を上にあげ、

「1、2、3、4……」

4と言った瞬間、同時に演奏が始まった。

曲は翼をくださいだった。なつかしいなあ、小学校の時これの歌詞変えてよく授業中に歌って怒られたっけ。

それから2分間、この音楽準備室は翼をくださいの音色でいっぱいとなった。

やがて演奏が終わると、平沢が急にたちあがって歓声を上げながら拍手を送っていた。

「えへへ……どうだった?」

「なんていうか、凄く言葉にしにくいんですけど……」

「うんうん」

入る気になったか。

これだよやく俺のミッションも……。

「あんまりうまくないですねー!」

……追加でミッションを増やすな。

っていうか何故？何故そういう事をズバツと言う？

すげえよ。でもそのズバツと言うスキルはもつと別のところで使えよ。国会とか。

「でも、なんだか凄く楽しそうでした」

あれ、言葉が続いてる。

「私、この部に入部します！」

……大佐、任務完了だ。帰還するぞ。

どうやらさっきの演奏は心に強く伝わったらしい。

「やったあああ！4人目だああ！！」

カチューシャが喜んでる。よほど嬉しかったのだろう。

さて、俺は帰るか。っと、回れ右をしようとする……。

「だああああ、しまったあああ！」

……大佐、まだ任務が残っていた。

なにやら再び問題発生らしい。

「校則ではクラブ活動は5人以上じゃないと駄目だったあああ！！」

生徒手帳を瞬時に開くと確かにそう書かれてあった。

……後ろからなにやら視線を感じる。

誰かが、誰かこっちを見ている！！

振り向くと、美女4人が俺の方を見ていた。

その目は入れ入れと言わんばかりの目をしていた。

……本気で考えた。

入る？軽音部に？部活に？……っていうか女ばかりだぞ？ハーレ

ムだぞ？どっかの救世主がよろこんで入りそうなとこだぞ？

第一、楽器は……引けたな。

……よし。

「……よっしゃ、俺も入る」

美女たちの目が入れ入れと言っていた目からやったあの目に変わった。

さてと……これから3年間、大変そうだな。
苦笑いを浮かべていた俺だった。

「あ、そうだ。毎日おかし食べれるよな？」

「はい、もちろん」

良かった、少なくとも損はないみたいだな。

2 「楽器！そして過去！」

さて、俺が軽音部に入って1週間が経った。

今のところ対した活動はしてないし、練習すらしていない。

……んじゃあ何してるのか？

ケーキ食ってる、雑談してる、以上。

……お前らホントに軽音部かって？

ああ。軽音部だよ。うん。

いや、いいじゃん別に。

ほらあれだ。曲を演奏するにはチームワークが必要だろ？だからこれ練習の内だ。

……みたいなことなにかのけいおんの小説で言ってたなあ。

「アンタ、最近帰りが遅いけど何やってんの？」

夕食の席でバカ姉貴こと、日暮雫はそうやってきた。

「ああ、部活入ったから」

肉を口に入れ、米をかきこむ。

するとこいつはなにやらあわてた様子を見せ、

「あんた、もう『あんな事』にはならないわよね？」

箸の動きが止まった。

それと同時に何故かテレビの音が聞こえない。

「……大丈夫だよ。第一軽音部だぜ？どうやってたら怪我すんだよ」

「軽音部！？……アンタ、軽音部に入ったの！？」

ああ、まあ。

「アンタ楽器なんか弾け……弾けたわね」

「ああ、ホントは弾くつもりなんかなかったけどよ」

お茶を口に流し込んだ後、茶碗とお椀を流しへ持っていく。

「……ま、いいけどさ。そういうのはアンタの自由だし。何弾くの？」

「一応ギターを」

「ふん。……ってアンタ、ギター持ってたっけ？」

……あ。

「え、りょうくんもなの？」

何だお前もか。

朝のHR前に平沢と昨日の夜の事（ギターがないっていう話）を話していた。

「こりゃあ軽音部のみんなと相談だな」

「じゃあ今日、言ってみようよ」

そうだな。

丁度のタイミングで担任の教師が教室へはいつてきた。

放課後、軽音部の部活タイム……なのだがやはりお菓子食べて雑談してだった。

「そついえば平沢さん、もうギターは買った？」

黒髪の秋山澪が平沢にギターの事を言っ来て来た。なんだ持ってないの知ってたのか。

「唯でいいよ」

待て待て、先にギターの事を答えてやれよ。

秋山はしばらく悩んでいたがやがて小さな声で唯と呼んだ。

その様子に平沢はとて心打たれたらしい。まあ仕方ない。俺もきたぐらいだから。

「日暮くんも、ギターは買ったの？」

金髪こと、琴吹紬も俺に聞いてきた。答えはNO。

「おい、これじゃあなんにも始まらないぞ」

秋山の言うとおりだ。一体何の為に軽音部に入ったんだ。

「よっしゃあ！じゃあ次の休みにみんなで買いに行こうぜ！」

カチューシャの田井中律（部長）が叫んだ。

と言う訳で次の休みは俺と平沢のギター探しの旅と言う訳になった。

「と言う事で金くれ」

「何円？」

さて何円なのだろう。

五千……なわけないか。

やっぱ八万ぐらいなのだろうか。

いや……下手すると百万単位？

「そんな訳ないでしょうに。ま、八万ぐらいならいいわよ」

「サンキュー、流石姉貴だ」

こういうときだけはホント役に立つ。

「よし、ご褒美に今日はハンバーグだ」

「わーい！ハンバーグ大好き〜！」

やれやれ、実は俺ら生まれた順番逆なんじゃね？

そんな事を思いながら俺はキッチンで夕飯の支度を始める。

……え？飯はお前が作るのか？

そうだよ。だって親いないし。姉貴は作れないし。

なんで親がないのか？……ま、色々とな。

……知りたい？

「お母さんね、お父さんと離婚するの」

あの時から歯車が狂い始めたんだと思う。そうだ、絶対に。

それを言ったお袋はその2日後、俺と姉貴を連れて家を出た。親父を残して。

その時俺は小学2年生であまり今の状況が理解できなかった。姉貴は既に中1だったため、その状況は大変理解していた。だから……毎晩毎晩俺が寝た後にお袋と姉貴は喧嘩してたんだと思う。

俺は前の親父は好きだった。優しくかつたし、お袋が惚れて結婚したのもよくわかる。

姉貴に聞くと親父とお袋は高校生の時に会い、そのまま二人とも高校を中退し、結婚して俺たちを生んだらしい。

親の反対を聞かずに結婚したため、二人の両親とはほぼ絶縁状態だったと言う。

どうりで毎年うちだけ『おじいちゃん』と『おばあちゃん』の家には行かないわけだ。

そして母親は夜の商売を始めた。水商売って奴だ。

まあそれなり家は裕福になっていったし、俺も状況は理解していなかった為、別に気にしなかった。

そもそも俺は3人で少しの間、親父の元を離れて生活しているだけなのだと思っていた。

俺が4年生の時、お袋は一人の男を連れて家に帰ってきた。

そしてお袋はこう言った。

「この人がお父さんよ」

……そこで俺は今まで立たされていた状況にようやく理解できた。

『俺の両親はあの時離婚したのだと』

そう考えるとなんか……自分がアホみたいに思えてきた。

なんであの時俺はあの優しかった親父の元に残らなかったのか。なんであの時俺はこんな糞女にひよこひよこついで行ったのか。

バカだよ。自分の運命を呪ったよ。

だがそんな事も時間が経つと忘れていった。いや、忘れさせられたと言っか。

自分の欲しいものは何でも買ってくれた。

自分の食べたいものは何でも食べさせてくれた。

自分の行きたいところに好きなだけ、好きな時に連れて行ってくれた。

なんでも自由だった。口に出せばなんでも手元に置かれていた。

嬉しかった。楽しかった。ああ。ホントに。

やがて俺はあの優しい親父を忘れ、この『新しい』親父を本当の父親のように慕った。

6年の時、『新しい』親父は俺にギターを教えてくれた。この人の趣味だった。

教え方も丁寧だったし、すぐに上手くなった。

遼祐、お前本当にギターうまくなったな。才能があるんじゃないか？

父さんの教え方がうまいからだよ。

いや、十分お父さんを超えているよ。ホントにお前は才能があるぞ。

そうかなあ……。

そして、俺が中2になって、いつものように学校から帰って、寄り道して、家に帰った。

今日の晩飯はなんだろう。今日は何のゲームをしよう。今日は何のアニメのDVDを見よう。

それがいつも考えている事だった。そして、その期待を胸に膨らま

せ、玄関の扉を開けた。

リビングへ行くと、姉貴が座り込んでいた。

何やってんだ姉貴？それより父さんは？

……いないよ。

いない？意味が分かんねえ事言うなよ。

『新しい』親父の部屋の扉を開けると、中はからっぽだった。

おかしい、いつもならここでパソコンに向かってパチパチやってるのに。そのパソコンすらない。っていうか本当に何も無い。

お袋の部屋を開けると、そこも何も無い真っ白な空間があるだけだった。

リビングへ戻り、姉貴に抗議する。

どういうことだよ！？二人ともどこへ行ったんだよ！？

どこにも行ってないよ。

ふざけてんじゃねえぞッ！？真面目に答えろ！！

いなかっただんだよ！！元々！！あたしに親なんか！！

姉貴は胸ぐらを掴んできた俺に怒鳴り返してきた。

……ふざけんな。いただろ。今日の朝。姉貴だつて見たじゃねえか。

いつもみたいにいつてらっしやいつて手振ってくれたあの二人を。

いないよ。あの時から親なんかいなかったんだよ。

……あの時？

父さんと母さんあいつが離婚したときから、あたしに親なんかいなかったんだよ！！

その言葉を聞いて、俺の全身から力が一気に抜けた。足から次々と床に崩れ落ち、俺はただ黙っている事しかできなかった。

姉貴は泣き崩れ、俺はその姿を見る事しかできなかった。

ふと、俺はテーブルの上に置いてあった封筒を手を取った。中身は通帳と何枚かのキャッシュカードだった。

通帳には少なくとも20年ぐらいは働く必要がないくらいの金額が
しるされていた。

はは、捨てるけどとりあえず生きてるってか？

あの日から何もかもが変わった。

話しは変わるが俺はバスケット部に所属していた。しかも自分で言うの
もあれだが結構強い。

大会が次の日だったので、放課後は必死に練習をしていた。

だが、俺はその次の日、大会に出る事は出来なかった。

練習中、仲間の一人が、俺の肩にぶつかってきたのだ。しかもかな
りの勢いで。

当然、俺は肩に怪我を負った。それだけじゃあない。

あなたの右肩は一生治りません。肩から上に手が伸びる事はあ
りません。

……医者にそう言われた時、何故か知らんが俺は笑っていた。

笑いながら、俺は泣いていた。笑い泣きなんかじゃない、多分、頭
がおかしくなっていたんだと思う。

ぶつかった奴には俺はあえて何も言わなかった。下手するとそいつ
の人生に関わる事かもしれない。

だから黙っておいた。するとどうだ。

バスケット部で一番仲がいい奴から、ぶつかってきた奴がとんでもない
事を言っていた事を聞いた。

どうやら、そいつは俺がいるせいでスタメンに入れない事を悔やん
でおり、わざとぶつかってきたらしい。

そして一生治らないような怪我をすれば、そいつがずっとスタメン
の地位を取れる事を狙ってやったららしい。

……、なんだろう。もうどうでもよくなってきた。その後、俺は退部届を顧問の机に叩きつけた。

あれからだ。俺が変わり始めたのは。

最初はあの時だった。

あの日からなにやってもやる気がおきず、ただボケーっと生きてるだけだった。

学校からの帰り、ただブラブラと裏路地から家へ帰宅していると、俺の左肩に鈍い痛みが走った。

俺はそのぶつかった人に謝らずにそのまま歩き続けた。

おい、ちょっといいかなあ？

あゝあ、最悪だ。ホントついてねえな最近。

なんすか。俺早く帰りたいんすけど。

ふり返るといかにも不良と呼ばれそうな高校生ぐらいの男が立っており、口にはたばこらしきものを加えていた。

ぶつかったのに謝らないって正直どうよ？

ああ、すいませんした。ぶつかってごめんなさい。謝らないで
ごめんなさい。

今思うと明らかに喧嘩売ってるよなこれ。まあしょうがねえか、今思うとあの時の俺ってホント魂抜けたただの抜け殻見たいだったもんな。

いいよお、許してやる。

んじゃそういうことで、と言おうとして帰ろうとすると、左頬に激痛が走り、そのまま吹き飛ばされ、壁に背中を打った。

口の中が切れ、血が溢れるようににじみ出る。結構痛かった。

俺らに殴られたら

後ろから2人ほど仲間らしき　　っていつか仲間が現れた。

その前に語尾に音符つけんなよ、気色悪い。

さっき殴ってきた兄ちゃん俺に足の裏を向け、そのまま俺を踏み

つぶそうとする。

その時だった。頭の中でプツンと何かが切れる音がしたような気がする。

踏みつけようとする足のふくらはぎを左手で掴み、右手でふくらはぎを押し込み、圧迫する。

5秒ぐらいその行動をしていると、掴んでいた方の手から気持ちいいほど血が吹き出た。いや、俺の手からではなく、不良のふくらはぎからだった。

不良はふくらはぎを押さえて、地面をころげまわっている。仲間の二人が、俺に向かって殴りつけようとする。

なんだろうなあ、あん時程楽しかった時はなかったぜ。だってさあ、俺あんとき笑ってたもん。それは覚えてるわ。

気がつくとも天気は崩れて雨が降っており、雫が俺の体を打ち、容赦なく濡らす。

地面には不良が倒れていた。まだ息はある。

本来は救急車とか呼ぶべきなんだろうが、俺はポケットに手を突っ込んで、そのまま家路をついた。

俺の口元には、未だに笑みが残ってた。

次の日、俺は校長室に呼び出しを食らわされていた。まあ当然の事だが。

校長室に入ると、校長のほかにも教頭と担任がいた。そしてもちろん昨日の出来事を散々と言われた。

そして停学処分を見事に受けた。だが俺は停学にはならなかった。何故ならそのすぐ後に俺が学校をやめたからだ。

どうしてか？当たり前だろ、校長ぶっ飛ばしたんだから。

何故ぶっ飛ばしたか……、あいつが俺の事をこんな風に言って来たからだ。

君の様な人生の落ちこぼれは、本校にはいない。

人生の落ちこぼれ？

あいつらが逃げた事を言ってるのか？

俺が右肩壊した事を言ってるのか？

不良どもと喧嘩したから言ってるのか？

気がつくよ、俺は校長の襟元掴んで、

いらねえんなら学校辞めてやるよ。

そう呟くと、俺の左拳が、校長の頬に激突していた。

そこで俺はこの学校を去った。

その後、俺は別の学校へ転入した。俺が住んでいる地域で一番悪の学校「楠公中学校」だった。

もちろん、最初は手荒で猛烈な歓迎を受けた。俺はその歓迎を見事にあだで返した。

気がつくよ、俺はこの学校のトップになっていた。なりたかったわけじゃない。ただ気がつくとなってたんだ。

だが今思うとこんな事して何の得があつたんだ？

『新しい親父』とお袋が帰ってくるのか？俺の右肩が返ってくるのか？

そんな疑問が頭から離れなかった。そんな日々を毎日続いていた。

ある日の事だった。

部屋で高校についての雑誌を俺は読んでいた。

もう中3なので、入る高校を決めなければならぬ。入れるかどうかしらんが。

ふと、俺はある記事に真剣に目を通した。

それは女子校であった「桜が丘高校」の共学になる事についての記

事だった。

ここは結構な進学校と聞いた事があるため、俺は一応受ける事にした。

その後、俺の受験番号が、合格者の掲示板のところに乗っていた。なんだ、対した事ねえじゃんと思つた。

そりゃそうだ。この悪の中学に入ってからロクに勉強なんかしてなかつたんだから。

だから必死で勉強した。ホント死に物狂いで。

家事は出来ないくせに勉強は出来る姉貴にも教えてもらった結果がこれだ。

へ、様あ見る。俺の事を人生の落ちこぼれとか言つたゴミ校長め。こつから這い上がつてやるよ、落ちこぼれじゃなくなるようにな。

あれから、ケンカとかそういうのは出来るだけしないようにしていた。まあ、どうせするかもしれんが。

……そして今に至るわけである。

「なんか、今思うと、色々あつたんだな、俺つて」

俺だけじゃないが。

それにしても、あいつら今何やってんだらうな。まあ知つたこつちやないが。

「……やべ、早く寝ないと明日遅刻しちまう」

明日も早く起きて、学校行って、軽音部のみんなとワイワイやって、楽しもう。

なんか、俺の人生結構充実し始めたな。

早く明日が来ないかな、楽しみだな。

そんな事を思いながら、俺は眠りについた。

登場人物紹介（オリキャラ＋原作キャラ）（前書き）

一部ネタバレ要素が含まれております。ご注意ください。

登場人物紹介（オリキャラ＋原作キャラ）

【軽音部の部員】

名前：日暮 遼祐ひぐらし りょうすけ

詳細：身長168？ 体重59キロ 血液型A B型 誕生日5月2

9日（ふたご座）

本作の主人公。右利き。（肩より上に腕を挙げるときは左手を使う。理由は後述）

ポジションはリズムギター。（梓が入部すると、二人目のリードギターになる）また、一応経費担当。

共学となった桜高に入学する。その入学式の日、唯と出会った事により、物語が始まる。

基本、彼の一人称で物語が展開する。

軽音部の中では濼に続いて常識人でツツコミ担当なのだが、たまにボケ側に入ったりする。最近はほとんどボケしなくなってきた様な気がする。

無類のゲーム・アニメオタクで、彼の言動から、その深さが読み取る事が出来る。

また、ゲームについては本当に無類でエロゲーやギャルゲームなどもプレイしている。

特技は家事で、料理も洗濯も掃除もすべてこなせる。理由は彼の姉が家事ができないため。

他にもシューティングゲームやクレーンゲーム、などのゲーム全般。

両親が過去に離婚しており、新しく来た父親と、母親、姉で平和に過ごしていたが、新しく来た父親と母親が彼と姉を捨てて出て行った事により、彼の人生が狂い始めた。

中学の時はバスケット部に所属していたが、チームメイトによる

策略で右肩を壊し、バスケット部を辞めざるを得なかった。

それからは喧嘩に明け暮れ、やむなく学校を辞め、不良が集まる「楠公中学校」に転入し、その校で一番の地位を勝ち取った。町一番の不良校の一位だけあって、喧嘩はかなり強い。

性格は熱血漢と冷静沈着とお調子者を足したような性格。過去に女性と付き合った事はないが、硬派と言う訳ではなく、むしろ彼女が欲しいと思っている。ってというか結構な女好き。

唯をからかって快感が走ったりするなど、Sな面がある。また、かなりの妄想癖がある。

物覚えが良く、成績は今でこそどちらかと言えば優秀、のだが中学の時は勉強はまったくしておらず、高校入試の際に中学でやる勉強は一通り覚えた。だけど勉強は嫌い。

ちなみにかんりの音痴でボーカルを任せると、軽音部が破滅すると言われるほど壊滅的。（本人は半ば認めながらも否定している）

運動神経もバスケット部に所属して、エース候補だっただけあっていい。

旧姓は「浅井」で、父親（前の）の名字である。

名前は「ひぐらしのなく頃に」からと「頭文字D」の高橋涼介から来ている。

旧姓の浅井は「G線上の魔王」の主人公、浅井京介から。

イメージCV：前野智昭

名前：平沢 唯

詳細：本作のヒロイン。原作では主人公。

基本的な設定は原作と同じで、おっちょこちょいな天然ドジっ娘。ポジションはリードギターで、ボーカルでもある。甘いものとかわいいものが大好き。

CV：豊崎愛生

名前：秋山 澪 あきやま みお

詳細：軽音部で一番の常識人。ツッコミ役。

極度の恥ずかしがり屋で人見知り。だけど姉御口調でルックスは軽音部一。

ポジションはベースで、ボーカルも行う。

CV：日笠陽子

名前：田井中 律 たいなか りつ

詳細：元気が取り柄の軽音部部长。ドラム担当。愛称はりっちゃん。

ちまちました事が苦手だが、ボタン縫いだけは得意。

背と胸が小さいことがコンプレックスである。

CV：佐藤聡美

名前：琴吹 紬 ことぶき つむぎ

詳細：おっとりしたお嬢様。キーボード担当で、愛称はムギちゃん、ムギ。

濃厚で物静かな性格だが、怒らせると遼祐やさわ子よりも威圧感があるらしい。

百合属性があり、女の子同士のやりとりを見るとおっとりする。

CV：寿美菜子

名前：中野梓

詳細：真面目な新人部員。ポジションはリズムギター。あだ名はあずちゃん。

純粹で非常にまじめな性格だが、いじられたりすると澪以上のリアクションをする。ネコミミが非常に似合う。

実は甘い物（ケーキ、たい焼きなど）が大好き。

CV：竹達彩奈

【主人公の関係者】

名前：日暮 雫紅ひぐらし しずく

詳細：遼祐の姉。家事がまったく言っていないほどできず、遼祐如く、「ダメ姉貴」

国立大学4年生で、無駄に頭がいい。

また、モデル顔負けのプロポーションなのだが、男と付き合い合った事はない。……のだが、遼祐が高2になった直後に結婚すると発表し、そのまま家を出た。

イメージCV：斎藤千和

名前：門村 浩史かどむら ひろふみ

詳細：遼祐の親友。幼稚園の時から小学校の時までずっと同じクラスだったが、進学先の中学が別であったため、しばらく会ってなかったが高校で再会する。

頭が非常によく、進学先は国立大学と述べている。

また、脚が非常に速く、陸上部に所属している。

名前は「BALDR SKY」の主人公、門倉 甲と、「パルフェ」の高村 仁から来ている。

イメージCV：下野紘

名前：白銀 準也しろがね じゅんや

詳細：桜高1年生で、遼祐たちの一つ下の後輩。

遼祐が楠中にいた時のナンバー2で、遼祐の事を非常に慕っており、遼祐も彼の事を気に入っている。

だが桜高に入って色々と問題を起こしている問題児である。

名前の元ネタは「マブラヴ」及び「マブラヴ オルタネイティブ」の主人公、白銀 武より。

イメージCV：吉野裕行

名前：真鍋 和まわべ のどか

詳細：唯の幼馴染で、唯の理解者の一人。

真面目な性格で、部活はやらす、生徒会に入っている。

軽音部が学園祭のライブに出れたりするの手伝ったり、その他諸々軽音部を支えてくれている人物である。

CV：藤東知夏

名前：山中 さわ子やまなか

詳細：軽音部の顧問で、桜高の卒業生でもあり、さらに元軽音部である。

その腕は確かな物で、歯ギターや早弾きなどのテクニクをもっている。

だが実際は自分が作った服を部員に着せたりすると言っなんとまあ……あれな先生である。

CV：真田アサミ

名前：平沢 憂ひらさわ うい

詳細：唯の妹で、姉より何もかもが上と言っ凄い妹。

平沢家の家事も、両親がいないときは憂が全て行っている。

CV：米澤円

3 「バイト！そして仲間！」（前編）

春の暖かさもそろそろ本気を出しすぎて暑くなりそうな頃。俺はいつも通りに学校から帰宅している。

軽音部は相変わらずで、お菓子食べてお茶して雑談して、と言う当たり前のスケジュールをこなしている。

さて、話は変わるが明日は俺と平沢の楽器を軽音部のみんなで行く事になっている。

前回、俺は姉貴にギター代を頂戴し、こっそり新型P 3を買いに行くと言う誘惑に負けず、8万円は机の引き出しにある封筒にきっちりガードされてある。

家に帰り、俺はいつものように鞆をベッドに放り出すと、夕飯の支度始める。

今日は何がいいか、冷蔵庫を開けながらそう思っていた時だった。ポケットに入れっぱなしだった携帯に内蔵されているバイブレーションが揺れ、俺の太ももを刺激する。

さらに俺のお気に入りのゲーソンが流れているので電話だ。ポケットに手を入れ、携帯の液晶パネルを確認する。

そこには黒い文字で『姉貴』と書かれていた。

さて、何の用だろう。通話ボタンをポチッと押す。

「はいはい」

『もしもし遼祐？あのね、今日友達と飲みに行くからご飯いらな〜い』

……やれやれ、またいつかのよう酔っている姉貴をマンションの下まで迎えに行かなければならないのかもしれないのか。

「はいはい。んじゃごゆつくり」

会話終了のボタンを押し、携帯をポケットへ入れる。

姉貴がいらないなら夕食は適当でいいよな。……オムライスにする

か。

……ケチャップと卵ねえし。

「つたくよお……、まだなのかよ……」

俺は集合場所でイライラしながら足踏みしている。

「まあまあ、女の子は色々と準備が長いんだよ」

田井中が遅れてきている人物をフォローする。だがいくらなんでも遅すぎだ。

時計を見ると10時15分。すでに15分も遅刻している。

「で、電話してみたらいんじゃないか？」

と秋山。そうするか。って言うかなんでさっきうるたえた？

ポケットから携帯を取り出し、平沢の電話番号の検索を始めようとすると、

「お、来た来た。唯、こっちこっち！」

田井中が声を挙げている。どうやら遅刻人の平沢が到着したようだ。平沢の方を見ると、こっちに向かって手を振っている。そのまま駆けだすと、目の前に歩いている男性とぶつかった。

おいおい、大丈夫かよ。

すると今度はどうだ。目の前に犬を連れて散歩している人に挨拶をするかと思いきや、犬をよしよしはじめたではないか。

後数メートルなのに……、たどり着けない……。

溜息をつく。既に到着している3人を見ると呆れたようなゲンナリしたような顔をしている。まあ仕方ないわな。

「日暮君、お金は大丈夫だった？」

琴吹が俺の所持金の心配をしてきた。

「ああ、姉貴に言って8万ぐらいもらって来た」

「ええ！？8万円！？」

平沢がびつくりしている。なんか衝撃を与えるような事言ったか俺？
「わたし5万円しか持ってきてないよお、足りるかなあ……？」
まあ大丈夫じゃね？中古とかだったらそれぐらいで足りるんじゃないかな？

「だといけど……あ！」

何かを発見した平沢は声を挙げた。

どうしたと聞く前に平沢は丁度左側にある洋服屋の外にある服を眺めていた。

「今なら買える……！」

おい、お前楽器は？

「ちよつと見るだけ……！」

半分誘惑されるように店に入っていく。

俺と田井中と秋山は同時に溜息をついた。

ああ、俺ホントに軽音部なんか入って良かったんだろうか？

まだ宇宙人とか未来人とか超能力者がいる部活に入った方がよかったかも……。

……それもそれであれだな。

それからと言うものの、とにかくまあ何をしに来たのか。

服を見終えたかと思うと今度は小物店へ行って、その次はケーキ屋。その次はゲーセンだった。

だがゲーセンだけは行ってよかったと思う。

「あゝ！まただゝ！！」

田井中が3度目のUFOキャッチャーのチャレンジを失敗する。

しょうがないとばかりに100円を機械に入れ、クレーンを操作する。

「おい、ずれてるぞ」

秋山が心配するが、俺は気にせずクレーンを落とす。

するとどうだ。丁度熊の人形の足を掴み、そのまま宙づり状態になり移動、そのままGETだ。

「す、すごい！」

「まあ、ざっとこんなもんだ」

平沢が拍手をし、俺は得意げに答える。

「日暮君！あれ取れるかなあ？」

琴吹が少し大きめのうさぎのぬいぐるみを指さす。

たやすい御用だ。ふたたび小銭を突っ込み、クレーンを移動。そのまま再びGETだ。

「すごい！」

田井中が拍手する。

それからみんなの注文をすべて受け入れ、すべて成功させた。

今日ほどゲームやっていて嬉しかった事はないだろう。

ありがとう、ゲームよ！

だが、何故か秋山は浮かない顔をしていた。

なんだろう、もしかして……。

俺嫌われてる？

「あゝ、疲れた」

ただいま俺たちは喫茶店で休憩している。

俺は意外と美味しかったチョコパフェを口に放り込みながら、何かを思い出す。

なんだ……？何かを忘れているような気がする……。

「楽器だ、楽器！」

秋山が腕を組んで言う。

ああ、そいやそうだった。完全に忘れてた。

そして俺たちは本来の目的である楽器屋に到着した。

店内に入るとギターや関連商品がところせましと並んでおり、平沢は歓声を挙げていた。

ギターが並んでいるところの下にふと目を通すと、ネックの部分が二つあるギターを発見した。

なんだあれ？まさかカイリー専用ギターか？……はは、まさかな。一人苦笑いした。

「ゆーい、どれがいいか決めた？」

と、田井中。っていうか俺、アウトオブ眼中かよ。泣けるぜ。

「なんか、選ぶ基準とかあるのかなあ？」

たくさんならんでいるギターの山を見ながら平沢がつぶやく。

「そりゃあるよ」

秋山が平沢の疑問解決をする。さすが秋山。

「ギターって音色はもちろん、重さやネックの太さとか色々あるんだ。だから女の子はネックが細い方が……」

「あ、このギター可愛い！」

聞いちゃいねえ……。

平沢が明るめの茶色っぽいギターの前に座り込み、しばらくならめっこする。なんだこいつ、ならめっこが趣味なのか？

俺もその様子を見て、ネックの部分の値札を見る。

「そのギター25万円するぞ」

わああ、すげえなあ、おい。何回か大企業にハックして売り飛ばさないとないと買えないんじゃないかね？

つて、いつから俺たちはシュミカム乗りになってんだ。俺は天才ハッカーでも記憶失った傭兵でもないぞ。

「これは流石に手が出ないや……」

平沢が残念そうに声を挙げている。まあ仕方ないわな。と、同情していると琴吹が平沢の隣に座り込み、

「このギターが欲しいの？」

「……うん」

でも流石にそればかりは無理だろ。

「ほら、あっちに安いのあるぜ？」

田井中が左側を指さす。たしかに俺や平沢の所持金で買えるものばかりだった。

だが平沢は相当気に入っているらしく、25万円のギターから離れ

ようとしなかった。

「そういえば、私も今のベースが欲しくて……」
思い出話を始める秋山。

「悩んで、悩んで……」

「っていうかお前は違う意味で悩んだんじゃないか？ 田井中から聞いた話では秋山は相当の恥ずかしがり屋らしいからな。

店員にこれ欲しいですっていうのに悩んだんじゃないか？

「あたしもドラムセットが欲しくて値切って値切って……」

田井中も思い出話を始める。

こいつが店員に「もう一声！」と値切る姿が思い浮かぶ。

「……店員さん泣いてたぞ」

おい、どんな値段で購入したんだ……？

「値切るって？」

おい、琴吹、それぐらい知つとけ…… ってこいつお嬢様だったな。

まあお嬢様なら値切る事なんかはないか。

「欲しいものを手に入れるために、努力と根性でまけさせる事だよ
！」

「すごい、憧れます！」

……憧れる要素がどこにあるんだよ？

って、平沢の事忘れてた。

しかし平沢は依然と25万のギターとにらめっこしている。

絶対そうだ。こいつにらめっこが趣味なんだよきつと。

しばらく黙りこんでいた俺たちだが、突如田井中が声を挙げ、

「よし！みんなバイトしよう！」

……バイト？マジかよ。

「え〜？！そんな悪いよ……」

「ま、いいんじゃない？俺は賛成だな。これも軽音部の活動って事で3年間共に過ごすギター選ぶんだ。欲しくないの買っても、楽しく活動できねえだろ？」

そう付け加え、田井中も琴吹も賛成サイドに就き、バイトを始める

事になった。

だが秋山はまた浮かない顔をしてる。

……やっぱ俺のせい？

「え？あんだ、バイトするの？」

「ああ、軽音部のみんなと一緒に」

夕飯の米を口にかきこむ。

「へえ、バイトねえ……アンタがねえ……」

なんだよ、文句あんのかよ。

「別に、ま、他のみんなを困らせないようにね。みんな女の子なんだから」

「心配すんな。任せろ。……ってなんで俺がハーレム状態だって知ってんだよ!？」

マジで驚いた。こいつ俺の事ストーカーしてんのか？

「しないわよアンタなんか。……まあ色々よね」
色々ってなんだよ。

「いいのよ、じゃ、がんばってね」

なんか腑に落ちないなあ……。

「そいやあんだ……」

ん？どうかした？

「自分のギターは？」

……平沢のギターの事で完全に忘れてた。

「なんのバイトがいいかなあ？」

部室でさっそくバイト探した。

と言うか俺が入って初めてお茶と雑談以外の事をした気がする。

「ティッシュを配るのは？」

田井中が提案するが、秋山が「無理……」と呟く。却下だな。

「ファーストフードはどうですか？」

琴吹が提案するがまたも秋山が「だめかも……」と呟く。また却下。
「ああそつか。遷にはハードル高いかもね」

「ただ秋山恥ずかしがり屋なんだよ。って言うか入試の面接よく受かったな。」

「怖い人が出るかと思うとインターホンが押せない……」

まあそりゃ分かるかもな。でも見た感じの家によるだろ。どんな家想像してんだよ。バイオハートの洋館でも想像したのか？

「ありゃ怖いわな。違う意味で。」

「オーダーが聞けない……、はうう！！」

秋山の頭のとっぺんからボンと何かが飛び出し、気絶しかける。

「やれやれ、こんなんじゃないやあなにも出来ないぞ？」

求人雑誌のページをぺらぺらとめくる。

すると、結構いいバイトが見つかった。

「え？どんなのだ？」

「交通と渋滞の調査だ。これなら人に話したりすることもないし、座ってるだけだし。これなら出来るだろ、秋山？」

「え、う、うん……」

やはり俺が話しかけるとなにかテンションが下がる。やっぱり嫌われているのか……？何か嫌われるようなことしたか俺？

さて、時はぶっ飛びバイト当日。

田井中から色々説明を聞かされ、カウンターをもらう。

二人ずつ、一時間で交代だそうだ。

「あ、俺は別に交代しなくてもいいぞ？」

「でももしたら日暮、死ぬぞ？」

死ぬか。別にそんな暑いわけでもないし、帽子もあるし。

結局、俺は固定で、4人が順番に交代することになった。

こうすれば秋山と二人きりで話できるしな。

だってそうだと、三年間一緒に活動する仲間なんだ、嫌われたまま終わるのはやだぜ？

最初は平沢だった。

まあついでにみんなと交流を深めるのも悪くないだろう。

「ねえねえりょうくん」

「どした？」

「あのね、……その」

平沢の顔がうつむいている。

普段は言いたい事ははっきりと言う（っていうか言い過ぎ）奴なのでこのような行動は非常に珍しい事だった。

まさか……、

『あのね、わたし……りょうくんの事が好きです！』

『そうか……じゃあお前の気持ちに応えないとな。俺も、お前のが好きだ』

『りょうくん……』

『平沢……』

むふ。むふふふ……、

って何考えてんだ俺ッ！

やばいな、ちよつとギャルゲーやエロゲーはしばらく控えておくか。最近エロ妄想が激しいな。

あ、バルド カイは別な。ありゃアクションゲームだから。

「あのね、わたしの事、唯って呼んでいいよ。なんだか言いにくそうだし」

「いや、別に言いにくくはないんだが……」

せいぜい作者が平沢ってわざわざ書くのがめんどろなぐらいだし。まあその方が作者の為にもなるか。

……ってなんでそんな心配するんだ。

「まあ、いいけど……んじゃひら……、ゆ、唯？」

「うんうん」

これでちょっとは深くなつたかな？

続いては田井中だった。

「なあ、日暮」

「あんだ？」

なんだこの唯とは違う反応の仕方は。

まあ仕方ないか。こいつ男勝りな性格してるし。

「さつき唯の事、名前で呼んでたよな？」

「ああ、あいつが呼べって言ったからな。……どうした、お前も律つて呼んでほしいのか？」

「え、なんで分かつたんだ？」

……そういう時はもうちょっと別の反応をしてほしかった。例えば……。

『え、べ、別に……ま、呼びたきや呼べばいいけどよ……』

ツンデレっぽく。

「まあ3年間一緒に過ごすんだからな。いつまでもそれじゃ色々とおあれだろ？」

「そうだな。んじゃ律、これからもよろしく」

「了解」

次は琴吹だ。いつそのことこいつも名前で呼ぼう。

と、何かきっかけを考えているとなんと向こうから呼べと言って来た。

……って作者。なんかだんだん適当になってるぞ。ちゃんと会話部分分け。ムギファンに怒られるぞ。

「えつと、日暮君？」

「ほいほい、なんだ？」

よろしい。この調子で頑張れ作者。

「えっと、日暮君の事、名前で呼んでいいかしら？」

「おう、いいぞ。んじゃこっちも呼んでいいか？」

「はい。じゃあよろしくお願いします、遼祐君」

「よろしくな、紬」

え？なんでムギって呼ばないのか？

みんながみんなムギって呼ぶのはあれだろ。しかも色んなオリ主小説でも大抵はムギって主人公が呼んでるんだ。

俺ぐらい紬でいいだろ？……うん。

さて、いよいよ目的の秋山が来た。

俺の隣の椅子に座ると、そのまま黙ったままだ。

……俺も話をかけたいが何故かこいつだけは中々話しかけられない。なんかこう……話しかけないでオーラが全開なんだよこいつ。

「あ、あのさあ……」

「あ、う、うん……」

やばい、この先なんにも考えてないぞ。どうするよ俺……？

……しょうがない、こうなったら真っ向勝負だ。自爆したらしたらで知るかボケ。

「お前、もしかして俺の事嫌い……？」

「え、あ、えっと……その……」

あゝ、やっぱりか。

……なんかシヨックだなあ……、秋山結構可愛かったからなあ……。

「その、別に……嫌ってるわけじゃないんだ」

……神よ、まだ俺を見捨ててなかったか。

「んじゃ、なんなんだ？」

「その……男の子とはあんまり話した事なくて……だから……」
そいう事だったのか。

一度深呼吸し、俺は話を続けることにした。

「分かった。じゃあ嫌いってわけじゃないんだよね？」

「う、うん……」

「じゃあ分かった。俺を女の子と思え。そうすれば話しやすいだろ？」

……自分でもこれはかなりおかしいと思った。
そんな事無理に決まってるだろうに……。

「……ぷっ」

へ？

「ぷっ……ふふふ……あははははは！！」

突然秋山が爆笑し始めたので俺はかなり驚いた。
やばい、ついに頭がおかしくなったか？

「そうじゃない……ふふふ、日暮が女の子だと思つと……おかしくて……あはははは！」

……なんか、どういえばいいんだろう。

成功したの……かな？

「分かった……じゃあひぐ……、遼祐の事は、女の子だと思つて話す」

「いや、自分で言いだしといてあれだが……、それは勘弁してくれ」

「冗談だよ。でも、これからは、私も遼祐とは仲良くする」

成功したな。完全に。

……ん？遼祐？名前で呼んだよなこいつ……、あ、そつだ。

俺の心の悪戯心が何やら変な事をおもいついた。

「ああ、分かった。改めてよろしくな……漣？」

秋山の顔がみるみる内に赤くなっていく。いきなり名前で呼ばれたのでびっくりしたのだろう。

「お前が名前で呼んだからな。俺も名前で呼ばしてもらつぞ？」

「……うん」

これで全部解決だな。さて、バイト頑張りますか。

「あ、車数えてねえや。まあ適当にカウンター回しとくか」

「おい」

4「バイト！そして仲間！」（後編）

平沢唯……称号：アホな子。

秋山澪……称号：極度の恥ずかしがり屋。

田井中律……称号：元気が取り柄。

琴吹紬……称号：おっとりお嬢様。

こんな個性豊かな女の子たちと毎日過ごせると言つとあなたは どうする？

いいだろうねえ。この中から好きな子見つけて、付き合つて、結婚して、子供作つて、幸せだろうなあ。

……とまあこんな厨二病的発言はさておき、ただいまバイトの昼休憩中だ。

唯の妹が作った弁当と、紬が持つてきたお茶とお菓子をいただき、大満足だった。

ただいま俺はサンドイッチを口にしながら雲が丁度いいくらいにある青空を眺めていた。

綺麗だなあ。つて言うか天気いいなあ。こんな日に外で食べる昼食はやっぱり最高だわ、うん。

「つて言うか紬、こんな高そうなお菓子毎日にもらつてるけどいいのか？」

モンブランを口にしながら、紬に言う。

確かにまったくその通りだ。ホント高そうなお菓子を毎日毎日食べさせてもらっているわけで、流石にこんなにもらつと少し遠慮してしまう。

だが、紬は笑顔で、

「いいのよ、いつも色々な方から頂くんだけど、家に置いておいても、余らせてしまうから」

と言う。つていうかこんなのいつももらえるってホント凄いなな紬ん家。

ふと俺は寝っ転がって雲を眺めながら指を動かしている澪と律を見る。

おいおい、まさか雲の数を数えてるんじゃないだろうな？職業病になりかけてるぞお前ら……。

とこんな感じで1日目が終了した。なんか色々と疲れたがみんなとも仲良くなれたし、良かったよ。

俺たちはバス停付近で解散することになった。

「じゃあ私は駅へ行くから」

「あたしと澪はバス」

んじゃ、俺と唯は歩きか。

「じゃあ、明日も……」お菓子よろしく！「……頑張りましょうって言おうとしたんだけど……」

絢が苦笑いする。俺もだ。

とか言いながらも、俺たちは解散となった。

唯と俺は帰る道が途中まで一緒なので、共に帰る事にした。

その時、俺と唯が一緒に歩き出すと、途中で回れ右をして、

「みんなー！」

3人が唯の方を向く。俺は隣にいたので、最初から向いている。

「本当にありがとうね！わたし……ギター買ったら毎日練習するからー！」

その時だった。唯の横顔と夕日が丁度いいぐらいにミックスされ、とんでもない極上美人に見えた。

しばらく見惚れいると、どうやら唯が俺の視線に気づいたらしく、

「どうしたのりょうくん？」

「え、あ、えっと、なんでもない……」

「顔赤いよ？」

「な、何言っただ！夕日のせいだよ！さっさと帰るぞー！」

俺は恥ずかしくなって、駈け出して行った。唯も後を追いかけてきた。

そしていつのまにか俺たちは競走を始めていた。

次の日もしっかり働いた。もちろんお菓子とお茶も弁当も腹いっぱい食べた。

「一日8千円で2日働いて1万6千円……それが5人で8万円で唯の所持金が5万円、合わすと13万……まだまだかあ……」

みんながもらった給料を唯に渡し、その間に俺は計算するが、やはり足りない。

まあこつこつバイトするしかねえよな。と俺が言った時だった。

「みんなやっぱいいよ」

……はい？

「バイト代はみんな自分の為に使って」

と言いながらバイト代をみんなに返す。

「やっぱり自分のお金で買えるギター買うよ。早くみんなと練習したいし」

なんて言えばいいんだろうなあ。こいつって優しいのは優しいんだろうけどさ、なんかこつ……言葉にしにくいな。

結局みんな唯のさっきの言葉に納得し、何も言わなかった。俺は返してもらった封筒を眺めながら、もやもやした気持ちを無理やり味わい続けられた。

まあ、唯もみんなも納得してるんだから、それでいいか。もやもやをデリートし、俺は家路についた。

そして次の日。

学校の帰りに楽器店へ向かい、唯のギターを探す。……あ、俺のもだった。

ギターの棚を見ると25万円ギターは今も置かれていた。

みんながそこを通り過ぎていくと、唯は一人立ち止まり、ギターを眺める。

俺がその姿を見てみると、唯が「えへへ……」とごまかす。

「なんだかんだ言つてやつぱ欲しいんだな、ギター」

「よっしゃ、も一回バイトを……」

律がバイトを再び提案しようとした時だった。

「あ、ちよつと待つてて」

紬がその言葉を止め、もじやもじや頭の店員がいるレジへ向かう。

あ……もしかして……。なんか紬が今からやるうとしてしている事が分かつた気がする。

それから紬は笑顔で店員に話しかけた。しばらくすると店員がかなりあわてた様子を見せ、電卓を指で叩いた後、紬に電卓を見せる。

「もう一声」と言っているのが聞こえたので、間違いない。奴は値切っている。25万のギターを。

だが25万のギターを5万や13万に抑えるのは流石に無理だろうと思つたのだが、その思いは一瞬で打ち破られる。

「このギター、5万円で売ってくれるつて」

……マジでやりやがったこいつ……。

つて言うか一体どんな手を使つたんだよ。脅迫か？

「実はこのお店、うちの会社の系列で……」

ああ、なら理解できるわ。

苦笑をこぼしながら、店員を横目で見ると、なにやら涙目でこちらを見ている。

そりゃそうだよな。25万を5万に下げられて20万も損したんだもん。

正直俺ら下手するとブラックリストに入るんじゃないか？と思つたが、紬がいるかぎり安心だろうと、心の片隅で思つた。

「あ、そいや遼祐のギターは？」

そついやそつだ。完全に忘れてるよ俺。

ギターが並んでいる棚を眺めている。

色々あるが何か俺の心を射抜くようなギターが見つからない。上から下へ見ていくと、中段ぐらいにある一つのギターを見る。

それは赤と黒で色付けされているギターで、それで……。

これは父さんが高校の時から使ってるのでな……。

前の親父が幼い俺に笑顔で手に持っているギターの事を説明してくれている事を思い出す。

だが、その話の先が思い出せない。だが、その手に持っているギターはよく覚えている。

今俺の目の前にあるのがそのギターだ。だが何故。

俺は回れ右をして、レジへ走り出す。

「なああんた！あの赤と黒のギターって中古だよな！？」

「え、あ、はい……、1週間前に買い取りした商品ですが……」

鼓動が高鳴り続ける。嬉しさでも怒りでも悲しみでもない鼓動だ。間違いない、俺の……あの優しかった親父が……、この街にいる。

中学の時、あの女から親父は行方不明になったと聞いていた。

あの時は対して気にしていなかったが、あいつらが消えてから少し気にするようになっていた。

そして……、その親父の行方に関する重要な手掛かりが手に入った。

「その売っている人の住所とか分かるんですか！？」

「い、いえ……、買い取り時には当店では身分証明証を提示していただくだけで……」

店員からは残酷な答えが返ってきた。

「……そうですか……」

一気に俺のテンションが下がり、鼓動も鎮まる。

「なあ遼祐、どうしたんだよ？」

「あのギターの持ち主、知ってるのか？」

みんなが心配そうにこっちに歩み寄ってくる。

……ここで、俺の過去喋ってもしょうがないか。

「なんでもないよ、知り合いがあんたのギターと似たようなの持ってる……」

適当にごまかす。さっきも言った通り過去を喋っても何の意味がある。むしろ変な眼で見られるかもしれないし、気を遣わせてしまつかもしれない。そう思うと、なんか喋りたくなくなる。

「あ、すみません、その……」

俺は悩む。あのギターを購入するかどうか。

正直あんまり欲しくはない。あのギターには色々嫌な思い出が詰まりすぎている。

……俺は決意した。

「あのギター、ください」

俺が改めて、軽音部に入部した瞬間だった。

そして、同時に親父の行方を追う事を決めた瞬間だ。

「あんた、そのギター……！」

部屋に入ってきた姉貴がいきなりこの一言を口にする。失礼します、とか言えよ。

「なんだ、姉貴も覚えてたのかよ」

「当たり前でしょ……！でも、なんでそれが……」

俺はとりあえず経緯を解説する。

解説を終えると、姉貴が溜息をついた。

「これが運命だと思うと、アンタもつくづく不幸だねえ……」
「なんでだよ。」

「だって、そのギターには色々嫌な思い出が詰まってるでしょ」

まあ、それもそうだが。

「でもさあ、嫌な思い出があったって、あの人（本当の親父）自身に嫌な思い出はあんまないだろ」

「……そう言われてみれば……そうだけど……」
「それにさ……」

言葉を続ける。姉貴は疑問を抱える顔をする。

「本当の親父あの人、この辺にいるかもしれないしさ、俺、知りたいんだよ。
本当の親父とあの女なんで、あの二人が離婚したのか」

あそこから俺たちの運命は狂い始めた。

たとえ過去を変えられないにしても、真実だけでも知りたいだろ？

「このまま永遠に謎にしとくのは、後味悪くて嫌なんだよ。だから、本当の親父俺はあの人を見つけて、真相を聞く」

それが例えどんな真実でも、俺は前みたいに戻ったりしやしない。
い。

「……分かった。好きにしな。んじゃアタシ風呂入るから」

「はいはい……」

姉貴が俺の部屋の扉を閉めると、部屋の端っこに置いてある、親父のギターを見る。

これは父さんが高校の時から使ってるのでな……。

「……その後の言葉がなんだったか忘れたんだよなあ……、なんだっけかなあ……」

そこに何か真相を解くヒントがありそうな気がする。

……駄目だ。思い出せない。

「……あゝ、もういい!」

そんな事いつか思いだすはずだ　そう思いながら俺はギターを手に取る。

久しぶりにギター触るなあ……何年ぶりだろうか？

適当に音を鳴らしてみる。

……エレキギターなのでアンプに繋がないとやっぱり派手な音は出ない。

まあ、別にこのままでもいいか。

何か弾こうかと曲を考えていると、この前パソコンで見たあるゲームの弾いてみた動画的な物を思い出した。確かあれの説明文のところに、楽譜が載ってるサイトがあったな。パソコンを起動し、その楽譜を見る。まありハビリのつもりで弾けるようにしてみるか。

「ここがこうであるからにして……日暮君？」
うるさい。寝かせる。眠いんだ。

黒板の前に立って、訳のわからない事をぼそぼそと呟いている女教師の言葉を無視し、狸寝入りする。

唯がシャーペンで背中をつついて起こそうとするがそれでも無視。

浩史が小声で起こしてくるが無視。

和が指でつつくが無視。

「ノインツエーン、もう……」

浩史がいきなり何かを言いだすかと思えば、俺がアニメ・ゲーム史上最も好きなあの熱い名ゼリフの言いかけではないか……。

俺の中に眠るゲーム・アニメ大好き（オタク）魂に火が付き、いきなり飛び起き

「終わりにしようっ！！」

続きを言う。

……みんな何故か変な眼でこっちを見ている。

しかし何人かの男子は俺の方を輝いた瞳でこっちを見る。

こいつら元ネタ知ってるな……、まあ見た目から知ってる感全開であるが。

俺を最初に起こしてきた女教師をふと見ると、泣きそうな目でこちらを見てくる。先生も知ってるのか？、いや違うか。

溜息をつき、手で『どうぞお続けください』と手でジェスチャーを出し、意思表示すると、俺は席へ着く。

女教師はその後、また訳のわからない言葉をべちゃくちやと話し始めた。

また同志が増えそうだなと心の片隅で思いながら意味不明な言葉を無視し、窓から外を眺める事にした。

「お、ギター持つとさまになってるじゃん」
ふふふ、そうだろう？

律に褒められながら、俺は口元で微笑みを浮かべる。
ちなみに現在放課後で、今いる場所は部室である。

「何か弾けるのか？」

弾けるよ。昨日練習したのが。

俺はピックを持つと、深呼吸し、

「行くぜ！俺の歌を聞けえええ！！」

……決まったな。

曲が終了すると、部室が拍手でいっぱいになる。

「すげえ〜！ホントに初心者か！？」

あれ、言っただけじゃなかったっけ？俺経験者だぞ？

そう笑いながら言っただけ、ギターをスタンドへ置き、席へ着く。

「唯はどうだ！？」

律が唯の方へ向きながら何か1曲！と同じ意味の言葉を言い放つ。

唯はギターを持ち、ピックを持つと、弦にそれが触れる。

どんな曲が流れるか俺も楽しみにしたが、残念。期待外れだ。

しかも曲どころじゃない。

「チャルメラかっ！」

昔懐かしいメロディだ。ああ、なんか色々悲しいよ。あはははは
……。

「やつとスタートだな……」

漣が意味深な事喋りはじめる。まったくその通りだ、と漣の言葉に
同感する。

「俺たちの、軽音部が」

「目指すは武道館！」

やっぱりやりやがったこの空気ブレイカー律め。

いくらなんでもそりゃ難しいだろ。一流アーティストが苦勞の末、
やっと立てるステージなんだぜ？

余談だが俺は武道館へ行った事あるぞ。水樹奈々さんのライブで。

「その為には練習あるのみだよみんな！」

唯が珍しくまともな事を言う。

「じゃ、がんばりましょう！」

紬も賛同する。

「よっしゃ！今日が俺たち軽音部のスタートラインだ！はりきって
行こうぜ！！」

最後に俺が言うともみんなが一斉に「おゝ！」と言って拳を上につき
あげる。

なんか盛り上がってきた。俺の顔から笑みが絶えない。みんなもそ
うだった。

唯、漣、律、紬、これから3年間、よろしく頼むぜ。心の底でそう
思う俺だった。

さあ、始めようか。俺達軽音部が奏でる、最高のライブって奴をな
あ……

「エロゲーとかギャルゲーだったらここでOPに入るんだけどなあ

……」

「「「「「そういう事を言わない！！」「」「」「」

4「バイト！そして仲間！」（後編）（後書き）

あとがきは初めて書かしていただきます。

多分単行本とかで言えばここで一卷が終わるのかな？とそれぐらい書いたかなと思います。

今作では、良く見る暗い過去持ち主人公、日暮遼祐が主人公として話しが展開します。

ちなみにこの主人公、意外とモデルは作者自身であったりします。

（もちろん彼のオタク部分のみ）

他はよくエロゲーやギャルゲーで良く見る主人公っぽく仕上げておきます。絵に書く和前髪で目が見えなかったり、そんな感じですよ。

ちなみに彼のイメージは前野智昭さんですが、今日改めてけいおんを見直していると、店員役で出てたんですねwww

まあそんな事は気にせず（おい）前野さんの声で脳内再生してくださいまし。（声のイメージとしてはホワルバの冬弥の感じで）

さて、今作では一応唯がメインヒロインとなっております。まあ分かる方もいたと思いますが。

唯に関しては実は今作限定のとんでもない設定があります。

……どんな設定かは、それぞれ予想してください。

ヒントは、「笑いすぎると咳が出る」……やばい、言いすぎたかな？（偉そうにするな）

実は今作は、エンジェルビーツやクラナドを見た影響で作ったりしていたりします。

なので、遼祐の設定にこの二つの作品の主人公に似た設定があります。（基本クラナドの朋也ですが）

何はともあれ、これからよろしく願います

5 「勉強！そして親友！」

俺こと、日暮遼祐は桜が丘高校1年生。所属している部活は軽音部だ。

仲間は平沢唯、秋山澪、田井中律、琴吹紬の4人で俺を合わせると5人だ。

現在活動らしい活動はしていないわけだが、一応練習はしている。個人でだが。

「へえ、ギター買ったんだ」

俺の親友、浩史が俺のギターを物珍しいものを見るかのように観察し始める。

「じゃねえと何にも出来ねえだろ。何のために軽音部入ったんだよ」

「はは、それもそうだね」

はあ、と溜息をつくくと、浩史はこんな事を言い出した。

「そういえば、もうすぐ中間試験だね」

「ああ、そういえばそうだな」

……………。

……………はい？

「ちゅうかんしけん？」

「そうだよ？忘れてたの？」

「ナニソレタベモノ？オイシイノ？」

「おとなしく認めなよ……………、忘れてたって……………」

「ふざけんな！！中間試験だと！？そんなもの俺の権力を使って滅ぼしてやる！！」

「おまえにどんな権力があるんだ……………？」

早速部活仲間にこの事を抗議するとなにやら冷たい返答が返ってきた。

どんな権力？俺が本気を出せば……………って今思えばそんな権力一般人

の俺には無かった。

「まったく……、おとなしく勉強すればいいだろ？」

「いやあ、勉強きらいだち」

澪にそう言い放つと、俺の口を思いつき引つ張つてきた。

わあ痛い痛い痛い！ギブギブ！ごめんなさい澪たくん！！」

「澪たん言うな！！」

ますます痛くなる。

サーセン澪さくん！！許してえ〜！！

「はあ……勉強かあ……」

机に向かって適当に教科書をぺらぺらと開いているがどうにもやる気がわかない。

確かに中学の時（前の学校の時）は成績は良かったには良かったが、楠公に入ってから勉強はほとんどしてなかったので高校入試の際にやらなければならぬ勉強は全部覚えた。

あん時はまあ危機感を背中にずっしり背負った状態で行っていたので真面目に取り組んでいたが、今は……まあこんな感じだ。

「だりいなあ……」

シャーペンを鼻と口の間にはさんで唸る。まじでだるい。勉強なんか大嫌いだ。

…。

……。

……。

「ゲームしよ」

そうだ。プラス思考だ。まっすぐにとらえすぎるからこうなるんだ。何か別の事をしながら考える。すばらしい、さすが俺だ。

「さーて何しようかなあ……モダンウォーウエア2でもするか」

棚からソフトを引っ張り出し、PS に挿入。

さあ、行くぜ！！

「浩史い〜!! 助けてくれえ〜!!」

朝一番に教室で座って勉強している真面目な幼馴染にヘルプをかける。

「……やっぱり勉強してなかったんだ」

「当たり前だ! 誰がしてやるもんか勉強何か!」

「……威張って言わないでよ、そんな恥ずかしい事」

と、そんな感じで放課後はイッツァ、勉強タイムとなった。

「そこはこうで、こうだから……」

「ほーほー、なるほどねえ……あの人何言ってるのか全然分かんないからなあ……やっぱりお前の教え方が分かりやすいわ」

「……遼祐が単に聞いてないだけでしょ」

いやあ、と照れながら頭を掻く。だが照れるような事じゃない。つて言うか褒めてない。

……しかしこいつの教え方はそこの教師より百倍うまい。マジで。

「おまえ先生になった方がいいんじゃない?」

「……そのつもりだよ」

そう、こいつの夢は先生になる事だった。

それが分かったのは小学校のだ。

……そいやこいつとなんで仲良くなったんだっけかな……?

やーい、泣き虫浩史〜!

悔しかったら取り返してみろ〜!

幼稚園の時、一人公園でブランコを漕いでいるとこんな声を聞いていた。

いじめられているの顔と名前は知っているが、話した事はない奴で、何よりそいつが浩史だった。

いじめている奴らは良く見るとこの前俺がちょっと懲らしめてやった奴だった。こりてねえじゃねえか。

……でも俺はあんまり動きたくなかった。この前あいつがいじめていた奴は俺が比較的仲良くしていた奴だったのでちょっと懲らしめてやったのだが、話した事ない奴をどうして助けなきゃならないのか。

人間なんてそんなもんだと思う。前、先生が目の前でいじめられている子がいたらどうする？とか聞いてきてある奴は助けると言った。だが先生はその後、もしいじめられているのが知らない子だったら？と聞くと、その子は迷わず助けてると言った。

だが実際、その次の日、あいつがいじめられているのにそいつは助けてやらなかった。

結局人間なんてそんなもんだ。口ではいい事を言っておきながら実際そうなる何もしないのだ。

俺はそのままブランコを下りて、帰ろうとした。

……だが何故だろう、俺の体は家ではなく、彼らの方へ向かって行っていた。

おいお前ら。

……うわ、遼祐君だ！！

俺の顔を見た瞬間、顔が青ざめた。

そりゃそうだ。ちょっと懲らしめてやったんだから。

……俺の両親が呼ばれるぐらい。

もう一回僕たちを殴ってみろ！またパパに言いつけてやるからな！

ああ、んじゃ言いつけないようにするためにその口を痛くしてやる。

と言って襟元を掴んでこっちに近づけると、そいつの口を殴りつける。

うわ、血が出る。痛そうだ。

う、うわああああああ！

い……よ、いた……よ……。

悲鳴を挙げた片方は血を見た瞬間、逃げ出した。
殴った奴の方は、そいつの後を追いかけて行った。

大丈夫か？

……。

返事がない。ただの屍のようだ。……って違う。何度このネタやれば気が済むんだ作者よ。

浩史は顔を俯けて黙っているだけだった。まったく、何のために助けてやったんだ。

……。

おい。

……。

聞け。

……。

話しかけてんだから返事ぐらいしろやあ！！

やばい、つい怒鳴ってしまった。

うええええん、と泣く浩史。俺が泣かせてしまった。

それでも俺の怒りは収まらなかった。

あのなあ、お前なんでそうやってすぐ泣くんだよ！！

だって、だって……僕弱いもん……！

弱いなら弱いなりになんとかするって言う事はおもいつかねえのか！！

その時、ピタッと俺の耳に浩史の泣き声が聞こえなくなる。もしかして病気？

と思ったがよく見ると浩史は泣きやんでおり、こっちに目を向けていた。

俺は話を続ける。

……弱いならさ、教えてやる。どうやって強くなるか。
どうやって？

お前さ、仲いい奴いる？

首を横に振る。予想通りの反応だ。

幼稚園でも部屋の隅で一人、本読んでいるようなやつなので友達がい
ないことぐらいすぐわかった。

……ならさ、俺が仲良くなってやる。

え？

浩史が顔に疑問を張り付けたような表情をする。

俺は話を続けた。

俺のお父さんがね、言ってたんだ。一人ぼっちの奴は守ってや
れ。お前が輪に入れてやれって。

……。

だから、俺がお前を輪に入れて、強くしてやる。

人間はみんな弱いんだ。だから誰かと仲良くなって、みんなで
強くなるんだ。……これもお父さんが言ってた。

俺がそう言い終わると、浩史はこちらを真正面から見て、

……分かった、僕、君と友達になる。

本当？

うん、僕、浩史。

俺は遼祐。……んじゃ浩史。

何、遼祐くん？

……俺の家でゲームしようぜ。

……うん！！

これがきっかけだ。今思えば、いかにもシンプルに仲良くなった。

だがそのシンプルさが、俺らをここまで仲良くしたのだと思う。

あれから浩史は幼稚園でも小学校でも俺のそばにいた。

そしてあいつがいじめられることはなくなった。第一は俺のそばに

いたからだと思う。

その次は、あいつが自身が強くなったから。だが俺みたいに力が強いわけでない。

精神的に強くなったんだ。第一に泣かなくなった、あの泣き虫が。そしてまああいつは元気に育った。あいつのお母さんからも感謝されたぐらいだからなあ。

ちなみに俺に着いてきてもう一つ変わったことがある。

それが発覚したのは、小学4年の時だった。

ねえ遼祐、昨日の夜中にやってるアニメ見た？

見ねえよ！っていうかなんで夜中！？

それがねえ、すごく面白くてね……なんかとにかく面白くて…

…。

……そう、俺がアニメやらゲームやらを教えたしまったせいでこいつはオタクの池にいつのまにか浸かってしまっていたのだ。

んで、俺はそんな話を聞いているうちに、俺自身もオタクになってしまい、今に至るわけである。

しかしあいつはどちらかと言えばアニメ特化型で、俺はゲーム特化型だ。まあそれでも両方に対応できる能力ぐらいは十分すぎるぐらいあった。

そして小学校6年の時。

え、お前違う中学行くのか？

それは卒業式が眼と鼻の先に迫っている3月の日の事だった。

うん……住む場所は変わらないけど中学は結構遠いところにあるところに行くんだ。

そっか。……ま、お前は頭いいからな。いいところ行って、自分の合つところに行け。

こいつは既に俺がいなくても頑張れるぐらい強くなっていた。

そう、こいつはわずか6年でこんなに強くなったのだ。ホントに、見違えるくらい。

頑張れよ、浩史。

そっちこそね、遼祐。

そして俺は3年間、浩史の姿を見なかった。別に会いたいときに会えたのだが、俺が会わなかった。

最初の中1の時は結構会ってたのだが、あの事件があったから、俺はあいつと会わなくなった。

今の自分は、あいつの目の前に現れる資格はないと思ってたからだ。……というより、会うのが怖かった。

あいつはきつと中学になってかなり成長していると思う。だが俺はどうだ。

まったく成長していない。むしろ退化したように思える。

……あの時は、本当に俺は惨めだった。腕っ節だけで、他はすっからかんだった。

それが今はこんな風になっている。

仲間もできて、親友浩史とも再会できて、俺も少しは成長したかなと思う。

確かにこの前姉貴から、顔つきが中学の悪い時に比べて、全然変わったと言っていた。

……だが成長したのはそこだけで……。

「ここはこれで……って聞いている？」

「え、あ、ああ……うん、多分……あはははは……」
頭の中はない一つ成長していなかった。

ここも成長できているればなあ……、とほほほほ……。

そんな事がありながら、今日は試験の日。

今までの成果が試される時……、さあ、派手に行こうぜ……！

「派手に行った結果がこれだああ!!」

テストの得点は全部で389点。かなりの点数だ。

「お〜!!」

軽音部の三人は大きな拍手をくれた。

……三人?

「あれ、唯は?」

「ああ、あいつは……」

壁の端っこで不敵な笑みを浮かべているヘアピンを付けた少女、唯がそこにいた。

理由は……聞くまでもない。クラスでたった一人、追試らしい。

……大丈夫かよおい。まあ、多分大丈夫だろう。うん。

空にできている飛行機雲を見ながら、俺は心の中で勝手に納得した俺だった。

だが俺は知らなかった。この後、色々と苦勞(主に滲が)することになるとは……。

6 「試験！そして特訓！」

ふと時計を見る。時刻は10時38分。

ふと手元を見る。握られたのは漫画。

ふと目の前を見る。見えたのは澪と紬が唯に勉強を教えているところ。

……ふと周りを見る。ここは俺の部屋ではなく、唯の部屋。

……あれ、唯の部屋？……女の子の部屋？なんで？

とか思っているあなた。そんな人のために、すばらしい機能を用意しました。

その名も回想モード。よくあんでしょ？一部のシーンだけ何回も見れるゲームによくある機能。

それを今から起動すればこの状況が理解できるのだよ！

それでは、回想モード、オン。

「と言う訳で助けて澪ちゃん！！」

澪にすがりついて泣く唯。

俺はそんな様子を長椅子に寝っ転がってP Pをしながらちらっと眺める。

なぜこんなことになったのか。

前回、唯は中間試験と言う悪夢の行事で見事に追試を受けるほどの点数を獲得し、同時に追試を受けなければならないといういらぬ権利を頂戴してしまった。

最初は本人も本気で勉強するつもりだったが、どうやらことごとく失敗し、今に至るわけである。

「合格点取れなかつたら私たち……」

紬が戸惑ってる様な口で言う。確かにそうだ。

このまま唯が合格点を取れなかった場合、唯は部活動禁止、そして

学校のクラブ活動規定人数は5人以上なので……。
そういうことだ。

遷はしばらく腕を組んで考え込み、やがて

「よし、今晚特訓だ」

どうやら勉強会が開かれる事になるらしい。

まあ、がんばってくれ。俺はゲームをしながら成功を祈っておくよ。

「何言ってるの？」

律が咳く。お前が何言ってるんだ。

「遼祐も来るんだぞ？」

……はいい！？

「え、っていうか……え？あの、特訓は唯の家でするんだろ？女の子家に一人男が行くっていうのはどうかと……」

「頼むよお！！りょうくんも来てえ〜！！」

唯が泣きつく。なぜ泣くんだ。って言うかなんでそこまで来てほしんだ唯よ。

溜息をつき、やがて

「……分かった。俺も行くよ」

あんまり乗り気ではないが、仕方なく、俺は唯の特訓に参加する事になった。

なんか……あれだよなあ……まあいつか。

「今日はお父さん出張で、お母さんも付き添いで行ってるから気兼ねしなくていいよ」

帰り道、唯は俺たちに向けてそういう。

「あれ、妹がいるって言ってなかった？」

律が質問する。そういえば確かバイトの時に弁当作ってくれたって言う妹がいるって言ってたなあ。

「うん、多分もう帰ってきてると思う」

「それだとお邪魔にならないかしら？」

細が心配するが、気兼ねしなくていいよって言う限り、気にしない

でいいのだろう。

しかし……

「……唯ちやんの妹か……」

全員がどんな妹か想像する。

姉がこんなのだから少しはマシなのかもしれないが、それでも心配する。

そりゃそうだ。姉がこれだし。……なんか心配になってきたぞ。大丈夫かおい。

……あら、立派な妹さんですね。

ついそういいたくなるほど立派な妹だった。……もちろんいい意味で。

俺たちに挨拶を済ませると、俺らのスリッパをせつせと並べる。

マジで出来た子だよ。どっかの姉貴にも見せてやりたい。

そんな事を思っていると、妹さんはふと俺の方を見る。

……もじゃ、

「（お、お姉ちゃんが男の子を！まさか……お姉ちゃんの……、いや、でもただのお友達かも……、

でもお姉ちゃんももう高校生だし……、やっぱり彼氏さん！？

それとも好きな人！？）」

みたいな事を思ってるのかなあと一瞬想像するがまあ無いよな。そんな事。

多分女の子の中に男が一人混じってたのでびっくりしただけだろう。きつとそうだ。

そう思いながら、用意してくれたスリッパを履いて、唯の部屋へ向かう列に続いた。

ちなみに、後に知る事になるのだが、さっきの俺が考えた想像……実際の話だそうだ。

「いや、まさか姉妹でこうも違うとはね」

律が早速みんなが思っているであろうな事を口にする。

そりゃそうだ。ホントに姉妹ですかアంతら。

「妹さんに、唯のいいところを全部吸い取られたんじゃないの」

「ひ、ひっどい！」

唯が涙目になりながら反論する。だがここまで違うとその例も疑わしくなるのも当然だぞ唯。

もうちょっと姉としての自覚を持ってください。自覚って言うか…

…、まあ、がんばれ。お姉ちゃん。

笑いながらそんな事を思うと、ノックが聞こえる。恐らく妹さんの憂ちゃんだろう。

「みなさん、良かったらお茶でもどうぞ。買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど……」

「……やっぱり出来た子だ」「」「」

「憂ちゃんは今何年生なんだ？」

俺が頂いたお茶を喉の流し込みながら質問する。

見た目は中学生ぐらいだと思うが、どうやらその予想はビンゴ。中3だった。

中3でこんなにしっかりしてるのか……、なんか俺って人間の失敗作なのかなあ……。

俺は心の中で涙を流しまくった。

「受験生ですね」

「どこを受けるかもう決めてる？」

「桜が丘に行きたいんですけど、私の学力で受かるかどうか……」
大丈夫だ。唯や律や俺でさえ受かったんだ。きっと大丈夫さ。

「で、でも、お姉ちゃんはやる時にはやる人です！」

憂ちゃんが必死にフォローする。

……いいねえ唯。こんな優しい妹がいて。

多分俺の姉貴だと……。

『よねえ！ホントなんでこんな子が受かったんだか！あはははは！』
想像してると自分でも腹が立ってきた。

「じゃあ、時間ないから集中していくぞ」

「うん」

「教科書20ページ。じゃあこの式……」

……暇だ。やはり来るべきではなかったか。

律も同じくあくびをしている。やはり勉強が元から出来ない奴はこうなのであろう。

俺は鞆からP Pを、律は唯の本棚から漫画を取り出し、それぞれ思い思いの行動をする。

律が漫画を見て爆笑し、俺は音量を上げてプレイしていると、漣が切れて、

げんこつ

俺はイヤホンをつけてプレイする。律は正座させられていた。ちなみに俺もその横で正座してプレイしている。

ふと、律が俺のプレイしているゲームを見ている。小声でメタルAPWだろって律が言うと、俺もそれに小声で答える。どうやら律も所持していたようだ。

そのまま話が弾み、声のボリューム制限を解除し、ふたたび爆笑する。そして

げんこつ×2

メタル APWは唯の勉強が終わるまで没収となり、再び正座させられた。それにしても痛い。みさえ並に痛いぞ漣のげんこつ。

唯が足をもぞもぞし始める。足がしびれたとか眩き始めた。俺たち

はそんな隙も見逃さない。

同時に足元に近寄り、一斉に指を足に当てる。ビンゴ、唯は悲鳴に近い声を上げた。

「律ッ！！遼祐ッ！！」

げんこつ×3

ついに部屋の外に追い出された。

二人で扉の前に正座する。

……何故だ、何故こうなる！だつて仕方ないだろ！俺のSな心が反応しちまったんだ！それに唯つていじめると結構楽しいし……。

……つてそうじゃない。深い溜息をつき、俺は律の方を見る。

おとなしく正座している。だがそんな顔もやがて歪み始め、くすくすと笑い始める。

俺もその様子を見ると、つい口元がゆるんでしまい、俺も笑い始めた。

「おい、部屋に戻ろうぜ。もう30分ぐらい経つぞ」

「でもどうやって入るんだよ、濡カンカンだぞ」

「大丈夫だ。いいか、人間て言うのは心の底から本気で笑えば他の事がどうでもよくなる。またはそれに近いアクションを起こせば同じ効果が起きる」

「ほうほう」

「つまり、何か俺たちがあいつらの心に残るようなインパクトのある事をすればいいのだよ」

「なるほど。よし、それじゃあ……」

二人で何をすればいいか相談し始める。そして出た結論が……。

「うおりゃああああー！！」

二人で大声を上げ、勢いよくドアを開ける。

律が部屋の中に転がり、俺も中へ小走りに入る。

「動くな！武器を捨てて床に伏せろ！G A Y 棒を捨てる！！」
……某B G Mを変えてみたシリーズの制作者の方、ごめんなさい。
b y 作者&律&遼祐

「お前ら、おとなしくし「うるさい！！」いつてええ！！」
漣の拳を俺と律は同時に受けてしまった。まじでいてえ……。

と言う事がありながら唯の勉強は休憩タイム。

紬が持ってきたケーキを口に運ぶ。

「ん〜、美味しい〜」

「この為に生きてきたって感じ〜」

「同感〜」

「この子たちの人生って一体……」

まあ気にするな漣よ。君にもいつかわかるさ。

ケーキを再び口に運ぼうとすると、ピンポンとインターホンが来客の合図を告げる。まあ配達屋か。

と思っていると、唯の部屋の扉が開く。唯と俺が扉に行くと、そこには意外な人物がいた。

「真鍋！それに、浩史も！？」

扉の前にはバスケットを持った真鍋、お盆にコップとお皿を置いて現れた憂ちゃん、そして意外すぎる浩史の姿が。

「まあ真鍋は分かるとして、なんで浩史も？」

「うん、実は平沢さんに消しゴム貸してもらったまま帰えちゃって、返しに行こうとここまできたら真鍋さんもいて……」

ああなるほど。そういうことが。

「遼祐、唯、その二人は？」

「こいつは門村浩史。幼稚園の時から友達で、今俺たち同じクラスなんだ。浩史、この3人が軽音部のみんなだ」

「この子は真鍋和ちゃん。家が近所で、幼馴染なんだ」
さて、何やらオールスター的な展開になってきたぞ。

まあ問題ないが。むしろいいんじゃない？ファンのには。

「でもフアンの人たちからすれば僕ら邪魔だよな」
「それを言うな浩史よ」

「中学の時、私が熱を出して休んでたんだけど、毎日唯がプリントを持ってきてくれて……」

唯のアルバムを開いて思い出暴露大会が始まる。

「私風邪引いた事なくて……」

そんな事言いながら真鍋の持ってきたサンドイッチを頬張る唯。すげえよあ、風邪引いた事ないとか。

「でね、そのプリントの中に、唯のテストが間違っって入っ……」

ははははは、そいつは傑作だ!!

俺たちは腹を抱えて笑う。(唯と憂ちゃん以外)確かに唯がやりそうな事だ。

ホント今と変わらない。……まあ悪い風が変わるよりは全然マシだよな。どこかの俺みたいに。

「でも、本当に助かったのよ」

えへへへへ、と唯が顔を赤らめて照れる。

……まさか……、百合展開か!?!……んなわけないか。

「それだったら律も……」

「うわあ!それはだめだあ!!」

「そっいえば遼祐も……」

「やめるバカ!!まさかあの事じゃないだろうなあ!?!」

「実はね……律ったら……」
「遼祐ね……」

「うわああああああ!!」

……とまあこんな感じで恥ずかしい過去が暴露された。

……学校休もうかな明日から。いや、マジで。

「あははははは!それはないよね〜!」

「だろ!?!そこで俺は言っ……てやったんだ、そりゃあお前の事だろっ……て!」

「はははは、ナイスだぞ遼祐！」

「うふふふふふ……あ、ところで勉強は？」

あ……。

回想モードオフ。今に至るわけである。

ちなみに真鍋と浩史は既に帰宅している。

そもそも浩史は消しゴムを返しに来ただけなのに、こんな時間に帰つちまつたんだ。あいつ親に怒られるんじゃないか？

まあ、大丈夫か。しかしそれにしても……。

……暇だ。数学の事なんか聞いても頭がおかしくなるだけである。

俺は部屋を出て、下へ降りた。確かリビングに律と憂ちゃんがいたはずだ。

リビングの扉を開くと、律が寝つ転がってゲームをしている。

キッチンの方を見ると憂ちゃんが皿を洗っていた。どうやらこの家では下の子が家事をするシステムになっているようだ。

つくづく思うが、本当にこの家は俺の家に似ている。上の子が怠け者。下の子は家の事を完璧なまでにしている。

そんな事を思ったからか、俺は何故かキッチンへ向かって行っていた。

「よ、憂ちゃん」

「あ、日暮さん、どうかしたんですか？」

「いや、そうじゃないんだけど……、なあ、基本的に憂ちゃんが家事するのか？」

「はい、お母さんもお父さんも仕事で家を開ける事がほとんどなので……」

皿を拭きながら、俺の質問に答える憂ちゃん。

色々大変なんだな、唯の家も。

「おい遼祐〜！ゲームしようぜゲーム！」

「ふつ、俺にゲーム勝負を挑むとは……いいだろう、返り討ちに
てやる！」

俺のゲーム魂が反応して、律の勝負を受けてたつた。

ゲームは……、ソウルキャリィ？か。面白い、受けて立ってやる！
……それにしても女の子の家にあるようなゲームじゃないだろうソウ
ルキャリィって。作者、もうちょっと無理のない設定にしてくれ。

「ただいま」

俺は自宅に帰宅した。既に11時を過ぎており、姉は既に就寝して
いるだろう思った。

小腹が空いたので何か作るつかとキッチンへ入ろうとすると、何や
ら変な声が聞こえた。

リビングの電灯を光らせるため、スイッチをONにし、リビングが
光に包まれる。

そこにいたのは……。

「りよ〜すけ〜……お腹すいた〜……」

……あ、忘れてた。変な声の小隊は姉貴だった。

それから数日が経った。

「今日が返却日だよな……」

そう、今日はテストの返却日。軽音部の運命の日である。

ここでもし唯が失敗すると軽音部は廃部、……BADENDになる。

「大丈夫かな、唯……」

漣が部屋中をうろつろと徘徊する。

紬もその事しか考えてないのか、お茶が湯香からあふれ出る。って
おい、溢れてるじゃねえか！！紬、戻ってこ〜い！！

しかし律はやはりマイペースで、パクパクとチーズケーキを食べて
いる。

……もうちょっと心配しようぜ律。

そんな事を思っていると、軽音部の部室のドアが開く。

そこからは何やら生気が無くなっている唯がふらふらと部屋に侵入してきた。

「ゆ、唯？おい、まさか……」

「おいおい、まさかの……BADENDか！？冗談じゃない！！俺はまだ誰もおとしてないぞ！？（ヒロイン的な意味で）」

「あ、……あ……あ……」

テストの答案を持っていく手がぶるぶると震えながら、俺たちにその答案の内容を見せる。

その内容は……次回に続く！！

「続かせるな！！」

オホン、その中身は……なんと！！

「ひゃ、百点……だと……！？」

確かにその答案には赤字で百点と書いてあった。

まさかどこかのびくんみたいに0点をごまかして百点に直したかと思われたが、きっちり答えはあっていた。

「「大胆な子！！」」

俺と澪は同時にツツコンだ。

まあ、これで軽音部は続けれるよな……。良かった良かった。

「……なあ、もしかしてカンニングしてないよなあ？」

「してないよー！！」

なら安心だ。後で、カンニングの疑いがあるので、あなたは失格です。なんて事があつたら笑えないジョークだからな。

7 「合宿！そして喧嘩！？」（前書き）

最近、作者が病んでおり、ストーリーも文章も今まで以上に酷いので御観覧の際は覚悟しておいてください。

7 「合宿！そして喧嘩！？」

「え、合宿？」

入ってきていきなり漣が何を言い出すかと思いきや、なんと合宿をするらしい。

合宿かあ……山か？富士山か？アフリカか？夏フェスか？

「遊びに行くんじゃないやありません！朝から晩までみっちり練習だ！」

どうしようかなあ、何着てこうか……何があるんだろうなあ、楽しみだなあ……！！

「聞けえー！！！」

「夏休みが終わったら、もうすぐ学園祭でしょ！？」

漣が椅子に座り、何故合宿をするかの意味を解説する。

唯と律は同じく椅子に座り、その意味を聞いている。

俺も聞きながら、紬の持参した紅茶セットで紅茶を入れる準備をしている。

紬はたまに遅れる事があるので、その時は代わりに俺が紅茶を入れたり、部室にあらかじめ置いてあるお菓子を準備したりする。ちなみに許可はちゃんともらっている。

「桜高祭での軽音部のライブは、昔は結構有名だったんだぞ」

ああ、確か姉貴に聞いた事がある。

なんだったかな、デ……デなんとかって言うバンド名の軽音部はかなり凄かったらしく、他校にも伝わっていたらしい。

それにしても学園祭か……、焼きそばにたこ焼きにチョコバナナに朝比奈みく の冒険に……ってなんか違うものが入ってるじゃねえか。

そういえば演劇部って何すんのかな？漆黒の騎士かな？終わった世界の少女の物語かな？……またいらんものが入ってきた。

「メイド喫茶がいい！」

律が提案する。……賛成だな。生徒会が反対しようがデモを起こしてでもやり遂げるぞ俺は。

だってメイドだぜ？お帰りなさいませご主人様だぜ？ファミーユだぜ？キュリオだぜ？

最高じゃん。んで、俺はその店長兼コックだな。卵料理とコロツケが得意な。

「え、おばけ屋敷だよ」

唯も提案する。それもいいなあ。メイド喫茶ほどではないが。

だが結構面白いかもな。研究所風って言うのはどうだ？カプセルの中に謎の生物がいて……。

そこで周りにはゾンビがうじゃうじゃいるんだ。これもこれでいいね。最高だな。

「絶対メイド喫茶！」

「おばけ屋敷！」

言い合いになっている。俺はニヤニヤしながらその様子を眺めているが、やがて溻が切れて

げんこつ

二人を床に正座させた。律の頭にはこぶが出来ている。いつものパターンだ。

それにしてもなんで律だけ？

「ごめんなさい、遅れちゃって……」

ベストなタイミングなのか、最悪のタイミングなのか、絨が部屋に入ってくる。

この状況がよく理解できないのか、とりあえずと言った感じにこんな事を言った。

「……マドレーヌ、食べる？」

是非。

「と言う事でムギはどう思う?」

澪が紬に合宿の事について説明し、その後に本人はどう思うかを聞く。

ムギは賛成派でどうやら友達とお泊りするのが夢だったのだと言う。

……こいつもこいつで何やら合宿の意味を間違えているらしい。まあいいが!!

「んじゃあさあ、海にする!?それとも山にする!?!」

「だから!バンドの強化合宿だつて言ってるだろ!?!」

再び澪が怒る。まあまあ澪、あんまり怒ると寿命縮むし、老けるぞ

げんこつ

痛い。マジで痛い。

「あ、でもいくらぐらいかかるのかな……?」

そついやそつだ。合宿なのでやはりいくらか金がいるのだろう。

……またバイトするのだろうか。

「そつだぞ、きつくないか?」

誰もバイトについて言わない。なんだかんだ言ってみんなバイトがしたくないのだろうか。

澪もこればかりは悩む。そこを考えておけよ澪さん。

しばらく考え込んでいると、俺はある事をおもいつく。

「……紬」

「はい?」

「別荘とかは……ないっすか?」

「ありますよ」

よく言つた紬いいいいいい!

それから時はぶつ飛び夏休み序盤。

……っていつかこの表現何回使えば気が済むんだ作者。

8時に駅に集合との事で俺は7時30分前には駅に到着し、しばらく待っていた。

やがてそして最初に現れたのは律と漣でその次に紬が到着した。現在7時40分。……さて、ここまでは予想の範囲内だ。

問題は残りの1人である。

時は刻一刻と迫ってきて、やがて8時を過ぎた。

……遅すぎる。いつかを思い出しながら足踏みをし始めた。

「ちよつと電話してみる」

漣は唯に電話をかけた。

そしてしばらくすると漣の電話からごめんなさーい！ー！と言つ声が聞こえた。

……再び溜息をついた。

「はあ、間に合ったあゝ」

水筒を片手に、唯が電車の席の背もたれにもたれかかる。唯はギリギリで間に合った。

まったく、今度から一日前に集合場所で待ってた方がいいんじゃないかねえか？

「あ、その手があった！」

いや、せんでいい。

「そいや、別荘ってどこにあるんだ？」

俺は紬に質問する。これまで一度もそこは聞かされてなかった。

って言うか俺が単に聞いてなかっただけかもしれない。

紬が何かを言おうとすると、外が真っ暗になる。トンネルに入ったようだ。

「……もうすぐです」

何がもうすぐなんだ？と思っていると、外が再び明るくなる。

そして外を見ると、とても感動した。唯と律が。

「海だあああああ！」「」

別荘はどうやら海にあるらしい。

海ねえ……あは、あはははは、そうか、海か。

……海かあ……。

テンションがますます上がる唯と律に対し、俺はテンションが次々と下がっていった。

何故か？それは後で分かるさ。

「……………でか」

別荘を見て第一声がそれだった。

俺が住んでるマンションぽいアパートよりでかいんじゃないかな？と思うほどの大きさだった。

俺はもう少し小さい、木でできた小さい別荘をイメージしたのだがそのイメージを一瞬で忘れるほど大きな別荘だった。

「本当は、もっと大きな所を借りたかつたんだけど、一番小さいところのここしか借りれなくて……………」

……はい？これより大きい？一番小さい？ここが？

……なんだろう、何故か頬に熱い何かがこぼれおちた様な気がする。自分のちっぽけさを感じてしまった。

玄關らしき扉を開くとそこには実にすばらしい部屋が広がっていた。すばらしい、すばらしすぎる。ビュートイフルすぎるだろ、おい。

唯や律ほどではないがこの美しさに興奮してしまった。冷蔵庫を開くと素材のいい食材が溢れるほど入っていた。

……俺の腕をみんなに見せる時が来たようだな。

中の素材をチェックし今日の夕食のメニューを考えながら、俺は漣と絨に歩いて行った。

やがて絨が別荘の端にある部屋に案内してくれた。そこを開くとドラムやマイク、アンプ……、バンドには欠かせない機材が並べられていた。

近づいて見てみる。……全然OK、間違いなく動くぞ。

「あれ、唯と律は？」

あ、そういえばあいつらどこ行ったんだろ。

「途中でいなくなっちゃったけど……」

「……しょうがないなあ……」

澪が溜息交じりに呆れて、バッグから何かを取り出す。

紬と二人で見ていると、中から現れたのはラジカセだった。

それを床に置き、再生のスイッチを入れると、なんだかノリのいい音楽が流れ始める。

「昔の軽音部の、学園祭でのライブ。この前部室で見つけたんだ」
へえ、そうなんだ。

「……上手」

「私たちより、相当うまい」

そりゃそうだ。俺ら一度も合わせた事ないんだし。

って言うか練習すらまともにしてないぞ。

……そんな事を思っていると、澪が何故合宿を提案したのかが分かってきた気がする。

「なんか、聞いてたら、負けたくない……って思って」

多分、これを聞いて、澪は危機感と敗北感を感じたんだと思う。

だから、少しでも上手くなるうと、みんなでこれに負けなくらいすごい演奏をしようとかこれを提案したのだろう。

……なのに、なのに……！！

……ってちょっと待て。なんでこんなシリアスな展開になってんだよ。

確かにシリアスっぽいと言えばシリアスっぽいが。

「みんな〜！！」

…… 空気嫁、唯。

扉の方を見ると、唯と律が笑顔で立っていた。

「海で泳ぐぞ〜！」

…… なんか、もう泣きたい。

この空気の中でこんな事が言えるこいつらを俺は表彰してやりたい。空気が全く読めてないで賞とか。

「……お前らなあ……」

なんか怒る気もしない。むしろどうでもよくなってきた。

「何のためにここに来たんだよ？」

「合宿だろ？」

「何のための合宿だ」

「遊ぶ！……後練習」

後？……なんだ、一応覚えてたのか。

まあ覚えてたならいいだろう。だったら、と俺が言いかけた時だった。

「律！唯！いいかげんにしろ！」

漣が後ろで怒る。ふり返ると、漣は涙目で二人を睨んでいる。

「何のためにここまで来たんだ！私たちは遊びに来たんじゃないって何度言えば分かるんだ！！」

こればかりには唯も律も何も言わない。いや、言えないのだろう。

「もういいよ……遊びたいなら勝手に遊べ！私はもう知らない！」

漣は部屋を飛び出し、どこかへと走り去って行ってしまった。

……おいおい、まさかの軽音部始まって以来の最大の危機なんじゃないか？

唯と律を見ると、漣の走り去っていった廊下を、ずっと眺めているだけだった。

さて、俺は知らんぞ。……まあちょっと助けてやるぐらいならいいけどさ。

「んで、どうすんだよ？漣ほつとくのか？」

みんなに聞くが誰も口を開こうとしない。

これじゃあちが開かん。髪を掻いて、溜息をつく

「あのさあ、俺たち完全に遊びに来たつもりでここに来ちまってるよな？」

……唯と律、そして紬も無言で頷く。俺も半分というか80パーセントはそのつもりだった。

紬が首を縦に振った事は意外だったが、気にせず、俺は話を続ける。

「まあ、澪も真面目だからさ、あいつは練習のつもりで来てたつもりだからさ」

そんな事はみんな分かっている。だがこれも気にせずに話を続ける。「今回は俺たちも悪いし、やっぱ澪に謝るべきだよ」

「……それも分かっている……と思う。」

だがやはり泣かれると、やっぱりどうにも謝りづらい。それもみんな一緒だった。俺もそうだ。

こうやって偉そうに喋っているが、やっぱり俺も謝りづらい。

「……よし、んじゃあ俺澪探してくるわ」

「え、でも、遼祐……」

律が何か言おうとするが、気にせずに扉へ向かう。

「とりあえず俺がお前らが謝りやすいようにしとくから、後は何とかしてくれ」

「遼祐……」

「それに……」

扉を開けて、3人の方を向く。

「あいつも入れてみんなで遊びたいだろ？」

さてと、どこを探すべきか。

少なくとも家に帰ってはないだろう。

だからと言ってこの別荘の中にいるとは考えにくいし……。

「やっぱ、定番のあそこか」

こういう展開になるとたいいはあそこにいる。

やばいな、このまま恋愛フラグ立たせちゃったらどうしょ、俺。確実に澪ファンに殺されるよ。

……まあ大丈夫か。オリ主なんて恨まれてナンボだよ。やってやるよ。フラグ乱立して放置しといてやるよチクショー。

そんなどうでもいい事を思っていると、俺は別荘のすぐ近くにある海岸に来ていた。……夕日の。

そしてさらに進むと漣が体操座りでポツンと座っていた。背中越しからでもわかるがなんか色々とオーラが出てる。

「よっ」

溜息交じりに漣に自分の存在をつたえる。漣はこちらをちょこつと向くと、すぐに海を見つめた。

俺は漣のちよつと離れた所に立つ。

「……確かに、怒りたい気持ちは分かるけどさ」

「……分かってない癖に」

「バレたか。まあしょうがねえか」

「……何しに来たの」

「決まってるだろ、連れ戻しに来た」

「なんで」

「お前いないと軽音部じゃないだろう。唯がいて、律がいて、紬がいて、俺がいて、お前がいて、それで軽音部だろう？」

「……どうせ練習なんかしないだろ、遊ぶだけの軽音部だろ」

……完全に戦意喪失してるよこいつ。だんだん面倒になってきた。だがそこは俺の大人な心が必死に我慢して話を続ける。

「そりゃあ、まあ遊ぶけどさ。だからっていつまでも遊ぶ程バカな俺たちじゃないことぐらい知ってるだろ？」

「……遼祐の事は知らない」

「……信用がないと言っかなんというか」

「だってそうだろ!？」

そんな責めないでよ。さっきの言葉結構傷ついたんだぞ。俺は既に軽音部のみんなを落としてるのかと思っただからよ

「誰も落としてない!」

そうなの!？」

「なんだその新鮮な驚きは!……って、なんでいつのまにお前と」
ントをしてるんだ!」

「お前の怒りが少しは収まったからだろ?」

「!?!」

顔を赤らめて再び海の方を見る漣。

ふふふ、恥ずかしがり屋の漣たんめ。

「だから漣たんって言うな！」

「悪かったよ。……んで、どうすんだ？」

漣は溜息をついて顔をうつむける。恐らく考えているのだろう、多分。

「……ま、とにかく戻ろうぜ。別にあいつらいなくても一人でも二人でも練習できるだろ？」

「それじゃ駄目なんだ！」

「なんで？」

「そしたら、それこそ、軽音部じゃなくなる」

「……なんだ、知らないとか言ってたけど結局軽音部の事心配なんじゃねえか」

「当たり前だ！……だって」

その先は言わなくても分かる。確かにあいつらだけだと軽音部崩壊せざるを得ないからな。

もちろん俺を入れても多分崩壊するだろう。って言うか何にしる規定人数の下回ってるからどちらにしる崩壊だろう。

「……」

「まあ、何にしる、戻った方がいいんじゃないかね。お前の為にも、あいつらの為にも」

「……」

「お前、負けたくないんだろ？昔の軽音部に。だったらやってやるうぜ」

「……」

「その為にはさ、確かに練習はたくさんしなきゃいけないかもしれないけどさ、もう一つやらなきゃいけない事があるんだよ」

「え？」

「チームワークって言うのがさ、大事だと思うんだ。確かに実力もいるけどさ、実力だけのバンドなんて、やってるこっちも面白くな

いだろ？

やるんだつたら本当に信頼できる奴とやった方が何百倍も楽しいと思うぜ？

だからさ、練習もやって、遊んで、それが割り切れるようにすれば、俺はいいと思うぞ」

「遼祐……」

「……まあ、チームワークは多分、って言うかかなりいいと思うけどさ」

「え？」

「じゃないと、ここまで来ないだろ」

後ろを振り向きながら、俺は呟く。

漣も後ろを振り向いた。

そこにいたのは唯と律と紬の3人だった。

「漣ちゃん、ごめん！」

「漣、ごめん」

「漣ちゃん、ごめんなさい」

3人は同時に謝り、同時に頭を下げた。

俺も後に続いて、謝る。

「……まったく、しょうがないなあ……みんなは」

漣が立ちあがりながら喋る。

「今日の夜と明日の朝はみっちり練習だぞ」

「「え〜!?!?」「」

お前ら反省してねえだろ!!絶対!!

「そして明日の昼から、みんなで遊ぶぞ」

笑顔でそういう漣。それを言うと同時にみんなが、わ〜いと歓声をあげる。

やれやれ、まあ、一件落着か。

さてと、俺は晩飯の支度でもするか。と、別荘に戻る。

「あたしたちもやるぞ〜!」

律が声を上げ、みんなも俺の後に続く。

……さてと、頑張つて晩飯作るか。めっちゃいい肉もあるし、バーベキューでもすっかな。楽し。

別荘に帰る途中、みんなと夕食の相談をしながら並んで帰った。俺たちなら、ホントに桜高の歴史に残るバンド作れるかもな。そんな事を思いながら、俺たちは別荘へと帰った。

「ところで、なんで遼祐つて海見た途端にテンションが下がったんだ？」

「え、あ、いや……俺、海で泳いだりするのが怖くて……」

「……海恐怖症!？」

8 「顧問！そして衝撃の！？」

夏休みが永遠にループしたり、竜宮城で亀たちと戦ったりなどのもんでもない出来事に遭遇することなく、夏休みは無事に終了した。しかし夏は未だに活動を活発に行っており、今にも死にそうなくらいの暑さだった。

そんな中、俺は何時ものように軽音部の部室へと足を運ばせている。それにしても暑すぎる。マジで死にそうだ。

「ちいゝす」

適当に挨拶しながら部室の中へと侵入する。

既に部室にいた唯と律が挨拶を返してくると、俺は二人がしている行動が非常に気になった。

二人は何やら机の上に広げている何かを見ており、俺もつい気になつて見に行つてしまう。

「何見てんだ？」

「昔の軽音部のアルバムだつて。整理していると見つかったんだよ」
唯の解説を聞きながら、俺はそのアルバムを見る。

見たとたん、「うっ」っとうめき声を上げてしまった。

何やらものすごい派手なメイクだったり、コスチュームだったり、とにかくいかにもバンドと言っ感じだった。

「ホント、何年前のバンドだよって感じだよな」

自分の膝に頬杖をつきながら、律が苦笑いしながら呟く。

え、バンドと言えばこんなイメージじゃなかった俺ってなんかヤバかったの……？

裏でつい笑みを浮かべてしまった俺だった。

後に聞いたが、唯もこんなイメージじゃなかったらしい。良かった、俺だけじゃなくて。

……イタイ。

職員室で山中さわ子先生に絆創膏を指につけてもらいながら唯がその声を漏らす。俺は付き添いでついてきた。

ちなみに山中先生はこの学校の音楽の先生で、軽音部発足の手伝いもしてくれた……らしい。

さて、何故俺たちが職員室にいるのかと言つと、唯がついさっきギターの練習をしていると、指が剥けてしまい、たまたま音楽準備室こと、我ら軽音部の部室にいた山中先生に治療を受けている最中だったのだ。

まあ、皮がちょっと剥けただけだし、大丈夫だろう。それに……

「もつと練習すると、また皮が剥けるけど、何度もそんな事を繰り返しているうちに皮が硬くなるわよ」

そうそう……ってあれ？なんで先生がそんな事を？

「え、む、昔ギターをやつてた友達がね……」

ああ、そう。……ん、ちょっと待てよ、そついやこの先生……、あ、もしかして……。

俺はある事に気付いたのだが、言わない事にした。

もし本当なら本人は結構気にしてそうだからな。

お礼を言つて職員室から出ようとすると、入口では紬が待ち構えていた。

「なんであんなここにいたんだ」

「うん、生徒会に、学園祭で軽音部の発表ができるようにお願いを

……」

ああ、そついうことか。んで、OK出たの？

「それが、まだ軽音部は正式な部として認められてないからダメだつて……」

そつかそつか。まあしょうがねえよ。諦め

「つて諦めれるかあ！！」

「おい律！どついうことだ！！」

部室に戻り、早速部長（と言う事になっている）の律に問いたです。しかし本人も理由は分からず、結局生徒会に抗議に行く事になった。

「頼もー！！！」

「頼もー！！！」

……もうちょっと別の扉の入り方はないのか。って言うかドアの開け方ぐらい親から教わらなかつたかのお前らは。

溜息をつきながら、ハイテンションで入って行った二人に続く。

「あ、遼祐。それにみんなも……」

生徒会室に入つてすぐ左には浩史がいた。さらにその反対の黒板側には真鍋の姿があつた。

「何やってんだお前ら？」

「何って、生徒会役員だけ……？」

あ、真鍋はそうなのか。んじゃ浩史は？

「僕は、ちよつと生徒会に用があつてね……」

ああ、そう。

つて危うく本来の目的を忘れるところだつた。

俺は真鍋の近くに行き、

「なあ、軽音部が正式な部として認められてないって本当なのか？」

「ええ。部活申請紙が出てないから、正式な部ではないわね」

そんなばつさり言わないでよ、真鍋さん。

……部活申請紙が出てない？

「んな訳ないだろう。もう一度見てくれないか？」

「う、うん……」

真鍋に確認してもらつたが、やはり無かつた。

……何故だ。一体、何故……。

「もしや……」

律が何かを思いつく。

「これは、弱小部を潰すための、生徒会の陰謀……！！」

な、なんだってー!!……真鍋! そうなのか!?

「思い出して! 和ちゃんはその子じゃない! 目を覚まして!」
唯が和を説得し始める。流石幼馴染。

「……何言ってるのよ……」

真鍋は溜息交じりに言い返す。冷静に考えるとそんな訳がない。そりゃそうだ。そんなドラマみたいな事があるわけがない。んじゃ一体なんで出てないんだ?

……! もしかして! 分かったぞ! 全てのトリックが!

よし、この腕時計型麻酔銃で、悪いなおっちゃん……。

……って違う! 何故そうなる!?

「おい律。お前もしかして書いたまま放置とかそんな才子じゃないよな?」

「……あ」

……てめえが原因じゃねえかあああ!!

律の背後に回り、首をしめてお仕置きしてやった。

「ぎゃあああ、死ぬ死ぬ! ギブギブ!!」

「うるせええええ!!」

「えつと、名前は軽音部、部員は5人で……顧問が……、顧問の先生は?」

「……顧問?」「……」

何やら俺たちは大事な物を忘れていたようだ。

「おい! 顧問がないんじゃないじゃ話にならねえじゃねえか!」

「そんな事言われても、色々部長も大変なんだぞ」

お前部長らしい事何にもしてねえだろ!!

廊下を歩きながら途方に暮れる。

最悪だ。ここまで来てこれ? 冗談じゃない。なんとかしないと今度こそ軽音部崩壊じゃねえか。

誰かいらないのかよ、顧問になつてくれそうな先生は……。

「一か八かで賭けてみるか、あの人に」

「そうだな」

「よし、やろう!」

「っていうかこんな所で団結してどうする」

気にするな漣。こういう時にこそ団結しなければ生きていけないのだよ。

「先生!俺たち軽音部の顧問になってください!!」
全員でたまたま通りかかった山中先生に願う。

「このままじゃ、軽音部が廃部になっちゃうんです!」

「お願いします!!」

「え、えっと、私吹奏楽部の顧問だから掛け持ちは……」

やはり駄目か……だが、諦めはしない。こうなったら奥の手を……。

「先生、この卒業生ですよね?」

唯が俺が言おうとした事いきなり言った。

おい、もしかしてこいつも……。

「え、ええ」

「じゃあ軽音部に所属してましたか!」

「どういう事だ唯?」

漣が質問する。代わりに俺が答えてやる。

「あのアルバムに山中先生に似てる人が写ってる写真があったな。もしかしたらと思っただろ、唯?」

「うん。似てるって言うか、本人だと……」

先生を見ると、うつむいていた。やっぱり、封印しておかなければならない過去だったか?

「そのアルバムはどこ?」

「え、軽音部の部室に……って先生!」

先生が回れ右をして、どこかへ走り出す。

まさか、軽音部の部室へ!?そうはいくか……!

俺たちも後に続くって言うか追いかける。結局一緒か。

「先生、やっぱり事実なんですか？」

「……」

机の上に置いてあったアルバムを見ながら、先生は頷く。

やっぱりか。多分端っこの赤いド派手なコスチュームの生徒は先生だったか。どおりで似てたわけだ。

「じゃあこの声も……」

唯がラジカセの中にあるカセットを再生する。

そこから流れてきたのはいかにもバンドな感じのボーカルによるMCと歌声が流れてきた。

うわあ、これホントにこの人かよ。なんか想像できねえなあ。

んじゃギターも上手いのでは？と、唯が自分のギターを先生に無理やり手渡す。

その時、しばらく動かなかったが、やがて眼鏡を外して、

「じゃあねえなあ……」

目つきが変わった。穏やかな物から鋭い切れ長な目つきに！間違いない、写真の人と一緒にだ。

まさかあの時の記憶が、甦ったと言うのか！？

その後、先生は歯ギター、早弾き、タツピングと言う職人技を見せた。

つて言うかそれ唯のギターだぞ。歯ギターは辞めてやれよ。

「お前からアアア！！楽器大事に使いすぎなんだよおお！！」

「……ご、ごめんなさい！！」「……」

4人が土下座をする。

「いや、別にそこまでする事ねえだろ」

とまあなんだかんだありながら、先生を俺と律が説得し、この人を顧問に迎える事になった。

ふふふ、秘密を知られなくなかったら、おとなしく顧問になりな……とな。

「それ脅迫だろ」

気にするな。漣よ。それと作者、いかげんに漣から突っ込まれたらこつ言わせるの辞める。飽きたぞ。

とりあえず俺らの演奏を見てもらう事になった。

一通り終わると、先生は色々細かい部分をつっ込んできた。

流石元軽音部。

「それにしても……あなた達ボーカルは？」

……ぼーかる？

え、決めてなかったの!?

「そうだったあああ!！」

「お前らそんなんでよく学園祭出ようなんて言ったなオイ!！」

「んで、誰がボーカルになるんだよ」

とりあえず会議をする。少なくとも律と紬は無理だろう。キーボードとボーカルは流石に無理だろうし。

だからと言ってドラムとボーカルも無理なはずだ。となると残されたのは俺と唯と漣か……。

しかし漣はどん底の恥ずかしがり屋なので却下。んじゃ俺と唯が残されたか。

「とりあえず何か歌ってみなよ。あ、校歌歌ってみて!」

律が提案する。おお、それがいいな。それで上手い方を決めるんだな!

よし、まずは俺がやろう。

行くぜ!俺の歌を聞けえ!!

そして歌って10秒後、全員から却下の判断が下された。音がズレすぎらしい。

やれやれ、手厳しいなあ。

「いや、お前が音痴すぎなだけだから!！」

と言う事で唯で決定か。……大丈夫かよオイ。

その前に歌詞を作らなければならぬとのことで、歌詞作りを漣に任せ、俺たち軽音部の今日の活動はこれで終了となる。いい歌詞書けよ漣。

そして次の日。

……見事な歌詞を書いてきてくれた。本当にすばらしい歌詞だ。背中がかゆくなるほどすばらしい歌詞だよおい。

『君を見てると いつもハートドキドキ

揺れる思いはマシユマロみたいにふわふわ』

だああああ、かゆいいいい！！

誰か俺の背中を搔いてええええ！！

なんて事を言えるわけがない。

漣が必死になつて考えた歌詞なんだ。そんな事を口が裂けても言えるわけがない。

……痒いのは事実だが。

「んじゃ、唯。頼むぜ」

ギターを持って頷く唯。いっちょやっっちゃってくれ。

一度深呼吸し、そして……。

「君を見てると、いつもハー……」

「おい、ギター弾かないと」

「あ、そうだった！」

ギターを持ち直し、弾き始める。

よし、今度こそ……。

……。

……。

「歌え！！」

「あ、そうだった！」

……ダメだこりゃ。

「うつ、うつ……！ギターを弾きながら歌が歌えない……」
……こんな事だろうと思った。

ここはやっぱり俺が……。」「
」「それだけはやめろ！」「」
漣と律が同時に叫ぶ。そこまで否定すんなよ。傷つくぞ俺。グレるぞ。

……ってグレてたか俺。

「仕方ないわね……」

先生 いや、さわ子が何か意味深な事を言う。

まさか……！！

「特訓よ！私についてきなさい！！」

やっぱりか。

「はい！先生！！」

さわ子と唯が部室を駆けだす。

……さわ子、頼むから唯を昔のアンタみたいにしないでくれよ。

それから再び次の日。

和が部室へ来て、学園祭についての最終確認を行いに来た。

全員が和の話の話を聞いていると、何者かが部室のドアを開ける。まさ

か……！！

「……待たせたわね」

奴は……！唯とさわ子！生きてたのか！？

「いつあの二人が死んだ設定になってるんだ」

漣の突っ込みを無視し、俺は二人を見つめる。

唯のオーラがいつものふわふわしたもの違う！あれは……とうとう覚醒したのか！？

しばらく間が開くと、唯が下げている顔を上げ、ギターを弾き始める。

「な、なんと！」

「う、上手くなってる！？」

「あの自信に満ち溢れた演奏……!!」

「間違いない、奴の潜在能力が覚醒した」

……してねえよ。覚醒なんかしてねえよチクショーめ!!
歌い始めたと思った途端、声がかがらならな唯の声が漣の作った曲、
ふわふわ時間の歌詞を歌い始める。

……あはは、練習しすぎたか。そうかそうか。なら仕方な

「くねえよ!!どーすんだよ!!後3日だぞ3日!それまでにこの
喉が完全に治るとは限らねえし!!」

俺はキレた。冗談じゃない、ここまで来てこれはないだろうに。

「仕方がない、やっぱり俺が　「漣、頼むぞ」「え、私が!？」

お前から聞けえ!!」

完全に無視だ。ふざけんな畜生。なめてんのかオイ。

だが話は勝手に進んでしまい、結局漣がボーカルになった。

……それにしても、俺って音痴だったんだ。あは、あははははは…

…。(泣)

9 「学園祭！そして初ライブ！！」（前編）

学園祭……、いやあ、素晴らしい行事だと思うね俺は。

クラスや部が丸となって取り組み、人々を楽しませる。いいものだと思うよ、うん。

そして俺は現在クラスで一丸となって焼きそば作りに翻弄中だ。いやあ、楽しいねえ。本当。

「へいらっしやい！焼きそばでs……ってなんだ溇か」

「なんだじゃないだろ！今日本番だろ？目いっぱい練習しておこうよ……」

ああ、そうだった。結局ライブする事になったんだった。

って言うか俺のメイド喫茶「ファミーユ」の意見はなんで却下になったんだよ？お前らもしかしてパルフェじゃなくてシヨコラ派だったのか？

それともどちらでもなくこんにやく派だったのか？それともまさかのデュエルセイヴァー派？バルドスカイ派？

「そうじゃない！って言うか何の話してるんだ！」

「え、何ってエ……」

溇のげんこつが思いつきり俺の頭上にクリーンヒットする。痛てえ……。

分かったよ、冗談だよ。

「まったく……」

「え〜と、とりあえずだな、俺も唯も今はこの当番で抜けられないんだよ。後30分したら行くよ」

親指で唯を指さしながら、俺はとりあえず溇に言う。

唯は今の声がおばさんっぽいから知らないが、何やらスナックのおばさん風の格好になっている。はつきり言うとは似合わん。

って言うかあいつの本来の可愛さが一気に消えた。……泣けるぜ。それを言った直後、教室の電気が突然消えた。またか。

「ちょっと、ホットプレートは3台までよ！ちゃんと守ってる！？」
「うちじゃないわよ！5組じゃないの！？」

文句かイライラをぶつけに来たか知らないが他クラスの少女が怒鳴りつけてくるが、うちの女子がそれを別のクラスのせいにする。

いや、5組のせいじゃないぞ。あそこはなんかアンケート発表とかいかにも時間がないから適当に決めとこうみたいな行事でお茶を濁してたし。

まったく、こんな素晴らしい行事なんだからもうちょっとマシなのを選べよ5組よ。

つてそんな事言っているうちに電気が復旧する。

「……なんか、大変そうだな」

「ああ、大変すぎだよ」

その後、湊は教室を後にしていった。それから10分ぐらいして、湊の悲鳴が聞こえたのは、気のせいではないだろう。

まあ大丈夫か。さてと、続きでもするか。と、焼きそば作りを続けていると、唯の前に真鍋が現れた。

何やら警備員のような帽子をかぶっており、腕には『実行委員』と書かれた腕章が装備されてあった。

「唯、声大丈夫なの？」

「部活で練習しすぎちゃったただだよ」

と言いながら、首につけてあるマフラーを振り回す。

「今日、初ステージでしょ？3時からだっけ？」

「うん」

「じゃあまだ時間あるし、練習しておきたいんじゃないの？」

「この担当が終わったらするつもり」

「そう、ならそっちに行っていていいわよ。誰か他の人に頼んでみるから。日暮君も」

ああ、俺の代わりはすぐに用意できるから唯の代わりだけ頼んどけ。「ええ、でもそれじゃあ……」

唯が口ごもる。こいつってなんだかんだ言いながら責任感は結構あ

るんだな。

気にしながら、俺は廊下で待っていた、浩史の所にダッシュで駆け出す。

「おい浩史、出番だぜ。頼むわ」

「了解。練習と、それから初ステージ、頑張つてね」

「おうよ！」

浩史にガッツポーズを送る。

着替えて、しばらく教室の前で待っていると、唯も来て、二人で一緒に律の所へ向かった。

律は頭になにやらきのこを生やしており、お前乾燥したところにいるすぎたからかびたのか？って聞くとまた頭を叩かれた。

痛いなあ、なんでみんな俺の頭叩くんだよ、バカになるだろうが。

「お前がしょうもない事を言うからだ！って唯、まだ声治んないの？」

「うん、イガイガする……」

確かにしんどそうだ。

「ねえねえ、その声でごつつぁんですって言うってみて」

律がくだらない注文をする。だが面白そうだ。

何も気にせず、唯は注文通り、ごつつぁんですと言った。

おもしれえ！！俺は場所も気にせず、大笑いした。

そのまま律もノツてきてそのまま力士のものまねをし始めた。俺もますます爆笑した。

……後で周りの目が非常に痛かった。やめろ、そんな目で俺を見るな！！

「ってそうじゃない！練習行くぞ！」

「ああ、もう少ししたら、ムギもあたしも交代になるからさ、先に部室に行つてよ。漣もいると思うからさ」

なんだ、漣部室にいるのか。てっきり保健室にでも運ばれたのかと思つたぞ。

俺と唯は、漣がいると思う部室へと駆けだしていった。

さて、部室に向かうと、唯はドアノブに手をかけた。
しかし、開けようとはしなかった。

「どうしたんだよ？」

「しー！」

ん？何かいるのか？部室のドアにつけられた硝子越しから、中を見る。

そこには澁が一人で窓側にポツンと立っていた。

「ずっと、練習してたんだろうな」

「りっちゃん達が来るまで待って、みんなで一斉に入るよ」

「そうだな……ってもう来たし」

律と紬が到着し、全員で一斉に部室のドアを開け、中へと侵入する。

「みんな……」

「待たせたな、んじゃ、練習するか」

「……まったく、遅いぞ」

お、澁がツンになった。ねえねえ、もう一回して！

「嫌だ！！」

……ちえ。

全員が集まり、音合わせをする。

律はまあまあと言っていたが、完璧だと思う。数週間前と比べたら雲泥の差だ。

「澁ちゃん、大丈夫そう？」

がらがらな声で唯が澁を気遣う。

澁は少し戸惑ってはいたが、一応うんと返した。やはり少しだけ心配だ。

すると、突然部室の扉が開き、さわ子が入ってきた。

「みんな、いるわね？」

「さわ子？どうかしたの　　っでいて！」

突然さわ子が頬をつねってくる。

「せ・ん・せ・い……だろうが、アア!？」

「すすすす、すいませんすいません!!ごめんなさい!!」
やべえ、めっちゃ怖い。あの目は人殺しの目だ。

……んな訳ないが。

「んで、何しに来たんだよ、先生」

「ふふふ、不本意ながらも軽音部の顧問になった事だし……」

不本意って言ういい方が気に入らなかったが、また言うと今度はグーが飛んできそうなのでやめておいた。

「事だし？」

「何か手伝う事がないかと思つて……」

「思つて？」

「衣装を作ってきましたああ!!」

ノリノリだこの先生!!

しかも衣裳つて……え、なんかすごいのはつかじゃね？

ゴスロリじゃねえか。ノイてんてーじゃねえか。……ジュルリ。

「いや、先生？気持ちはありがたいんだけど……」

「律！貴様、先生の気持ちを無駄にする気か!!ゴスロリだぞ!？」

最高じゃねえか!!」

俺は必死に全員に着させる様に説得するが、律は左を指さす。

その指の先には凍りついた溼の姿があった。

「あ……あんな服着て……歌うの……？あ……あ……大勢の前で……」

お、落着け溼！着ればきつと大丈夫だから！俺の心は癒されるから！

「お前の心だけだろ！」

律が珍しく俺にツッコんでくる。

「これはお気に召さなかったか……」

先生は残念そうな顔をする。いやいやいやいや、大丈夫ですから！
きつと着れば大丈夫だから！な、そうだろ溼!？」

……駄目だ、完全に着る気0だ。

「私の昔の衣装はどう!？」

「わゝ、さっきのが着たくなってきた〜！」
棒読みだぞ。しかも焦りながら言うな溼よ。

「ストップさわちゃん！」

律が止める。って言うかなんでさわちゃんはOKなんだよ。さわ子がダメで。

「こんな衣装は溼じゃなくても恥ずかしいよ」

「そ、そうだよな!？」

何を〜!! 貴様、俺のジャステイスを消去するつもりか!!

許さんぞ、許さんぞ貴様ら! ブンディサテライトでトランキライザーと同じ目に遭わせてやるぞ!?

「そうかなあ……頑張って作ったんだけどなあ……それに」

先生が右を見る。俺たちもその視線の後を追った。

そこにはスク水を着た唯と、ナーズ服を着た紬がいた。

……素晴らしい!! ゴスロリや制服ほどの破壊力ではないが、これでも十分だ!

すごい……すごいぞ先生! アンタは天才だ!!

「いやゝ、それほどでも」

「照れなくていいです! 後遼祐は少し黙ってる!!」
えゝ。

「えゝじゃない!」

その後は色々口論となったが、最終的には先生は出て行ってしまった。

チクショー!! 俺は認めんぞ! 必ずお前ら全員にゴスロリをきせてやるからなあああ!!

「んじゃこれ、講堂まで運んどいて」

大きなアンプを律が唯に手渡す。

俺はその姿を、後ろでアンプを持ちながら見ていた。

「あれ、そいや溼は?」

「ああ溼なら別の事をやってる。危なっかしくて溼に機材は運ばせ

られないよ」

ははは、そりゃそうだ。今放心状態だからなあいつ。やがて、俺は唯と共にアンプを講堂まで運ぶ旅に出た。

「おっとつとと……」

「大丈夫か？持ってやるうか？」

流石にアンプを女の子が持つのは大変だろう。

俺は助太刀の要請をしてやったが、唯は遠慮した。だけど絶対に転ぶぞお前。

再び、前を向いて運ぶ作業を再開すると、紬が鼻歌を歌いながら、アンプを軽々と運んでいる。

へえ、結構力あるんだ。

……え？紬が？見た目はお嬢様で力は唯よりなさそうなのに？人は見かけによらずってまさにこの事だったのか。

苦笑いをしながら、俺は運ぶ作業に集中した。

おい唯。やっぱ代われ。怖くなってきた。

講堂の裏に開いてあるドアの中に入ると、真鍋が誰かと話していた。打ち合わせだろうか。

「ああ、日暮君に唯。いま、演劇部が発表してるから隅に置いておいて」

「了解……つと」

唯の分と自分の分のアンプを指示通り隅に置く。

演劇部何やってんだろう、やっぱ終わった世界の女の子の話か？

だったら早く出てこいよアッキー。あの場面結構泣いたんだぞ俺。

それにしても……いよいよか。

ああ、この日をどれだけ待ち望んだ事か。

……待ち望んだ？ちよつと違うなあ……。

まあいい。とにかく、今まで練習の成果を全力で出せれるように頑張るか。

……あとゴスロリを着せるように説得しなければ……！！

10 「学園祭！そして初ライブ！！」（後編）

その後、何度か機材を運ぶために講堂と部室を往復し、なんとか仕事を終える事ができた。

だが結構疲れた。こんな時にお茶とお菓子が……。

「3人とも、お茶が入ったわよ〜」

「待つてました大統領！！」

「みんな〜、機材運ぶの終わった〜？」

お茶を堪能していると、漣が部室に入ってきた。

その顔はさっきまでと違い、かなりリラックスした顔だった。

「へえ、結構リラックスしてるじゃん。安心したよ」

「そりゃあ、私だつていつまでも子供じゃないんだから……」

細が漣の前にお茶を置き、漣はそのカップを手取る。

そのカップを取った手はかなり震えており、今にもお茶がこぼれそうだった。

「……」（めっちゃ緊張してる〜！？）「……」

「つたく、そんなに緊張していると本番で心臓止まるんじゃないかお前。」

「うう、そうかも……」

「ってそれはやばいぞ漣。緊急事態だぞ。」

「律！私とボーカル代わって！！」

漣は胸の前に手を合わせ、お願いする。

「おいおい、無茶言うなって。ドラムどうすんだよ。」

「私がやるから！！」

「ベースどうすんだよ！？」

「それも私がやるから！！」

「やってもらおうか！出来たらお前の事毎日漣さまって呼んでやるよ！！」

って言うかそれももう人間じゃねえよ！人間を超えた何かだろうが！！

「律、頼むよ〜！」

「離せ〜！！！」

必死にお願いするが聞いてもらえそうにない。

……なあ、なんで俺に頼まねえの？

「お前に頼んだら軽音部は破滅だああ！！！」

「何をお！？俺の美声をバカにしてんのか！？」

ついぶつつんしてしまう。

危うく喧嘩モードに入りそうだったが、

「ごめんね……！！！」

唯の一言で場の全員が静かになる。

「私がこんな声じゃなかったら、澪ちゃんが歌う事なかったのに……」

……本当にごめんね」

「唯……」

「やっぱり私がボーカルするよお！！！」

「いや、無理だから」

律と共に突っ込む。やれやれ、どうするんだよ本当に。

最終的には結局澪がボーカルと担当する事になった。

講堂のステージの端っこから唯と紬と共に、観客の状態を確認する。さっきの演劇がそうとういい出来だったのか、観客のテンションは急上昇していた。

……ふふふ、観客どもめ。そのテンションをさらに上げてスーパーハイテンションにしてやるよ。

そうすればお前たちの体は紫色に包まれて攻撃力がめっちゃ上がる

……って何を訳のわからん事を言ってるんだ俺は。

赤色のカーテンで隠れたステージに再び戻ると、俺たちが使用する楽器と機材が並んでいる。

ついにここまで来たか……やれやれ、ここまで来るのが非常に長い道のりだったぜ。

そして……。

「ゴスロリだああああ！イヤッホオオオウ！！岡崎サイコー！！

「遼祐落着け！」

なんと軽音部の女子部員全員はゴスロリを着用していたのだ。

最高だねマジで。もうこの勝負勝ったのも同然だね。うん。

「り、律……」

ステージ裏から漣が現れる。彼女も着たのは着たのだが、やはり恥ずかしい様子。

だがその恥ずかしそうにする動作が漣の来ている服と非常にマッチしてますます興奮してしまう。

今日つてもしかして俺の超ラッキーデーなのか！？最高じゃねえか！

「やっぱり、着なきゃだめなのか？」

「うふふふ、よく似合ってますわよ漣ちゅわん」

「うん！すっごく可愛いよ……」

「同じく……」

漣が怒る。その動作もまたよくて……。

……ってあれ、何か忘れてるような。

「あ、遼祐、お前、衣装は？」

そうだ。完全に唯や漣達ので忘れてた。

さわ子の奴、俺の分用意してなかっただ……。

「心配いらないわ……」

「さ、さわちゃんいつのまに……」

「日暮君、あなたの衣装もしっかり用意してあるわよ……」

マジッすか！？んで俺のはどんなのですか！？ジルベルトのですか

？もしかしてファミーユのですか？キュリオのですか！？

「……ふざけんなああ……」

なんと俺までゴスロリを着せられてしまった。

冗談じゃない！確かに見るのは最高だが着て喜ぶ程じゃないぞ俺は！！

「冗談よ。はいこれ」

「お、中々似合ってるじゃん」

「りょうくんかっこいい！！」

つて……これどこぞの借金執事の第2形態じゃねえか。丸パクリだぞ。

黒のロングコート状の物に、中には執事服をイメージした服を装備したいかにも執事服なコスチュームだった。

黒の長ズボンにチエーンをぶらさげて、もうそのまんま借金執事第2形態だった。

「でもかっこいいじゃない」

「いや、確かにさっきのよりはいいが……まあ、いつか」

たしかにかっこいいし。つて言うか今思うとこれコスプレじゃね？俺だけ。

『次は、軽音楽部の演奏です』

「お、いよいよ出番か」

「それじゃ、頑張ってるね！」

さわ子はステージを下りて、裏口から出て行った。

多分、観客席の方で見るのだろう。

「よし、んじゃ、おっはじめるか！」

「「「おー……」」」

「お、おー……」

「りょうくん」

「なんだ？」

配置に着き、ギターの最終確認してというと、唯が声を掛けてくる。

「……頑張ろうね！」

「……了解！」

それと同時に、舞台の幕が上がる。

……ついに、この時が来た。

そして、このギターで、全員で本番をする時が来た。

……親父、見てろよ。これが、俺の、俺たち軽音部の……。

ライブ
演奏だ。

幕が上がると、観客達の視線が俺たちの元に集中している。

それと同時に大きな拍手が鳴りまくっている。

小学生や中学生、この学校の生徒や他校の生徒、親や老人など、とにかくたくさんの人がこっちを見ている。

失敗は許されない。俺が失敗すると、みんなに迷惑がかかる。

だが自分の失敗の前に……俺は漣の事が何よりも心配だった。

本当はあいつと代わってやりたかったけど、やっぱりそれは無理だそうだった。

漣の顔はかなり固くなっている。何か一言言ってやればよかった。

「漣ちゃん！」

唯が漣に語りかける。ゆっくり漣は唯に顔を向けた。

……そうだよな、幕が開いたからって、喋るなって事は無かったんだよな。

「漣ちゃんが頑張って練習してるころ、みんな知ってるから！」

「そうだよ」

律も漣に話しかける。漣が顔を向けると軽く律が頷く。

「漣ちゃん」

次は紘。頑張れと囁く。やれやれ、この流れだと、俺も言わないといけないよな。

「漣」

こっちを向く漣。その顔をは今にも泣きそうと言っか、顔が真っ赤

になっていた。

「心配すんな。俺らがきつちりフォローしてやっから、全力で歌え」
「ペアと顔が輝き始める漣。そして最後に、

「頑張れ」

そう語りかけると、漣は時間をおいて頷き、観客側へと向く。

俺も観客側へと再び顔を向ける。

……え、お前は緊張してるのかって？

してるさ。昨日だって本当は全然寝れなかったんだぞ。

「1!!」

今だって、脚が少しブルブルと震えて全然止まりやしない。

「2!!」

だけど、俺なんかの緊張に比べれば、漣の緊張の何百倍もマシだ。

「3!!」

だからやってやるのさ。漣を必死にフォローしてやるために、俺が
全力を上げてやるしかない。

「4!!」

自分の緊張なんか知った事か。あいつだって頑張ってるのに、俺が
緊張で力出せなかったらどうすんだよ。

「1!!」

ここまで来たんだ。死ぬ気でやるしかない。

「2!!」

さあやるうぜ。俺たちの……。

「3!!!!」

最高のライブを!!

俺と唯のギター、そして律のドラムの音と絀と漣、そして観客の手
拍子が講堂中に広がる。

そしてしばらくすると、漣のベースのこっぴい音と共に、本格的
に全員が自分の楽器の音を出し始める。観客の手拍子はそのままで

った。

ちらつと澪の方を見ると、既にボーカルとして自信のついた澪の顔がそこにいた。

つい口元が緩み、俺は演奏に集中する。

やがて澪のボーカルが始まった。美しい声がマイクを通し、講堂中に響き渡る。

同時に、唯のバックコーラスも入る。喉はやられてもそこだけはないといけるのでやる事になっていた。

そいやこれって何がテーマの歌詞なんだろう。

歌詞的には恋する乙女のなんだろうけど、誰がモデルなんだ？

・
・
・
・
・

……大歓声大歓声大歓声。ただこれだけが俺達の世界を包み込んだのだと思った。

演奏が終わり、気がつくと、観客の全員が、立ちあがって拍手や歓声を送ってきてくれる。

最高だった。今までにないまったくすばらしい気分だった。まるで全世界が俺の物のように思えてくるほど。

そして、澪が

「みんな……ありがとうー！！！」

と言い、観客のテンションは最高潮。もうとにかく歓声しか聞こえなかった。

澪がお辞儀をすると、俺たちも後に続いてお辞儀をする。

これで、澪の恥ずかしがり屋も克服できそうだな。良かった良かった。うんうん。

そのまま全員は楽器を置いて任務を終えて、帰還しようとした時だった。

……あの出来事を俺たち軽音部のみんなは永遠に忘れる事はないだろう。うんうん。特に漣は。

漣が帰ろうとすると、アンプにつないであった漣のベースのコードが足に引っ掛かり、そのまま漣はボタンと転んでしまった。

そして……、まあ、なんだ。正直男の俺が言葉にするのは非常にあれなのだが……。

その、スカートの中が歓声を送ってくださっている観客の皆さまに見えてしまったわけでありまして……。

……って誰だあ！！今写メとった野郎は！？ぶっ殺されてえのか！？やがて、歓声を遥かに超える叫び声を上げながら、漣はパタリと力なく倒れてしまった。

唯と律が同時に漣に駆け寄り、そのまま足早に放心状態になってしまった漣を部室へと連れて帰った。

溜息と言つか、なんかかなり疲れた様子で、俺も後に続いて、ステージから立ち去ろうとすると、俺は観客席のところで、ある人物を目撃した。

「……え、親父……！？」

俺の前の親父らしき男が、観客席から立ち去り、講堂の出入り口へと向かって行くところが見えた。

袖に俺のギターを任せ、俺はダツシュで、講堂の入口へ向かった。外に出たが、見失い、親父らしき人物は既にいなくなっていた。

舌打ちをして、漣達を追いかける。

……でもあれは本当に親父だったのだろうか。違ったのか。

俺はポケットに手を入れ、軽音部の仲間がいる部室へ戻る事にする。

さて、その次の日。

「みんな、昨日はお疲れさ〜ん」

律がそういうと続けて唯と紬もお疲れさまと言っ。

俺は壁にもたれながら、その様子を見る。

「いや、唯は初ライブにしては素晴らしかったよ、遼祐も！
遼祐もって……俺おまけ？」

「まあまあ、そしてなんと！漣はファンクラブが出来たんだぜ！
ま、マジかー!？」

俺は出来てないのか……残念だ。

「まあ、当の本人は再起不能だけだな」

律の後ろには魂が抜けた抜け殻のような漣が体育座りで何かを呟いている。

まあ、時期に治るだろう。……多分。

そんな感じで、俺たちの学園祭、そして初ライブは終了した。

……さてと、来年も忙しくなりそうだな。頑張らねえとな。

「その前に漣ちゃんをなんとかしないと！」

ああ、そうだった。

10 「学園祭！そして初ライブ！！」（後編）（後書き）

はい。なんとか学園祭編終了しました。

3時間ぐらいでなんとか作ったのですが、その癖に誤字脱字も結構ありそうです。

……まあ、いいでしょう！とにかく完成しました！

この辺りになって段々遼祐の扱いが非常に便利になってきました。

基本ツッコミだけど、ボケも出来る。作者側としては便利すぎて仕方ありません。

さすが主人公。

しかしここまでボケさせると帰って引いてしまう人もいるかもしれませんが……。

と言うかあれはボケと言うより、ただの変態かもしれませんが。

まあいいでしょう！そこが遼祐の特徴さ！（蹴

小説の単行本であらわすとここで2巻が終了します。

ここまで来て未だにあんま話が進んでいませんが、それは作者が下手と言う事にして心の片隅にでも刻んでおいてください。

さて、次回から少々重めのストーリーに入るかもしれません。

この話の最後の方に遼祐の父親らしき人物が出てきましたが、それに関連した話をする予定です。

今後とも、私どもと、この「けいおん！ LOVE！LOVE！LOVE！」をよろしく願っています。

11 「発見？そして真実？？」

夏の暑さもようやく消え、冬の訪れを飽きるほど感じる11月の下旬。

俺はやはりいつもの様に軽音部の部室へと唯と共に適当な会話をしながら向かう。

それにしても夏はむちゃくちゃ暑かったくせに、冬になると思ったらむっちゃ寒くなるし。この地球壊れるんじゃない？

などと思いつながら冷え切った廊下をズボンのポケットに手を入れ、階段を上る。

息を吐くと白い息をかすかに見え、本当に寒いなと思う。

軽音部の部室への扉を開けると、まだ誰も到着していなかった。

「あれ、まだ誰も来てないね」

「ま、そのうち来るだろ」

鞆を長椅子に置き、それを枕にして長椅子に転がる。

それにしても本当に寒い。マジで凍死しそう。

唯を見ると、机にくっつけてある椅子を引っ張り、その椅子へと着席していた。

「今日は寒いね」

「そうだな。地球をアイスピックでつくと丁度いいぐらいに割れるかもな」

「アイスピックって？」

「……なんでもないっす」

溜息をつきながら、鞆からiPodを取り出し、適当な曲を選び、イヤホンを耳に当てようと思った時だった。

「遼祐、唯」

律が扉を開けた。はてさて、何やらあわてた様子だが、何かあったのだろうか？

「どうした、そんなあわてて」

「ごめん、今日の活動はお休み！」

……はい？なんかあったのか？

「ムギと澪もあたしも今日は用事があったさ。さわちゃんに言っと、今日は活動は休みだつて！」

ああ、そうなんだ。んじゃ、帰るか。

鞆を持って、肩にかけ、唯とともに、部室を出た。

律はいつのまにか帰っており、なんとという早業だなと思いつつながら、下駄箱の靴を履いた。

「あゝあ、今日やる事ないなあ」

唯は唇を突き出しながらそういう。俺も同感だ。

普段は休むことなく、軽音部へ行っているため、このように暇になる事はないのだが、今回はこのような予想できない事態が発生したため、本当にやることがない。

今日は金曜日なので、宿題は土日に戻せるし、ゲームもテレビも別に夜に出来るので、本当にやる事がない。

しかも今日は5時間授業だったので、余計暇なのだ。……リアルに暇だ。

と、今日のこの後の予定を考えていると、唯がいきなり話しかけてきた。

「ねえねえりょうくん！この後予定ある？」

「いいや、別にないけど」

「良かったら、一緒に遊びに行こうよ」

……来た。こんな感じな事をどれだけ待ち望んだ事か。

まあ友達としての付き合いだろうが。まあいいだろう。

「ああ、全然OK。んじゃ行こうぜ」

「うん！」

いまにも雪が降りそうな空を見つめながら、唯と並んで歩きだした。

商店街や楽器屋、ゲーセンに服屋など、色んな所を二人でブラブラ

と歩いていった。

そいや、俺ってこんな感じに女の子と一緒にどこかへ行ったりかないよなあ。

その前に俺一緒に遊んだ事あるの、浩史ぐらいしかいなかったな。他の奴は学校で適当に話すぐらいしかなかったし。

とまあこんな感じで適当に遊びまわっていた。

「ねえねえ、次どこ行こうか？」

あわてなさんな。まだ時間はあるんだから、ハンバーガーでも食べながらゆっくり考えようぜ。

と、言った時だった。

俺の横を誰かが通り過ぎていく。……おかしい。何かおかしかった。あの人が俺の横を通った途端、体のどこかが電撃で麻痺したような感覚に襲われた。

どうしたの？、と唯が心配してくるがはつきり聞こえなかった。

俺は後ろを振り向き、さつき通り過ぎた人物を探す。……見つけた。そしてその後ろ姿を見た瞬間、俺は言葉を失った。

何故なら、その人物は俺の、親父だった。あの優しかった。本当の学園祭の日以来、逢えなかったが、ようやく再会した。

あの時の人物は本当に親父なのかどうか知らないが、今はそれは関係ない。

「どうしたのりょうくん？」

「悪い、俺用事思い出した。また今度な！」

唯を適当にはぐらかし、俺は親父を追いかけた。

しかし、それは許されなかった。唯は俺のコートを引っ張っていた。「なんだよ！」

「……りょうくん、本当に用事？」

こいつは妙なところで鋭いから困る。

親父を見るが、まだ見失わない距離にいたが、このままここでぐだぐだと会話をしていると見失ってしまう。

俺は、決心した。

「……分かった、お前も来たいなら来い」

「友達だもん。一緒に行くよ」

友達か。ひよっとすると、これが原因で、そんな事言われなくなっ
ちまつかもな。

不安と期待が入り混じりながら、俺は唯と共に、親父を追いかけた。

こっそり、こっそりと尾行を続ける。

「りょうくん、あの人誰なの？」

「後で話す。今は黙ってる」

唯を黙らせ、尾行を再開する。

やがて、親父は古臭い家の玄関の扉の前に立ち尽くしていた。いや、
鍵を探していた。

俺は、そのまま親父の背中を引つ張る。

「！」

びっくりしたように、親父は俺の方を振り向いた。

……間違いない。親父だ。

少し老けているが、確実に俺の親父だ。

「……親父」

「……君は？」

「……遼祐だよ。あんたの息子の、『浅井遼祐』だよ！」

『日暮』ではない、旧姓の『浅井』を名乗った。

日暮の名字は、あの女が連れてきた男の名字だ。

本当は日暮の名など、これっぽっちも使いたくないのだが、戸籍上
ではそうなってしまっているんで、どうしても日暮を名乗らなけれ
ば高校に入れないのだ。

「……本当なのかい？」

「ああ。正真正銘、あんたの息子だ」

俺は親父をにらみつける。

別に恨みもないし、悪意もない。ただ、つい警戒してしまう。

「……そうか、大きくなったな。……立ち話もなんだ。とりあえず

家に入りなさい。そっちの女の子も」

女の子？……ああ、そういうえは唯がいたな。親父と出会ってしまった事で、すっかり忘れていた。

唯は後ろで驚いた表情で、こちらを見ていた。

「あの、わたしは……」

「構わないよ。遼祐の彼女さんでしょう？」

違う違う違う違う違う違う！！！！

俺と唯は必死に否定した。

……だが、この否定が妙に心にダメージを与えている。なんでだ。

「そうか、お友達だったか。まあいいさ。とにかく入りなさい」

俺と唯は、親父の家の中へ入った。

中はやはり見た目通りと言うか、とにかく古臭いと言うか、何とと言うか。

家具は生活するのに最低限な物しか置かれておらず、なんだか殺風景だった。

小さめのテーブルのそばに腰を下ろすと、それと同時に、親父は俺と唯の前に、お茶を置いた。

「それで、どうして父さんがこの町にいると分かったんだ？」

「……親父、アンタ、これ覚えてるよな？」

俺は背中に背負っていたギター入れの中から、黒がベースで赤で色付けされたギターを取り出す。

それを見た瞬間、親父の目は死んだ魚の目から、少しだけ生きている人間の目をした。

「……そういう事か。まさか、バンドをしてるのか？」

「ああ」

「そうか……」

親父は溜息交じりにそんな言葉を返す。

「なあ、教えてくれ」

「何をだ？」

「なんで、なんで親父は……、あの女と別れたんだ」
あの女と言うのが、誰の事なのか、親父は知っているような感じだった。

「……あいつ《母さん》は、今どうしてる？」

「知らねえよ、新しい男と一緒に俺ら捨てて逃げたよ」

しまった。唯は事情を知らないんだ。と、唯の方をちらっと見ると、唯は何が何やら、よく分からない様子だった。

正直、こいつをこの話に巻き込みたくなかったのだが、ここまで来ると、仕方ない。

諦めて、俺は親父の方を再び見る。

「そうか。……雫紅は元気か？」

「元気すぎてこっちが疲れる」

「そうか。……そうか」

姉貴の事を確認すると、少しだけ、親父の顔がゆるんだ様に見えた。やはり、姉貴の事は心配だったのか。そりゃそうか。

「……知りたいか」

「何が」

「……なんで父さんと母さんが、別れたのか」

「知りたいからここまで来たんだ」

どんな真実でも受け止めてやるさ。

そう誓ったんだからな。

「……そうか」

この人の口癖って「そうか」なのだろうか？

どうでもいい事を思いながら、親父の話聞く事にした。

その前に……。

「唯、別にあれだったら帰ってもいいぞ」

「……ううん。わたしも話聞く」

何言ってるんだ。お前、だって……。

「りょうくんは友達だし、仲間だもん。だから、困ってるなら放っておけないよ」

……ははは、そっか。
俺、いい友達持ったな。

そう思いながら、つい口元がゆるんでしまう。
それを合図にしたように、親父は話を始めた。

「……父さんと母さんの出会いは知ってるな？」

「ああ、姉貴から大体は聞いた」

って言うかそこから話すのか。

「父さんはな、高校の時、一人空き教室で、授業サボってギターを弾いてるような奴だったんだ。

そんなとき、出会ったのが、母さんだ。

母さんはその高校では結構な悪でな、俺も問題児扱いされていたせいか、自然と話をするようになった。」

おいおい、まさか俺が不良っぽくなっちゃった（というかなった）のは親の遺伝だったのか？

「そのうち、お互いを好きになり始めてな、高3の時……雫紅を母さんがお腹に宿した」

……もしかしてでき婚だったの俺の親！？

「そして、父さんと母さんは、親に反対されながらも、高校を中退し、結婚した。

父さんは仕事を始めた。そして、雫紅が生まれて、その後、お前も生まれた。

幸せだと思ってた。貧乏ながらも、ここまで幸せだから、父さんは凄く嬉しかった。だから、毎日、働いた。

だけど、ある日、父さんが働いてた会社は倒産して、その借金額を、全て父さんに押し付けられたんだ」

……まさか……。

「そして、父さんは、母さんに言ったんだ。そして、お前や雫紅に被害が行かないよう、母さんにお前たちを任せて、離婚した」

……はは、ははははは。

そうだったんだ。はは、ははははは。

俺は笑いしかこみあげてこなかった。なんか、正直言って、もう頭がおかしくなりそうだった。

そんな……それが原因だったのか。

「……そっか。……そうだったのかよ」

親父は、俺たちを守るために、離婚したのか。

……なのに、なのに……あの女は……！

新しい男が出来て、俺らの事なんかどうでもよかったんだ。

そう思うと、なんだか腹が立ってきた。

……そして、俺は、何故か、親父に、キレていた。

「ふざけんな……」

唯と親父は同時に俺を見る。

俺はいつものまにか、立っていた。

「あんたのせいじゃねえか。……全部、こつなつたのも」

「りょうくん……？」

「あんたが、ちゃんと、真剣に考えて、姉貴を作っちまったのが、

原因じゃねえか……！

ふざけんなよ、ちゃんと高校卒業して、大学でもなんでもいいからもつと上の学校行って、ちゃんとした会社に入れば、こつならずに済んだじゃねえか……！」

「遼祐……」

「あんたのせいで、俺は……俺たちは、こんなむちゃくちゃな人生送らされてたのかよ……！」

違う。俺が言いたいのはそうじゃない。

親父のせいになんかしても何もならないだろう。なのに、口が止まらない。

「アンタの事、今まで、すっげえいい親父と思ってた俺が間違いだつたよ……、帰るぞ、唯」

俺は鞆とギターを持って、ドカドカと親父の家から出ていた。

唯を見ると、親父に一礼すると、俺を追いかけてくる。
……違うんだ。俺はアンタに怒りたかったんじゃない。
なんなんだ。何なんだよ畜生。
怒りや色んな物が混じった感情を抱きながら、俺は唯とともに、とつと家から出た。

「悪かったな。……その、こんな事に、巻き込まれて」
公園のベンチに腰掛けながら、俺は唯に謝る。

唯は関係ない。なのに、あんな事に巻き込んでしまった。

「ううん。気にしないでいいよ。……わたしこと、勝手に話の中に入って、ごめんね」

なんで唯が謝る。お前は謝らなくていいんだよ。

俺はすっかり黒い雲が消えた夕日を見ながら、唯に言う。

「……俺さ」

唯がこつちを見る。

「俺な、楠中にいたんだ。2年の後半から」

「そうだったの……？」

唯は信じられない様な声を出す。

楠中はこの辺りの人間なら当たり前の様に知っている。

「ああ。前は、違う中学校にいたんだけど、お袋と、別の男が、俺と姉貴を捨ててな、そんな時から、俺おかしくなっちゃって」

「……」

唯は黙って俺の話を聞いている。今までにない、集中した顔だ。

俺も、その顔をちらっと見ながら、話を続ける。

「バスケット部に入ってたんだけどな、俺、でも、色々あって、右肩壊して出来なくなっただけ、それに加えて、親に捨てられて、もう、本当にくるってた。」

それからずっと喧嘩ばかりしてな。だから、俺はその中学校辞めて、楠中に入って、ずっと喧嘩ばかりしてた」

「そうだったんだ……」

「ホント、俺の人生、狂いっぱなしだよ……。ホントに……。ホントにな……。はは」

目から何かがこぼれおちる。……。水、ではなく、涙だった。自慢ではないが、俺は、医者に右肩壊れたって言われた日から、一度も泣かなかった。

って言うか、泣くような事がなかったって言うか。

そして、俺は1年と半年ぶりの涙を、今ここで流していた。

悲しかったんじゃない、いや、悲しかったのか。

あんな事実を知って、俺は、悪くない、むしろ、守ってくれた、親父に、あんな事を言ってしまった。

……。だからなのかどうかではないが、泣いていた。

恥ずかしい。唯が見てんだぞ？本当に、かつこ悪い。

……。ふと、片方の手に、誰かの手が当たる。

それをたどると、そこには唯の顔があった。

泣きそうな顔と言うか、何か、笑ってるんだけど、複雑なモノ《感情》を抱えたような、そんな顔をしていた。

だけど、その顔はとても心温かくて。だから、俺は……。

「唯……」

唯は何も言わない。

「……唯……！……」

つい、衝動的に、唯を抱きしめてしまう。

別に好意があるわけでもない。……。いや、分かんが。

だけど、唯のその顔を見ると、なんだか……。なんだか。

「泣いてもいいよ」

え？

「泣きたい時に、泣いてもいいよ。そういうのは、我慢しないでいいんだよ」

「ゆ、……唯……」

バカ。変な事言うなよ。どうせテレビかなんかで聞いた台詞なんだろうが。

だけど、やっぱり心が温かくなっていった……。

俺は、そのまま唯を抱きしめながら、泣きまくった。

今まで溜めていたしていた悲しみを、解き放つかのように……。

「ごめんな。こんな遅くになっちゃって」

「ううん、気にしなくていいよ」

俺は唯を家まで送ってやってた。

恋人でもないのに抱きしめてしまったんだ。これぐらいやらせろよ。

「……あと、抱きしめて、ごめん」

顔をそむけながら言う。唯の顔は見えないが、何も言ってこなかった。

「……嫌われたか？」

「りょうくん」

「なんだ？」

また、一緒にどっか遊びに行こうね。

……もちろん。今度は全部俺のおごりだ。

そういうと素直に喜ぶ唯。現金な奴だ。

そして、唯は俺にさよならを言うと、俺たちは別れた。

ふと空を見ると、再び雲が暗闇の空を覆っている。

「今日は雪でも降るのかな……？」

そんな事を思いながら、俺は家路についた。

「お腹すいたぞりょうすけ」

ああ、また忘れてた。

12「クリスマス！そしてパーティー！」

クリスマス……イエス・キリストの誕生日だからどうかこうとか
っていう行事なのだが、今の俺にはどうでもいい話だ。

そりゃあ子供の時はサンタクロースがプレゼントをくれるからと言
う理由とごちそうが食べれると言う理由で楽しみにしていた。あの
ときは良かった。

だが！俺も既に立派な高校生だ。

クリスマスにしか仕事をしないもはや二トに近いジジイの存在な
ど、とつくに信じちゃいない。

特にごちそうは、今では俺が作らなくてはならない。手の込んだも
のを作るのはどちらかと言えば料理好きの俺にとっては、楽しいに
は楽しいが、面倒でもある。

まあだからと言って別にクリスマスが嫌いなのではない。むしろ
好きな方もかもしれない。

アセンブラが流れてきたり、どこかの巨大ビルや空港を舞台にM9
2F一丁でテロリストと戦う訳でもなければ俺は楽しみさ。

……さて、我が軽音部でも、すっかりクリスマスのムードであり、
俺以外全員女子部員のこの軽音部では、クリスマス当日にパーティ
が開かれる事になった。

もちろん俺も大事件に巻き込まれたり、病気になったりしない限り
は参加するつもりだ。

「日時は12月24日、場所は紬の家、会費千円……って金取るの
かよ」

正直懐がさみしい今月は痛い出費だが、まあ変な物を買ってそのま
ま放置よりは全然マシだろう。

しかし、どうやら開催場所である紬の家は都合が悪いらしく、なに
やら1カ月前から予約しとかないとできないと言う大人気の家らし
い。って言うかどんな家だよ。

「りっちゃんのお家はどうぞ？」

「あゝ、ダメダメ。律の家は汚くて足の踏み場もないから」

ははははは、こいつは傑作だ。爆笑していると、律にげんこつを食らわされた。漣より痛かったぞ。

とまあこんな感じで、結局開催場所は唯の家になった。

ちなみに、漣の家はどうやら服が脱ぎ散らかっているらしく、流石に人に見せられる状態ではない（と律が言っている）ので、没になった。

って言うか唯の家の両親どうなってんだよ。子供ほったらかしてクリスマスに旅行？ どれだけラブラブなんだよ。ユーノとなのはもびつくりだぞ。……いや、あいつらの方が酷いか。

そもそもユーノとなのははバカップルすぎるんだよ。誰が書いても大抵はバカップルじゃねえか。まあ仕方ないか、……って何の話をしてるんだ俺は。

作者、自分の本音を俺に言わるのはやめろ。正直迷惑してるんだぞ。

「何か用意するものはある？」

「料理は任せて！」

唯が自信満々に言う。……どうせ作るのは憂ちゃんなんだろう。

1人悟ってしまった俺は、つい溜息が出てしまった。ホント出来た妹で良かったな。

……それにしても唯は料理ができるのだろうか？ 作っているところを見てみたい気もする。きつと似合ってるんだらうなあ。

エプロンつけて、んで料理作ってる途中に旦那（俺）が帰ってくるんだ。そんでそっから……ぐふ、ぐふふふふふ。

ってなんて妄想してるんだ！ どの裕一みたいな妄想してるんだよ俺は。

「あ、そうだ！ あれやるよ、プレゼント交換！」

「いいねえ！」

「やるやるう！」

「漣、変な物持ってくるなよ！」

「それはお前だろ！律だつて小学校の時……」

「やれやれ、いつのまにか俺置いてけぼりにされちゃってるじゃねえか。」

「まだ温かい紅茶を一口飲み、再び溜息をついた。ニヤニヤ笑いながら。」

「え、クリスマス会？軽音部のみんなと？」

「そつ。門村君もどうかたと」

「下校途中に、たまたま1人で歩いていた浩史を律が捕まえ、交渉している。」

「僕部外者だけどいいの？」

「全然。大歓迎だよ！あたしたち、友達だし」

「浩史は俺の方を向く。何故俺を見る。」

「適当に笑つてごまかし、浩史はOKした。会費を稼ぐためと知らずに……。」

「ちなみに、真鍋も参加する事になった。やれやれ、みんなして律の思惑に引っ掛かってやがる。」

「後で俺が会費を全部受け取らなければ。経費担当としてな。」

「あ、そつだ！遼祐のお姉さんも誘つてみてよ！あたし一度会つてみたかつたんだ〜」

「ええ、姉貴も!？」

「最悪だ。なんでこの軽音部 + のパーティに姉貴を誘わなくてはならんのだ。」

「酒飲んで暴れるぞあいつ。」

「アルコール禁止」

「ああ、それならいいかも……つてそれもそれもでなあ……。」

「結局、姉貴を誘う事になった。」

「いいじゃん！アタシも、軽音部のみんなに逢つてみたかつたし！」

「……頼むから、騒ぐなよ。はしゃぐなよ。黙っておとなしくケー」

キと飯食ってればいいからな。後アルコール禁止」

「へえ、ワインとビールもって行きたかったのに」

なんでクリスマスにビール！？どこの瑞奈ルートだよ！会社の飲み会じゃねえか。

本当に連れて行って大丈夫なのだろうか。クリスマスが非常に心配になってきた。

少しだけ、アセンブラでも流失しねえかなと思った俺はかなり罰あたりなのだろうか。

「ああ、そうだ。プレゼント交換しなきゃいけないだった」

「へえ。んじやなんか適当に買ってきてよ。なんでもいいからさ」
アンタ本当に参加する気あんの？と思ったが、面倒なので口に出すのはやめておこう。

明日は、浩史とともにプレゼント買いに行かなければな。……プレゼントト代出せよ。五万ぐらい。

「いいよ」

冗談で言ったのに……。

「これどう？」

「知るか。って言うかそんなもん誰も欲しくねえだろ……！」

浩史が手に取ったのは、孫の手だ。マジでいらねえ。あ、でも紬は欲しがるかもな。

って言うか、もうちょっと違う店にしようぜ。なんで イソーなんだよ。アニメ トとかブツ オフでいいだろ。

「それもそれでどうかと思うよ」
それもそうか。

そしてクリスマス会当日。

俺は姉貴と浩史とともに、唯の家の前に到着していた。

「へえ、ここですか？けっこう大きいわね」

俺らの家が小さいだけだよ。

「お〜い、遼祐〜！」

唯の家に姉貴と浩史とともに入ろうとした直後、律と漣と紬がやってきた。

「あ、こんにちわ〜」

律が姉貴に挨拶する。同時に漣と紬も挨拶をする。

「こんにちわ。へえ、いい子ばかりじゃない。この子にはもったいないぐらいねえ」

「うるせえ！いいから行くぞ！」

これ以上喋っていると、色んな意味でやばい展開になりそうだ。

俺は唯の家のインターホンを押し、憂ちゃんが唯のどちらかが出てくるのを待ち構えた。

まあ大体予想はつくが……。

やっぱり予想通り。憂ちゃんが現れた。

階段の上からは唯がああ輪っかの飾り付ける奴を首にかけながら、参上した。

遊び人の姉と働き者の妹……、不幸なドラマが始まりそんな設定だな。まあ、大丈夫か。多分。

「いや〜、うまさうじゃん。遼祐より全然料理上手いんじゃない？ いや、こればかりは姉貴の言う通りかもしれん。

目の前には、これでもかと言わんばかりの料理の数々が並べられ、どれも非常においしそうなおいを部屋中に撒き散らしている。

しかも見た目超綺麗だし。

「憂ちゃんが作ってくれたの？」
と、紬。

「失礼な！私もちゃんと作ったよ！」

マジか？どれ作ったんだ？

「このケーキ！」

「おおすげ〜！」

純粹に褒める律。唯はケーキを自分の頭より上に差し出した。え、

なんだお前料理できるんじゃない。すげえなあ。

結構綺麗じゃん。完成度高けーなオイ。

「……………の上に苺を載せました」

「アタシの俺いつたすげえを返せ!!」

「ダメ？」

…………… だらうな畜生。

その後、憂ちゃんが必死に唯をフォローするのだが、そのシーンがなんか色々と悲しくて、つい涙が出そうになった。

そんな事関係なしに、バカで空気の読めない姉貴は大爆笑している。頼むから黙れ。つまみだすぞ。

「……………カンパ〜イ!」

俺と姉貴と浩史、唯に憂ちゃんに紬、漣と律とさわ子の9人は一斉にシャンパンの入ったグラスを同時にぶつけあい、鳴らす。

いや〜、やっぱり楽しいなあ。と思いながら、シャンパンを口に入れる。

ちなみに真鍋はどうやら遅れてくるらしい。

……………ん、ちよつと待て。9人? おかしいぞ。誰か一人多くね? 真鍋を入れたら10人だからおかしいぞ?

俺、姉貴、浩史、唯、憂ちゃん、漣、律、紬、さわ子…………… って!!!

「なんでお前がいるんださわ子!!!」

俺は横にいる顧問の山中さわ子に声を怒鳴る。 って言うか…………… ええ! ? なんでアンタがいるんすか! ?

おかしいっしょ! ? 招待したっけ! ?

「まったく、顧問を忘れるなんてどついう事?」

「いや知らねーし! ? って言うかアンタいつ俺らがパーティーするって聞いたんすか! ?」

「顧問をなめたら…………… だ・め・よ?」

いや、全然可愛くないんすけど。

「なんですつてえええええ! ?」

「ぎゃああああああー！ごめんごめん！ヘルプ！誰かヘルプ！」
ヘッドロックを行ってくるさわ子に、俺はギブアップした。おお痛
てえ……。

マジで痛いっす。

そして爆笑している姉貴。マジで窓から放り投げるぞ。

「先生は彼氏と予定があると思って呼びませんでした〜」

まさかの核を投下してしまった唯。なんて核を討つんだ！ピースウ
オーカーもびっくりだぞ！恐るべし天然。

って言うか「ゆい」ってつく奴は大抵天然なの？風見もそうだし、
こいつもそうだし……。やれやれ。

唯はさわ子に口を引つ張られ、わめいている。痛そうだ。

「罰としてこれを着なさい」

さわ子がどこから取り出したのは、ハンガーにかかってあるミニ
……スカ……の、サンタコス……で……。

え、唯が？ミニスカ？サンタ？クリスマスに？……じゅるり。口か
らよだれが溢れまくっている。

「遼祐、なんだそのいやらしい目は？」

何！？俺のポーカーフェイスが読まれていたと！？

「口からよだれ出まくってるぞ」

ちい、今度はバレない様にしなれば……。

「って言うかせんでええ！！」

濡から殴られる。へへん、もう慣れたもんね〜。痛くないよ〜！
ちなみに唯は着替え中であるため、このやり取りは聞いていない。
良かった〜。

「えへへ〜、似合う？」

うんうんうんうんうんうんうん！！似合いすぎて頭がどうにかしそ
う！！

「とっくに逝ってるでしょアンタの頭」

なんで俺の心の中が読めるんだ姉貴。俺さっきの口に出してないぞ。

「出てたわよ思いつきり」

……もうお婿に行けない……。

「そこはお嫁に行けないだろ……」

澪が突っ込む。いいだろ、新しい言葉だよ。

「うーん、ダメね」

何！？さわ子！貴様、唯にケチをつける気か！確かに胸はないが、他は大丈夫だろう！！

「唯ちゃんは恥じらいが無いわ。ここはやっぱり……」

と、澪に視線を向けるさわ子。そしえおびえる澪。ははは、やっぱりか。だがそれもそれでいいかも。

……ってあれ？なんで唯の時より興奮があんまり少ないんだ？胸は澪の方が唯より何倍もあるぞ？

そして追いかけてこを始めてしまふ澪とさわ子。俺はその様子を眺めながら、チキンを食べていた。

「……もう、お嫁にいけない……」

これが正しい使い方だな。まあ気にするな。誰かもらってくれらる。

「そんな無責任な事言うな！」

澪がふたたび殴る。あれ、今度はむっちゃ痛いぞ。……痛てえええええええ！！

ついさつき到着した真鍋が呆れたような様子をしている。こらこらく、もつと盛り上げれよそこ〜。

「よっしゃ！気を取り直して、プレゼント交換でもするか〜！」

「お〜！！」

律の提案に唯がおおはしゃぎ。律、お前ってホント空気読めるよな。いい子だ。

……だが時に空気ブレイカーにもなりうるが。壊すのなら死亡フラグだけにしろ。

「あ、でも先生は？」

真鍋の言葉に一瞬場の空気が死ぬ。……真鍋、お前が空気ブレイカーだったか。

「大丈夫よ。先生もちゃんと持ってきてるわ」

……良かったな真鍋。空気ブレイカーにならずに済んで。

「……今日、本当は彼氏に渡すはずのプレゼントだったんだけど……」

真の空気ブレイカーはお前だったかさわ子!!

覚悟しろ!この歩く死亡フラグと言われた作者が生んだ主人公である俺が成敗してくれるわあ!!

……とまあ、こんなどうでもいい事はさておき、プレゼント交換をする事になる。

「歌が終わった所でプレゼントよ」

さわ子がみんなが出したプレゼント一人ずつ適当に回していく。

そしてジングルベルを歌い始める。なんかやけくそじゃねえかおい。って言うかももう少し選曲考えろよ。ラストクリ マスとか、クリスマス関連と言う事で J i h a d とか。

やがて歌が終了し、プレゼント交換が終了する。

「あ、これあたしのプレゼント……」

律は自分のが当たってしまった。

「じゃあ私のと交換しましょう」

無理やりプレゼントをチェンジして、綺麗にラッピングされた包装紙を汚く破り捨て、中の箱を開けた瞬間……。

中のひよこか何か知らん動物が、さわ子の頭を殴る。どうやらびっくり箱の様だ。

全員は何故か俺の後ろに隠れ始める。何、さわ子がキレたら俺がなんとかしろっての!?冗談じゃない!俺がかなう相手じゃないだろう!!

しかし、さわ子は不敵に笑みを浮かび始め、やがてなにやら大爆笑し始めた。

……ついにさわ子が壊れた。もともと壊れていたがますます壊れた。

全員がそれぞれのプレゼントを開け始める。

紬はマラカスだった。漣のプレゼントだ。……って言うかもうちよつと何か別のは無かったのかよ。

律は……。

「……何これ」

「あ、それ僕のだ」

孫の手だ。……お前本当にあれ買ったのかよ!?

え〜と、俺のさわ子か。彼氏にあげるのだからきつと何か金属類か何か……。

「なんじゃこりゃああああああ!」

俺が叫ぶと同時に漣が悲鳴を上げる。

なんだよこのいかにもイカしてるCDは!!--これを彼氏にあげるつもりだったのかよ!?

「……そうよおおおお!!悪かったわねええええ!!」

さわ子が泣き始める。……もしかして本当の空気ブレイカーって、俺っすか?

「よ〜し!次は一発芸大会するぞおお!!」

完全に親父だ。って言うか姉貴、お前完全に溶け込んでるじゃねえか。律と息ぴったりじゃねえか。

苦笑いしながら、俺はそう心の中で喋った。

……そして、綺麗で優しい(とみんなが思っていた)さわ子が訳のわからん親父みたいな一発芸をしたせいで、イメージが崩壊した。とまあこんな感じで、クリスマス会は終了。解散となった。

ちなみに会費を本気で律は回収していたが、経費担当の俺が取り上げた。泣きわめくんじゃありません。自分の懐に入れるな。どこの汚職政治家だ。

……クリスマス会、なんだかんだ言って、すっげえ楽しかった。

また、来年もやりたいな。……出来たら新人部員と、そして、さわ子と姉貴を外して。

ちなみにその後、律とさわ子と姉貴は、夜の街へと繰り出していった。律く、アルコールはダメだぞく。

13 「気持ち。そして初めての…」

……樹に宿っている桜は非常に綺麗で、まさに青春と言う感じだった。

そんな桜が美しい樹が並んでいる道を、俺は大事な軽音部の仲間たちと歩いている。

実際は4人が歩いているのを後ろからとことこ着いて行ってるだけだが、それもそれでのんびりできていい。

春休みが目前に迫った3月の中ごろ。俺は春休みがまだかまだかとうずうずしていた。

だけど、それでも、俺の心の中で、何かが渦巻いている。

それまでに、何かに決着をつけなければならぬ様な。そんな気が。「りょうくん？」

親父の事もかもしれない。あれから、俺は親父に逢っていない。姉貴にはこの事は伝えてない。

だがそれではない気がする。確かにそれも大事だが、他にも何かありそうな気がする。

じゃあなんだ？ 一体なんだってんだ？

「りょうくん！」

「うわっ！！なんだよ、急に大声出し」

唯がびっくりするほど近くにいた。ホント、呼吸の音が聞こえそうな位近くに。

「……………」

「どうしたの？ さっきからずっとボーっとしてたよ？」

「……………あ、ああ。ごめん。ちよつと考え事」

……………なんだ。一体なんだってんだ。

唯を適当にはぐらかし、俺は歩く事に集中した。

いかんいかん、また唯に心配をかけてしまった。

あの出来事から、唯はよく俺の事を今まで以上に心配してくれるよ

うになった。

ちよつと俺がボーっとしてるだけで、さっきみたいに心配してくる。

だけど、正直唯をこれ以上、俺の事情に首を突っ込んでほしくない。

……やっぱりこのもやもやは、親父の事か？いや、違う。

なんかこう……。

「ははん、それは恋ですな？」

……律、意味が分からん。

最近ボーっとしている事が多くなった俺に、律がいきなり言った。

「は？」

「だーかーらー、きつと遼祐は唯が好きなんだよ」

ブツッ！細の入れた温かい紅茶を口に入れた直後にそんな事を言ったので、カップに押し戻されてしまった。

しかも一部は気管に入ってしまった、思いつきりせき込む。

「ふざけんな！！って言うかなんで唯！？」

「だって、二人とも仲いいしさ、同じクラスだしさ」

冗談じゃない。確かに唯は可愛いぞ。

だが！……あいつの事を本気で好きと感じた事は一度もない。……はずだ。

ちなみにここは部室だが、唯は理由があつて今は席をはずしている。

「確かに、それは言えてるかもな」

遷！お前だけはフォローしてくれろと信じてたんだぞ！！

……細、頼むからフォローしてくれ。流れを変えてく。

「そういえば私も気になってたの！」

まさかの裏切りだアアア！！

もうこの軽音部に俺の仲間はいないのか……。

「それで？遼祐はどう思ってるんだ？」

「どつって……」

とりあえず、答えは保留にしていた。その後、すぐに唯が来たしな。…… 1人で帰りながら、俺は唯の事ばかり考えていた。

確かにあいつは可愛いと思う。天然だけど、つい守ってあげたく感じな女の子だ。

ドジっ子だし、誰かがそばにいないと何かややこしい事になりそうだし。

だけど…… 本気であいつの事を、俺は考えた事がなかった。唯を抱きしめた事はあるけど、あん時はそれ以外の事で、頭いっぱいだったし。

「はあ、恋愛かあ」

正直に言おう。俺は今まで誰かを好きになったことなんか一度もない。本当に。

小学校も中学校も誰かを本気で好きになった子はいなかった。可愛いと思う事はかなりあったが。

それか、俺がただ鈍感なだけなのだろうか？ 実は心のどっかで好きになっていたのだろうか。

…… そうかもしれない。と言う事は、やはり俺は唯の事が好きなのだろうか。

だとしても、それがどうなる？

第一、唯は俺の事をどう思ってるのかすらわからない。俺の本当の姿を知って、実は失望しているのかもしれない。

いや、失望しちやいないか。本当にそうだったら、一緒に帰ったり、二人でどっか行ったり、そんなことできるわけがない。

じゃあ、あいつも俺の事好きなのか？

…… ないない。少なくとも大事な友達とぐらいいしか思っていないだろう。それも分からないが。

さてよ、もしかしたらあいつには百合要素があるかもしれない。

しまったあああ！ きつとそうだ。あいつよく細にべたべたくっついてるし。

可愛い女子新入部員が入ってきたら、毎日スキンシップとかするのかなあ？

……って俺は何を言ってるんだ。これ悪口じゃねえか。いかんいかん。なんか頭が混乱してきてるな。

よし、とりあえずこれは心の片隅にでも置いておこう。そうしよう。そうしよう。

気がつくくと、俺は家に帰っていた。

「ふうん、んじゃ今日は帰らないんだな」

家に帰って、部屋でごろごろしているとポケットに入れておいた携帯が震え始めた。

手にとって見ると、姉貴からの電話で、どうやら今日は『友達』の家に泊まるらしい。

……『友達』ねえ。なんか男の声が少し聞こえてきたが。

『うん。んじゃそういう事で　ってちよ………！』

切れた。間違いない。あいつ、彼氏がいる。

……ふざけんな！！冗談じゃない！！あいつ今まで彼氏なんかいたことなかったんだぞ！？

告白は何百回もあったらしいが、全部芋みたいな男ばかりで断つてたらしい。

許さん。自分だけいい思いしやがって………！！こっちゃんあ恋愛で悩んでるのによ………！！

「チクシヨー！！もういい！！今日は特上ステーキ丼と山盛りフライドポテトだ！！ついであいつの酒も飲んでやる！！」

未成年？知ったこっちゃねえ！！姉貴は高校生のころから飲んでたぞ！俺だっけいいだろうが！！

夕飯の材料を買いに行くため、俺は家を出た。まったく……。

スーパーまで距離は遠いと言う訳でなければ近いわけでもなく、中途半端な距離である。

今まではそんな中途半端な距離にイライラしていたが、今回は色々
と落着ける時間を手に入れた為、感謝している。

思えば俺は何故あんなにイラついていたのだろう。って言うか未成
年だろうが。酒なんか飲むなよ俺。煙草は昔吸っていたが。ちなみ
に今は吸っていない。

そんな事を思いながら、横断歩道を歩いていた時だった。向こうか
ら歩いてくる人物を見た瞬間、思考が停止する。

「唯……?」

「あ、りょうくんだ!おゝい!」

おゝいって、たかが15メートルぐらいしか離れてないだろう。

唯はこちらに駆け寄ってくる。手にはスーパーのビニール袋を引っ
かけてるところを見ると、どうやら買い物物の帰りか。

と、思っていると唯がつまずく。まずい!!

「唯!」

あわてて走り出し、唯を地面と衝突する寸前で受け止める。

「大丈夫か?」

「う、うん。ありがとうね」

良かった。怪我はないようだ。

「買い物帰りか?」

「うん。カレーのルーが切れちゃってて、わたしが憂の代わりに買
いに行つてたんだ」

ああ、そういう事か。

「そっだ!りょうくん、これからわたしの家で一緒にご飯食べよう
よ!」

「え?でも、迷惑じゃないか?」

「うっん、今日もお父さんとお母さんいないから、全然大丈夫だよ
!」

はあ。……まあいいか。明日は土曜だし。

……って言うか、唯の家!?!……何を焦ってるんだ俺。唯の家なん
か何度も行つたらう。何度と言つても2回ぐらいだが。

何故だ。一体何故？やっぱり俺は、唯の事好きなのか？

とりあえず唯がせっかく誘ってくれてるんだ。お言葉に甘えるか。

「まあいいけど」

「やった〜！じゃ行こ！」

唯に手を引つ張られながら、唯の家へ共に向かった。

……手？……おい！手繋いでるじゃねえか俺ら！

まあいいか。悪くない気分だし。せっかくだから唯の手の感触でも味わっておこつ。

……って言い方が変態じゃねえか。

りっちゃんに言った作戦は見事に第一段階を突破する事が出来た。

この作戦、本当はもっと先の予定だったけど、まさか今日実現させることができるなんて思いもよらなかつた。

りょうくと二人だけで会える状況が必要だったから、色々調整するのが難しかったけど、今ここで会えるなんて。今日のわたしは運がいいのかな？

わたしはりょうくの事が好き。いつから好きになってたかは分からないけど、りょうくんお家の事情を知ったあの日から、りょうくんの事が頭から離れなかつた。

その事を、りょうくん以外の軽音部のみんなに言つと、それは『恋』だと言われた。

最初はからかっているのかなと思つたけど、自分で考えてみるとそうだった。

わたしは、りょうくんの事が好きだった。

りょうくんがわたしの事をどう思っているかは分からないけど、わたしなりにやれる事はやってみたい。

そして、りょうくと両想いになりたい。ずっと一緒にいたい。そんな想いは、いつしかわたしの心の中を支配していた。他の事も考えてるけど、やっぱりりょうくんへの想いの方が強かった。そんな事を思いながら、いつのまにかわたしたちは自分の家の前に到着していた。

まさかあんなところで唯と出会えるとは思わなかったが、唯の家で夕飯をごちそうになるとはますます思わなかった。

テーブルの下に開いてある椅子に座らせられながら俺は思った。

憂ちゃんは俺の事を歓迎してくれた。よかった。だが！！……まさか、俺はこの後の事態をまったく予想してなかった。

いや、予想はしてたよ。夕飯御馳走になって帰るってところはね。でもさあ……こんなのは流石に想像できなかった。

「りょうくん今日泊まっていきなよ！」

……へ？間抜けな言葉が口から出るだけだった。

流石にそこまで憂ちゃんが賛成するとは思わなかったが、俺にいいかどうか聞いた後、喜んだ。

って言うか俺はいつのまにか「うん」と言ってしまったらしい。

だが断る事は出来なかった。何故なら既に完全にそんなムードが出来上がってしまった、唯なんかさつきからご機嫌すぎている。

この笑顔を奪う事は出来ず、俺は結局カレーを食べている時には、完全に俺も「泊まれるの？やったー」状態だった。

「ごちそうさま。美味しかったよ憂ちゃん」

「よかった、お口に合って。じゃあ片づけま」

「いいよ、俺やるから。泊まらせてくれるんだからそれぐらいさせ

てくれって」

うん。泊まらせてくれてるのに何もしないのはやっぱり俺のなにかが許さなかった。

俺が泊まらせてくれって頼んだ訳ではないが、何か後ろめたくなっ
てしまうので、俺はこう言ってみた。

憂ちゃんは遠慮していたが、やっぱり俺は引き下がれず、俺がやる
事になった。

何かこれもこれで後ろめたくなるが、片づけ＋皿洗いをした後、そ
んな気持ちは無くなっていった。

そして3人で色々雑談して、風呂に入って、自分の寝部屋に向か
い、布団に転がる。

「……なんか。落着かん」

そりゃそうだ。女の子の家に泊まった事なんか一度もない。

よくこういう恋愛小説につきものの女の子の幼馴染なんかいないし、
しかも女の子と遊んだりしたりするのは高校になって初めてだった。
枕に顔をうずめて、色々と考えてみる。やっぱり、俺は唯の事が好
きなのか。

でも、やっぱり自分の気持ち分からない。じゃあ告白してみるか？
冗談じゃない。なんとなく玉砕するのが想像できる。……あれ、俺
ってヘタレ？

ふと、うんしょと上半身を上げてみる。

「……何やってる」

「寝てる」

なんと目の前に唯が寝転がっていたので驚いた。いや、まあ驚いた
には驚いたが何故かこういう展開に慣れてしまった。

「寝てるじゃねえ！お前自分の部屋あんだろ！？」

「あるけど、りょうくんとお話したかったんだよ」

……はあ。まあ、いいけどな。

「りょうくん」

「なんだ？」

「……りょうくんは、好きな子とかいるの？」

はてさて、律とかから何か指示されてこんなこと言ってるのではないだろうか疑うが、まあそんな器用な事がこいつにはできないかと思ひ、その考えは破棄した。

「……どう答えよう。試しに律が好きって言うてみるか。……ややこしい事になりそうなのでやめとこう。」

んじゃあ唯が好きと言ってみるか。……何故だ。それもそれでいいような気がする。

上を向いて考えていると、何故か俺は唯の顔を見た。

……可愛い。

ヘアピンをつけてなく、髪がボサボサ気味なのだが、それもそれでもたいい。むしろそのほうがいいかも。

でも、そんな事を関係なしに、やっぱり純粋に可愛いと思える。

……可愛いから、好きなのか？

違う。そんなの本当の好きじゃない。

ふと、唯のいいところを考えてみる。……天然なところ。……ってそこはいいところか？

優しいところ？……そこはあるかもしれない。

また唯の顔を見る。

「ん？どうしたの？」

小さく首をかしげて心配する。

……そうか。

分かった。理由なんかない。

俺は、ただ普通に唯が好きただけなんだ。

「……いるよ」

「……そっか。そうだよね」

何故か唯がうつむく。もしかして、やっぱり、唯は……。

「……あのさ、唯」

「え？」

「その……俺、本当は……！！」

「おねえちゃん。お風呂空いたよ」

……憂ちゃん。もう少し、あともう少しタイミングをずらしてほしかった。

「うん。分かった。じゃあねりょうくん！」

「あ、ああ……」

憂ちゃんと唯が部屋からいなくなると、再び布団に寝転がる。

……まあ、いいか。

焦らなくてもいいじゃん。ゆっくり、ゆっくりでいいぞ。それに、

「唯が本当に俺の事好きかどうか分かんねえし」

自分の甘い勘違いだ。そうだ。

ま、自分の気持ちに気づけた。それだけでも十分だ。

安心すると、俺はいつのまにか眠りにについていた。

……唯の夢でも見れたらいいなあ。

お風呂からあがって、ついりょうくんが寝ている部屋の扉の前にわたしは立ってしまっていた。

って言うか、わたしはここから先の事を何も考えていない。

「……どうしよう」

りょうくんが起きている事を信じ、ふと扉を開ける。

……やはり部屋は暗く、りょうくんはぐっすり寝ていた。

月明かりで少しだけ部屋は明るく、りょうくんの寝顔はまどから現

れる光で良く見えた。

やっぱり寝顔もかっこいい。

りょうくんはすっごくかっこいいし、すっごく優しいし、料理も出来るから、わたしの理想の男の子だった。

料理が出来ると発覚したのは、1学期の家庭科の実践授業の時。周りのみんなが野菜を焦がしたりする中、一人平気な顔で黙々と行っていた。

平気な顔だけど、なんだかすごく楽しそう。そういうところも好きになっていった。

「……………ちよつとだけ」

しゃがんで、りょうくんの顔に近づいてみる。

……………残り2センチ。

……………残り1センチ。

……………途中で動作が止まる。

「……………やっぱり、駄目かな」

距離を離そうと思った時だった。

「……………!!」

自分の唇と、りょうくんの唇が、重なっていた。

おかしい。距離は離れたはずなのに。

重なったと思ったら、すぐに離れた。

……………りょうくん、もしかしてすっごくねぞうが悪いのかな？

でもこれはねぞうが悪いと言うか……………。

「……………いいのかな？」

まあいい。……………あれ。

ひよつとしてこれって……………。

「ファースト、キス？」

……………わたしの初めてのキスがこんなにもムードの無いものとは思わなかった。

だげど、りょつくと出来たのは凄く嬉しかったから、わたしは鼻歌交じりに部屋を後にした。

13 「気持ち。そして初めての…」 (後書き)

唯視点も取り入れてみました。

今回はどうしても入れたかったシーンがあったので入れてみましたけど、これからも唯視点を入れるかもしれません。

また、今回唯の口調がちょっとおかしいかな思いましたが、まあ、いいか。(よくねえ)

14「新人部員！そして……あれ……？」（前編）（前書き）

けいおんOPとED変わりましたね。EDの方が評価高いですが自分はOPの方が好きです。

最近OP見ると遼祐が出てくるのは病気なのだろうか？

14 「新入部員！そして……あれ……？」（前編）

桜が舞い散る道を一人とことこと歩き、俺はいつもの様に桜高へと向かう。

右手にバッグを、左肩にはギターを背負い、平らである歩道を歩く。それにしても高2か。早いもんだよ。ついこの間高校生になったかと思っただらもう1年たってたんだな。まあ作者のストーリーの進み具合が早すぎるからな。仕方ないか。

って言うか作者さあ、もうちょっとオリスト増やせよ。どの小説もこんなに早く2年生になんねえよ？30話位してからしてからだぞ普通？

……作者、いいかげん他の小説のネタ入れるのやめろ。いいかげん怒られるぞ。成や蓮やてつくくんがキレてくるぞ。

どうでもいい事を思っているといつのまにか校門に到着していた。

……何故だろう。

昨日部活で来たばかりなのに、何か雰囲気が違う。なんだろうか。

「……2年生になったからかな？」

多分そうだと思う。って言うかそうかもな。

2年生だから今までみたいに遊んでばっかいられないからみんな本気なのかな。

……ま、俺はまだゆっくり遊ぶけどね！！

「んじゃ、行きますか」

校門をくぐりぬけ、校舎へと向かう。

さてと、クラス分けどうなってんのかな。唯たちと一緒にだったらいいんだけどな。

その前に唯たちどこ行っただら。先行ったのかな？

……嘘だ。いや、違う。ありえない。

京ア二！！余計な事をするなと指示しておいたはずだろうが！！

周りが騒ぎまくっている中、たった1人、絶望の淵に立たされていた。

「なんで……誰とも一緒じゃないんだよ……!!」
正直泣いていいですか？泣かないと決めた日はありませんから泣いていいですか？

冗談じゃない!!必ずいるはずだ。誰か、誰か知り合いが!!

……なんだ。俺見間違えてたんだ。浩史と漣と真鍋がいるじゃん。良かった。本当に良かった。

安心したぜ。よし、んじゃあ早速教室に行くか。俺は教室へと向かった。

教室に着くと既に浩史が席についていた。

自分の席を確認し机に鞆を置くと、早速浩史の元へ向かう。

「よっ」

「あ、遼祐！同じクラスだったんだね！」

おい、親友のクラスぐらいいついでに確認しとけよ。

悪態をつくど、俺は他の話に切り替える。

「そいや、漣と真鍋も一緒だったな」

「へえ、秋山さんと真鍋さんも一緒なんだ」

完全に自分のところしか見てねえよこいつ。いつのまにそんなに性格悪くなったんだよ。

「ま、そういうこつた。また一年よろしくな」

「こちらこそよろしく」

丁度のタイミングで漣が教室にふらふらと侵入してくる。

……こいつ俺の名前も浩史も真鍋も見てねえな。

さて、この日は午前中には日程は終了し、午後からがこの日の本番となる。

俺と軽音部の全員は1年生のいる2階へと向かい、早速新入部員獲得作戦を実行する。

「なあ、新入部員獲得作戦ってありきたりじゃね？『オルタネイティブ？』とかどうよ？」

「どこのマブラヴだ！……それにしても、他の部でいっぱいだな……」

辺りを見ると既に他の部が見渡すかぎりに配置されており、正直心配になってきた。その前に何故澪が元ネタ知ってんだよ。

とりあえずチラシだチラシ！澪、チラシプリーズ！

澪はこっちにチラシを手渡す。……。

「うわ、普通……」

「悪かったな！！」

いや、でもこれは普通すぎじゃね？もうちょっとパンチの利いたの作ろうぜ。

だが肝心のパンチがない。律がお菓子とお茶お代わり自由ですと言つて唯が賛同したがそれは軽音部の本質とは関係ないだろうに。

しばらく考え込み、ある提案をした。

「とりあえずそこにいる奴らを適当に捕まえてくればいいだろ。『

バンドをしよう。バンド名はリトルバスターズだ！』とか言えば大丈夫だろ」

「よくない！って言うかまったく関係ないのが入ってる！」

……どうするべきか。

本気で考え、腕組していたがこんな事をしてるとどんどん部員が取られていく。

すると、誰かが俺の肩に手を置く。腕を追いかけるとそこにはさわ子がいた。

「さわ子……？」

「無いなら……付け加えるまでよ！」

……本気で心配なんっすけど。

……ふざけんなあああああ！！ナメとんのかコラああアアア！！
本気でそう叫びたくなる。やはりさわ子の考えはろくな事がない。

もうマジで殴りに行っていいかな？

あの後何やら無理やり動物の着ぐるみを着せられただいま外でビラ配りをさせられている。

「軽音部に入りませんか？」

「楽しいよ」

何故だ。何故このような状況がお前らは楽しめれるんだ。

俺はやだね。って言うか恥ずかしいよ。クラスで流行ってるものを唯一知らない奴並に恥ずかしいね。

「……なあ。一つ思ったんだけどさあ」

「何？」

……俺はこんな恥ずかしい思いをしなくてもいい方法を説明した。それを聞いた瞬間、4人とも目を輝かして賛同してくれた。お前らも嫌だったのか。

「……いや、違うって。俺が言った作戦と違うだろ？」

着ぐるみを捨てるように部室の端っこに放置しておき、後は俺の作戦通りに4人が動いてくれる予定だったのだが。

俺の作戦はこうだ。

まず4人にメイド服を着てもらい、その後俺が男子生徒を無理やり首根っこを掴んで部室へ連行。そのままOKしてもらって作戦だった。しかし、何故か俺はどこにあったかは知らないがさわ子が持ってきた……、ホストっぽい服を着せられ、今に至るわけである。

「だって無理やりやる気のない男子連れてきても仕方ないだろ？」

いや、まあいいじゃん。メイド服見ればみんなやる気上がるって。

「それはお前だけだ!!」

まあまあ。……と、そんなほのぼのしてる場合じゃない。

「……まあ、やるだけやってみるか。部員ゲットの為だしな」

結局この作戦に乗ってしまった。やれやれ。

……来ない。誰も来ない。

椅子に座って紅茶をすすっているが、来ない。

「なんでだ！ポスターにかっこいい男子生徒いますって書いたんだぞ！？」

「ポスターそのものを見てないだけじゃね？」

「やれやれ。困ったもんだよホント。」

「もういいだろ脱いで。誰も来ないし」

「ああ、まあいいよ」

なんかこれって着てるとむさくるしいと言うかなんというか。

なんか残念そうな目をしている4人を放置し、俺は更衣室化している隅にある私物置き室へと制服片手に向かった。

結局その日は憂ちゃんとその友人である鈴木純って言う子、その二人だけが来客して終了となった。

まあ4人のメイド服姿が見れただけでもよしとするか。

え、みんなメイド服着たのかって？着たよ。着ましたよ。俺が着替えた後、さわ子に無理やり着せられてたよ。

……やっぱり唯が一番似合ってたね。意外と律も似合ってたなあ。紬と澪は当然似合ってた。

「そんで？部員希望は結局来なかったと」

「ああ。明日の新勧ライブに賭けるしかねえよ」

夕食でのバカでリア充の姉貴との会話。

大学卒業して、普通の会社に就職した。……だが何一つ変わっていない。

もう少しOLとしての自覚持てよ。OLとあれだろ？もうちょっとと清楚にしとけて。

「OLの現状を知らない奴はすっこんでなさい」

「へいへい」

夕飯の鳥鍋の肉を箸で掴んで口に放り込む。ああうまい。

「そうそう、言うの忘れてた」

「なんだよ？」

だから、本当の家族で、ずっと一緒にいた姉貴がいなくなると思うと、やっぱり、寂しい。

「……姉貴」

「何よ？」

「……お幸せに」

「アンタからそんな言葉が出ると気持ち悪いわね」

素直にありがとうって返せ。バカ姉貴。

次の日。俺たち軽音部は講堂のステージでライブの準備をしていた。部員希望が来ないって言うのはきつと俺たちの影が薄いんだ。だったら影を濃くすればいい。簡単な話だ。

漣と共に講堂に集まっている新入生を見ているが、やっぱり多い。何やら今年の新入生は非常に多かったそうだ。

まあしょうがないか。なんせ去年共学になり、設立一年目の野球部がいきなり甲子園出場を果たしたり、男子陸上部が全国大会でベスト4の成績を残したりと、とんでもない事になっていた。

女子の方も男子が入って気合いが入ったのか、ソフトボール部が全国大会で第3位だったり、テニス部が全国4位になったり、なんとも今年は凄い事になっていた。

そのおかげで男子入学者が非常に少なかった去年に比べ、3倍以上の生徒が入学したそうだ。ホントすげえな桜高。

それに比べて、文芸部で、しかも廃部寸前だった軽音部はと言うと学祭のライブで最高の盛り上がりを見せましたっただけだしな。

しかしそれでも部員希望が来ないのは何故っすか？演劇部なんか3人ぐらいいたじゃん。ふざけんなと思ったぞ俺は。

「ま、このライブを本気ですれば、誰か入ってくれるってきつと」だといいいけどな。

しかしライブか。半年ぶりじゃねえか。腕さびってねえかな？

まあ大丈夫か。一応何度も練習してるし。だが新曲が三つもあるって結構凄いなオイ。しかも全部作詞は漣だ。タイトルもやはり変わ

ったセンスをしている。

前回からコンバートされている『ふわふわ時間タイム』、『カレーのちらイス』に『わたしの恋はホッチキス』『ふでペンボールペン』……やっぱり変わってる。

だが何故だ。どうして唯だけがボーカルしてんだよ。俺の曲は？

「お前が歌つたらそれこそ誰も来なくなる」

なんだと律！？貴様バカにしているのか！？

「こんだけあるんだから澪も一曲歌つたら？」

「やだ！！」

そこまで拒否らんでも。

一応説得を試みるがやはりだめだった。

と、唯と紬がふざけて、

「ラーメンだけじゃ……」

「やだ！！」

「餃子もつかなきや……」

「やだ！！」

どんだけ拒否つてんだ。そんなにあの事件がトラウマなのだろうか。

まあ仕方ないか。……あれはな。うん。

「しょうがないわねえ……」

さわ子がいきなり舞台の横から現れる。まあいつもの事だが。

「ボーカルは唯ちゃんだけでいいんじゃない？」

そんな無責任に言うなよ。あんた顧問だろ。

『次は、軽音楽部によるクラブ紹介と演奏です』

幕が開き、新入生たちの視線が俺の方に向く。やっぱりいっぱいいるなあ。

しばらく間を置くと、隣にいる唯が色々とクラブ紹介を始める。

唯はこの軽音部のMC（ライブで司会をしたりするあの喋ってる人）である。俺もやりたかったのだが唯がやった方が色々と効果が高い

らしい。……悲しい。

そして一通りの紹介を噛まずに終わると、いよいよ本番の演奏タイムに入る。

ふわふわ時間、カレーのちライス、わたしの恋はホツキス、ふでペンボールペン……途中でどちらになんとか終了した。（唯が歌うのを忘れて溼が歌うと言っ緊急事態はあつたが）

それでも十分出来たと思う。さて、後は新入部員が来る事を祈るだけだな。……こいよ新入部員。

部室に戻り、しばらく休憩していた、

するとどうだ、だ〜れも来ない。いよいよ軽音部崩壊の危機か？冗談よそうぜおい。

だがまだライブ終わってから一時間しか経ってない。っーことはあれだ。新入生がまだ軽音部に入るか迷っていると言っ事だ。

うん、きつとそうだ。そう願っ、俺はトイレに向かった。階段を下りて、角を曲がった時だった。

「いて！」「いたっ！」

胸と腹部の間位に鈍い痛みが走る。そこを見てみると小柄な女子生徒の姿が。

「あ、ごめん。大丈夫か？」

「い、いえ。大丈夫です……」

ツインテールの生徒は一礼し、とっとその場から立ち去る。

と、俺もさつさとトイレに向かおうと再び歩こうと思っ時だった。

「あ、あのー！」
ん？

後ろから声がしたので振り向くと、さっきの女子生徒がこっちを見ていた。

「どうかした？」

「いえ。その、軽音部の部室ってこの階段を上った所にあるんですよね……？」

……背中に電撃を食らったような衝撃を味わった。
まさか……！！この……小柄でツインテールで赤いリボンの新入生
は……！！！！

「まさか、軽音部の……」

「は、はい。入部希望者で……」

俺はその言葉を聞いた瞬間、彼女の両手を掴み、

「お名前は？」

「な、中野梓です……」

「中野梓さん。今日の俺の幸運の女神はあなたです」

「はあ……」

困ったような顔をするが知ったこっちゃない。

俺は彼女の手を引っ張り、軽音部の部室への階段を駆け上がる。

その階段を昇る時間は1秒にも満たない速さだったような気がする。

「あ、ちょっとタイム。トイレ行ってくるからそこにいて」

「は、はあ……」

階段の踊り場に中野梓を放置し、俺はトイレへと全速力で向かった。
こればかりは遅かったような気がする。

14 「新入部員！そして……あれ……？」（前編）（後書き）

「けいおん！ - i f s t o r y - 」 「桜高軽音部」 「けいおん！
たまにはこんな話も」 「の作者様、勝手に主人公の名前出して
申し訳ございませんでした……」。

15 「新人部員！そして……あれ……？」 (後編) (前書き)

なんかもう文章もストーリーもわやくそで中身がとんでもなく酷い
です。

御観覧の際はそこを踏まえて御覧ください。

15 「新入部員！そして……あれ……？」（後編）

この時をどれほど待ったか……、生き恥を晒した甲斐があったというものだ。（晒してねえ）

トイレから全速力で帰って来た後、俺は中野を部室へと連れて行っ
た。

「喜べ諸君！ついに新たな同志がやってきたぞ……！」

……あれ、みんな。何黙ってんの？新入部員が来たんだ

「ようこそ軽音部へ……！」早く！こっちこっち……！」

俺を押しつけて律と唯が中野を奥のテールへ連れて行く。

何故だろう。俺の心の中で何かが悲しくなった。……うん。

だがまあいいさ。待望の新入部員だ。楽しくやっていこうじゃねえか。俺はそう思い、きやあきやあ騒いでいるみんなの元へ歩み寄る。

さて、ここで新入部員の事について説明しよう。

中野梓。1年2組所属で、パートはギターを少しやっているそうだ。

ギターが三人、ついに誰かが2軍落ちか？……な訳ないか。

「よろしくお願いします、日暮先輩」

せ、先輩？……先輩？兄貴とかボスとかじゃなくて？

……中学のぐれてた時を思い出す。あのときは先輩とかじゃなくてボスやら兄貴やらまあとにかくむさくるしい男どもが適当に呼びやがってた。

だが……今は違う。

先輩だぜ先輩？最高じゃねえか。嬉しすぎて……涙が出そうだアア

ア……

「おーい、帰ってこい」

とりあえずなんか弾いてもらおうと言う事で、唯は中野にギターを手渡す。

「まだ、初心者なので上手くないですけど……」

「だいじょうぶ！わたしがきつちり教えてあげるよ！」

…… お前教えられるほど上手いわけではないだろうに。

心の中で冷たく突っ込んだのを合図にしたかの様に、中野は華麗な手さばきでギターを弾き始めた。

華麗？…… ああ、華麗だ。カレーだよ。

おい、唯より上手いんじゃない？俺もやられそうだぜ？うん。

周りを見ると、4人はあまりの上手さにしばらく放心状態だった。全員を俺は現世へと魂を呼び戻す。

「あ、あの、どうでしたか？」

「え〜と、その……「ま、まだまだね！」……おいコラ」

唯を小突く。当たり前だ。いくら好きとは言え、今のは納得できんぞ。素直に自分の腕を認める。

「だってー、なんかくやしいもーん！！」

悔しいって……。だったらもつと本気で練習しろ。学校で。

「えっと、とりあえず入部はするんだな？」

「はい！新歓ライブの演奏を聴いて、私すっごく感動しました！」

…… 嬉しいよ。泣きたくなってきたよ俺。こつという言葉を待ち望んでたんだよ。

やつぱり中野さん……、あんたは俺の幸運の女神だ。うん。

「あ、これ入部届です」

ご丁寧に入部届けを差し出す中野。

それを律が受け取り、経理兼人事の俺に差し出してくる。

「確かに受け取ったよ、明日からよろしくね」

「それじゃあ、失礼します」

中野は部室のドアを開け、一礼すると、部屋の外へと消えていった。出て言った瞬間、唯が「……どうしよう！」と悲鳴を上げた。

「練習しとけ」「」

律と俺は同時に言い放つ。やれやれ……。

次の日。俺はどうでもいい授業の終了をまだかまだかと待ち構えていた。

やがて6時間目の授業の終了を告げるチャイムが鳴った瞬間、俺は一目散で教室から逃走した。(漣を連れて)

部室へ行くと、既に期待の新人、中野梓は到着していた。まあ初日でね、遅刻するなんて事はないだろう。この子の性格からして。いかにも真面目そうだし。

……だからこそ、俺は不安で不安でしようがなかった。この後の行動に、彼女が納得するかどうか。

俺は席へつき、紅茶を飲みながら、紬の持ってきたケーキを一口。やはり美味しい。

鞆の中からファミ通を取りだし、読み始めた。……ああ、なんか嫌な予感しかしない。

すると何を思ったか、中野はいきなりギターを取り出し弾き始めた。やばい!!それをしたら……。

「うるさああああああい!!!!」

……言わんこつちやない。案の定、やはりさわ子は中野にキレた。前に一度俺も似たような事をした。もちろん怒られた。しかも殴られたんだぜ。痛かったよ。

中野はビビって、しゃがんで泣き始めてしまった。

「ごめんな。あの先生ちよつと変なの」

漣が慰めに行く。こらさわ子、おいとかなわない。本当の事だろう。「気にしないでね」

「あ、ケーキ食べよ!!」

紬と唯もフォローへ向かう。よかった、これぐらいの事で怒るほど真面目な奴じゃ……。

「こんなんじや駄目ですうううう!!!!」

……ああ、やっぱりこういう予想は当たるんだ。あは、あはははは……。正直泣きたいよ。

当たるんだっいたらもつと別のものに当たりたい。例えば宝くじとか。「みなさんやる気が感じられないです!!」

「いや、新勧終わつた後だし……」

「そんなの関係ありません!音楽室を私物化するのも良くないと思います!ティーセットは全部撤去すべきです!!」

細とさわ子がシヨックを受けている。まあそりゃそうか。

「それだけは勘弁して〜!」

「なんで先生が言っんですか!」

「まあ落着いて……」

「これが落ち着いていられますかあ……」

中野の叫びが消える。何事かと思うと、唯が後ろから中野を抱いていた。……羨ましい。

つて言うか、そんなんで効くとは思わんぞ?

だがその予想は見事に裏切られた。中野の怒りがこもっていた顔が一気に消えて何かとても幸せそうな顔に変化した。

……だがやはり羨ましい。

「取り乱してすいませんでした……」

頭を下げて先ほどの件を謝罪する中野。

「ううん、気にしてないから」

いや、それもそれでどうかと思うぞ?中野的に考えて。

「梓の言うことも一理あるよ。……私たちももつとやる気を出さないとい……」

……そいや、真面目ちゃんがもう1人いたなあ。漣と言う奴が。

去年ほど固くなつてはないが、やはりこういう考えが基本なのは変わらない。

まあ、少なくともこいつらの方が正しいと言えば正しいのだろう。本気で武道館目指すんならちつたあ本気で練習ぐらいしねえとな。

だが！やはり遊ぶ時は遊ぶけどね。

それから二日後。軽音部への道の途中、中野と鉢合わせした。こっちの存在に気付くと、何やらちよっと動揺した。やっぱりこの前の事を気にしているのだろうか？

「よっ、梓」

「あ、日暮先輩……」

「遼祐でいいって。部室行くんだろ？一緒に行こうぜ」

小さくうなずくと、梓は部室へ歩み始める。俺も後に続く。

なんだろう。梓の背中がものすごく小さく見える。この前の事を気にしているのだろうか？

「もしかして、まだ気にしてんのか？この前の事」

「……はい。それで、部室へ行きにくくて……」

「大丈夫だよ、気にすんな。部室行ったら絶対その考え変わるから」
頭に疑問符を浮かばせる梓。すぐわかるよ。

「……確かに」

「だろ？」

部室へ到着すると、やはり唯たちはティータイムをしていた。俺たち……って言うか梓を見た瞬間にティーセットを片づけようとしていた。

唯はと言うとギターを持ち上げ、引き始めるが、すぐにぶっ倒れてしまう。ケーキを食べてないからか？

「唯ちゃん、あ〜ん」

紬がケーキの一部分をフォークに刺して差し出す。唯は口を開け、ケーキを口に入れる。

「……！！」

ケーキを食べた瞬間、唯はSEEDに覚醒したのか、ものすごい勢いでギターを弾き始める。

こいつ、ニュータイプだったのか！？……関係ないな。

「美味しいよ、梓ちゃんも食べて」

唯はケーキを刺したフォークを持ち、梓に歩み寄る。さて、どうする梓。

最初は後ろに引いていた梓だが、何を思ったか、口を開けてケーキを入れてしまった。……もう知らん。

「お、美味しい……」

あらまあ、ケーキ好きだったの？まあ女の子だもんな。つて待て。そんな事言うときつとうちの部長が……。

「ん？なんだつて？」

「お、おしいつて言ったんです！」

嘘です！律！騙されてはいけません！

うるさい、俺はもう黙ってるから。つて言うか作者喋らせるな。

「そっか……気に入らなかつたかあ……」

それを唯が言うつと梓が困つたような顔をした。なんか申し訳ない気持ちにでもなつたのか？

唯はそれを見逃さなかった。ケーキの乗った皿を梓に差し出すと、周りからピンク色のオーラが漂い、表情が明るくなった。

しかしケーキを後ろに下げると、黒のオーラが漂い、表情が再び暗くなる。唯はその行動を永遠にループし始める。

「やめる唯。それ以上やると梓が可愛そうだ」

「でも、面白いよ？りょうくんもやるつよ！」

面白いつて口にするな、梓がまたキレるぞ。

「生憎俺はそういうの遊びは興味ないんだ。まあ、もうちよつと上のR指定がつきそうな遊びなら喜んで……」

……空気が死んだ。ごめん、やっぱ俺が空気ブレイカーだったわ。許してください。

みんなが俺を嫌な目で見てくる。やめる、そんな目で俺を見るなあああ！！

結局なんだかんだ言つて梓もティータイムに参加してしまった。も

う知らんぞ俺は。

あの後、すぐにさわ子と澪が到着して、さわ子も澪も驚いていたが、まあ気にしない。

さわ子はどうやらもうティータイムは二度とやらないと思っていたらしく、それを覚悟で部室に来たらしい。どうりでいつものハイテンションで部室に來なかつたんだ。

まあ最終的にはティータイム復活と聞いて大喜びしていつものハイテンションに戻ったが。

「そうだったわ、梓ちゃんにプレゼントがあるのよ」

そんな事言いながらポケットを探るさわ子。

梓はどんなものかわくわくしていたが、ぜってえロクなもんじゃない。……ほらやっぱり。

さわ子の手にはネコミミらしき……って言うかネコミミが握られていた。うわ、ひでえ。

「つげなさい！」

「嫌ですよ！先輩たちも嫌ですよね!？」

いいえ、澪と俺を除く軽音部の皆さまは気にせずに装着しますよ。

見事に順番につけ終わると、唯が梓にネコミミを手渡す。ちなみに俺は着けてないぞ。いやマジで。

結局梓はネコミミを装着してしまった。あれ、結構似合ってたね？

「梓！ニヤーって言うってみて!」

バカたれ！何をとんでもない事を言ってるんだ！その辺にしとけ！またキれるぞ！伸風に言うのと怒らせる（スイツチオン）させるなよ！

「……ニヤー?……はっ!?つい!」

……あくあ終わった。これから一生ネタキャラとして生きていくんだろうなあ。

さて、多分あだ名が作られるな。恐らく……。

「あだ名は『あずにゃん』で決定だね!」

おめでとう梓。ああ、あずにゃん。お前もいじられキャラとして軽音部の仲間になったんだぜ。

さて、梓が入部して既に1カ月がたった。どんだけ時が飛んだんだよ。何があったんだオイ。時の歌でもオカリナで吹いたか？

話は変わるが俺たちは今、昼休憩の部室にいる。何やら漣が緊急会議をするらしい。

「新入部員が入ったのに、私たちがだらだらするのはダメだと思うんだよな。」

このままじゃ梓、軽音部を辞めてしまいかもしれないぞ」

そりゃ大げさだろ。と思ったがやはりそれもあるかもしれない。だが梓の性格を考えるとその可能性は否定できない。

つまり、漣の言ってる事は正しいのだ。今回ばかりは本気で考えなければならぬ。

「あずにゃんがいなくなるのはやだあ！！」

唯もこの事実を重く受け止める。だが良く考えると恐らく遊ぶ相手がいなくなってしまうから焦っているのかと思う。

って俺はもう少しこいつを信用できないのか。

「しょうがない、こうなったら何か梓の弱み」

うるせえよ！！お前はだまっとれ！！

漣と共に律にげんこつを与える。

「ちゃんと活動計画を立てた方がいいんじゃないか？」

「ま、その方がいいだろ。今回ばかりは本気で考えた方がいいと思うぞ」

しばし考える動作をする全員。やっとこれで今までよりは練習を…

…。

「あ、梓の歓迎会をするか！」

「いいね！！」「楽しそう！！」

……本気で頭を抱える。漣が合宿の時、怒りたくなるのは良く分かるわ。

でも、いいかもしれない。

いや、俺は遊ぶ事しか考えてない訳じゃないぞ。ちゃんと俺は真面

目に考えてるぞ。

ほらあいつと同学年って軽音部にいないだろ？だから上級生ばかりの軽音部にまだ何か抵抗があるんじゃないかとたまに思う事があるんだ。

だったら俺らともっと仲良くなってその抵抗を解消してくれればいいな、と言うのが俺の考えだ。

そしてこの歓迎会は実行される事になった。漣はかなり疲れた様子を見せていた。大丈夫かよおい。

歓迎会当日。大きな公園の緑の芝生の上にマットを引き、そのマットの上にはたくさんのお菓子とお茶が広げてあった。

そして梓をセンターに、周りは俺たち軽音部が囲むようにして梓にケーキを食べさせたりしている。(俺と漣はしてないが)

「ほらほら食べて食べて」 「ケーキもあるわよ」 「梓にはこれ！」

律はたい焼きを梓の口の中につ込む。大丈夫かいな。だが梓は平気にバクバク食べた。

「梓、たい焼き好きなんすか？」

「うん……」

こいつにはやはりどこかに猫の細胞が混じってんじゃないのかわからないとここまで猫に関連するものがこいつに似合う訳がないだろう。

「そ〜れ！」

「どこ投げてんだよ〜！」

唯と律と紬は3人でフライングディスクで遊んでいた。お前ら、梓の歓迎会じゃなかったのか？

そんな事を思いながら元気に遊んでいる様子を俺はボーッと眺めている。

ふと、俺の横に誰かが座る気配を感じたので横を見るとそこには梓

が体操座りで3人が遊んでいる様子を眺めていた。

ちなみに溲は木の陰で雑誌を読んでいる。何故かどこかの対ヒューマノイドなんとかを想像してしまったのだがまあどうでもいいだろう。

「どうしたんだ梓？」

「あの、遼祐先輩に聞きたい事があって……」

「なんだ？」

「先輩はどうしてこの軽音部にいるんですか？先輩って運動神経もいいんですよね？」

……なんか、どうにも重い質問だ。どう答えればいいんだ。

しばらく考えると、俺は溜息をひとつ。

「なんでだろうなあ？正直、俺もまだよく分かってねえんだよなあ」

「そうなんですか？」

「ああ、……でも、なんだだろうなあ。みんなといるとき、なんか楽しいって言うか」

「楽しいから……ですか？」

「多分な。……ここに軽音部に来る前に色々あったからさ、俺」

梓は「そうなんですか……」と呟いて、俺の顔をじっと見てくる。

「どつた？俺の顔に何かついてるか？」

「先輩」

「ん？」

「唯先輩の事好きなんですか？」

……はてさて、どう反応すればいいのだろうか。

って言うかなんでそんな話になるのだ。その前に誰がそんな事言った。

「律先輩が言っていました」

俺は即ディスクを投げようとしている律に早歩きで接近し、頭を思いつきり殴った後、元の位置に戻る。

何か律がほざいているが知ったこつちやない。

「どうなんですか!？」

何故そこまで必死になる!？コイバナ好きなの!？

「はいっ!！」

そんな元気に返事しないでいいから!目を輝かすな!!

「……まあ、そうなんじゃねえの?」

頬を掻きながら答える。

「分かりました!じゃあ唯先輩に言ってきたま「まてまてまてまて!！」ひゃん!！」

なんかお前キヤラが違つぞ!？そして変な声出すな!俺がお前になんかやつてるみたいじゃねえか!

俺は唯が好きだと言う事を本人に言いに行こうとしていた梓の手を必死に引つ張つた。

まさか梓とこんなコントを繰り広げる日があるとは思わなかった。

「あゝ、面白かつたね〜!」

ああ、俺はなんか色々と疲れたよ。

「今度はどこ行こうか?」

「動物園とか!」

「温泉もいいわね〜」

……俺はもうどこでもいいや。つて、またどっか行くの!？

「みんな聞いて!」

と、盛り上がつてる中1人漣が大声を上げる。なんだなんだ。

「うちは軽音部だから!明日からは、絶対に練習するからな!絶対の絶対の絶対だからな!！」

は、はい。

漣を除く全員は余計なボケはなしで、ちゃんと返事をした。

今回ばかりは漣の言う事に従う事にした。

「みんな、忘れてるかもしれないけど、うちは軽音部だから!」

いや、忘れてねえから。忘れてるかもしれないけど一応心の片隅には多分あるから。

律の昨日澗が言った台詞をそのままインプットした台詞に心の中で突っ込む俺。

「今日は練習するぞ〜！」

オーっとみんなが腕を上げる。俺も左腕を一応上げる事にした。

「えっと、唯と遼祐、そして梓とギターが3人になったから、演奏の幅がさらに増えたな。誰がリードギターする？」

唯のままでいいんじゃないか？それが俺もリードギターになってさらに演奏に厚みを加えるって言うのも悪くないと思うぞ。

俺は率直に意見を言った。律はその意見を待っていたかのようにOKした。

「一応3人も演奏してみた方がいいんじゃないか？」

澗が意見を出す。まあそうするか。

だが唯は反対する。何故なら梓と俺に確実にリードギターの座を奪われるからだろう。だがそれはしょうがないだろ。

結局、演奏でポジションを決めることとなった。

「それじゃあ私から……」

梓は早速ギターを持ち、華麗な指さばきで弾き始める。……やはり上手い。

正直に言う俺より上手いかもしんない。いや、マジで。

「じゃあ次は唯」

「急に腰があ……」

お前、みてるこっちが苦しいからやめろ。

「あずにゃん！ギター教えてください！！」

お前、後輩に教えてもらってそれ色々とあれだぞ？まあいいが。梓に教えてもらってもっと大きくなれ。そして強くなれ唯。って俺はいつこいつの親みたいにな立場になった。

音楽室に唯のギターの音色が響く。ただいま梓と特訓中だ。

「そこはミュートした方が……、後、さっきのフレーズはビブラト効かした方がいいかも……」

「みゅーと？びぶらーと？何それ？」

……ああ、そいや忘れてた。こいつ専門用語分かんないんだった。傍から見てる俺は頭を抱える。なんか色々と悲しくなってきた。

ミュートと言うのは何らかの方法で、ギターから出している音を弱めること。

ビブラトは音の高音を保ちながら、その音の高さを揺らす事を言う。

ちなみに作者は音楽知識一切ないのでこの辺りの説明は某大百科から来てるぞ。ホント無知でごめんなさい。by 作者

「ミュートもビブラトも知らずにどうやって……あ、ちゃんとミュート出来る……」

確かにさっき唯が音を出していると、ミュートがちゃんと出来ていた。

「あ、さっきのがミュートって言うんだ……」

この子って今思うともものすごい才能があるんじゃない？

そんな感じがした俺だった。

さて、現在休憩中。本当は休憩なしで全部練習に突っ込む予定だったのだが、さわ子のわがままで休憩になってしまった。

って言うかさわ子だけお茶飲んでるよ。と思っただが俺もなんだか飲みたくなつたので飲む事にした。

……おい唯、ケーキを梓に無理やり食べさせるんじゃない。紬、梓専用のカップを作ってるんじゃない。

やばい、このままじゃ梓までダメになつてしまう。……はあ、このまま梓が来なくなつちまったらどうすんだよ。

……しまった。予想が当たってしまった。

この4日間、梓が来ない。顔すら出さない。

「最近、あずにゃん来ないね……」

「もう来ないかもな……」

……なんでこんな予想ばかり本当に当たるのだろうか。

せつかく新入部員が入ったのになあ。先輩先輩って毎日言ってくれて、やっと本当に学校に来たんだなって気になってたのになあ。

ジョークを言ったり軽口を叩く気もなく、みんなが黙っていた時だった。

ドアが開く音がした。多分さわ子だろう。と思った時だった。

「……………梓！？」

扉の前には梓が立っていた。

「どうしたんだよ梓。最近来なくなったから心配してたんだぞ？」

「……………すみません」

「うわ〜ん、待ってたよ〜！」

唯が梓に抱きつく。いつもなら「離してください先輩！」とか言うのだが今回は何も言っていない。

顔も何やら元気がなかった。生気がないと言つと大げさすぎるが、とにかく曇った表情だった。

「どうした？」

「まさか……………辞めるって言いに来たのか……………？」

「それだけは勘弁してください！」

唯、お前が何か言つとギャグにしか聞こえんからやめろ。こじばっかりは自重してくれ。

「……………分からなくなって……………」
え？

「なんで軽音部に入ろうと思ったのか……………どうして新勧ライブであんなに感動したのか……………！」

しばらく一緒に行ってみれば分かると思つて……………！けどやっぱり

分からなくって……!!」

泣いていた。梓は。よっぽど苦しかったのだろう。だけど、俺たちには、どう言えればいいのか分からなかった。

どうすればいいのだろう、本気で考える。

……やがて、俺は一つの答えを出した。

「演奏しよう。そうすれば、何か分かるかもしれないぜ?」

「……うん!」

俺と梓以外の全員が頷く。

そしてギターを構え、全員が準備完了になると、律がスティックで秒読みを開始する。

4と言つて、律のドラムから音が鳴ると、演奏がスタートする。曲は『わたしの恋はホッチキス』だ。

ゆったりとした曲調が特徴で、この前の新勸ライブではこれが一番拍手が大きかったと思う。

「梓、この前、なんで俺が軽言部ここにいてのかって聞いたよな?」

「……は、はい」

「楽しいからって言うのもあるけど、もう一つあるんだぜ?」

「え?」

「……好きなんだよ。ここにいてみんなが友達として、仲間として。そういう奴らとさ、一緒にバンドするのが楽しくて楽しくてしようがないんだよ」

「……」

「多分、それはみんな一緒に、だから、いい演奏になるんだと思うぜ?」

「……」

「……一緒にバンドしようぜ、梓。唯と漣と律と紬と俺と、お前です。もう仲間だからな、俺たちさ」

「……はい……!!私、やっぱり先輩たちと演奏したいです!!」

「良かった〜!!」

唯が梓に抱きつき、涙を流している。

「まあ、これからお茶飲んだりダラダラしたりするかもしれないねえけどさ、それも、俺たち軽音部にとっては大事な時間だからさ」

「……分かりました。皆さん、改めて、よろしくお願いします!!」
「ああ、よろしくな、梓」

こうして、軽音部に新たな仲間が加わった。

中野梓。真面目でギターがうまくて、そこで、ネコミミが似合っていて(そこはいらん)。

とりあえず、ここからまた新たなスタートラインに俺たちは立った。……残り2年。これからも、ずっとみんなが無事に演奏^{ライブ}が出来る事を、俺は祈る事にした。

「あゝ、1週間もずっと練習したから疲れた〜」
「……ま、まあ、うん。これからも頑張ろう。」

15「新入部員！そして……あれ……？」（後編）（後書き）

単行本3巻目終了。って感じですよ。

ついにファン待望の梓が登場しましたが、勝手にコイバナが好きだと言う設定加えてすいません。

まあ変な設定加えるよりはマシかと思いますが。

さて、ついに15話まで行きましたが、多分25話ぐらいで一応1期は終了となります。多分学園祭の話で終了だと思っています。（番外編も幾つかすると思います）

これからも応援よろしくお願いします。

16 「後輩！そして最高と最悪の展開！？」

梅雨が明けてじめじめとした暑さは無くなったが、どっちにしろ暑いのは事実だ。

だが寒い夏なんてのは想像できないため、まあこれが夏なので仕方がないかと思っただ。

そんな感じで朝、目覚めて適当に朝食を作って『1人』で食べて、高校へ行った。

姉貴は嫁に行つて家を出ているため、既に1人でのんびりとした生活をしている。飯を1人で食うのは非常に寂しいが。

まあ別にそれ以外では困る事は無いので、普通に俺は日々の生活をエンジョイしている。

学校に行くと、同じクラスになった浩史や漣、真鍋と適当にべちゃくちゃ話して、適当に授業をボケーっと聞いて、部活へ行つて練習してティータイムして、それで一日は終了する。

その繰り返しだけど、俺はそんな生活が一番良かった。昔の様に誰かを無駄に傷つけて、そんな事を繰り返して過ごすよりは何百倍もマシだ。

でもまあ、たまくにこの生活リズムが崩れる日がある。今回の物語は、そのリズムが崩れた日のお話だ。

放課後のティータイムをゆっくりと満喫していると、ふと俺は異変がある事に気付いた。

その異変は律や唯たちも気づいたらしい。

「あれ、そいやさわちゃんは？」

そう、教師のくせして放課後だけ真面目に働かないさわ子が珍しくティータイムの時間になつても現れない。

これは軽音部始まつて以来の事件だ。あのさわ子がだぞ？

「先生なら、今職員室で生徒と話をしてると思いますよ。」

梓は何やらその事件解決のカギを握っているらしい。

「どういう事だ　って噂したら来たよ」

理由を梓に聞こうと思ったら、さわ子が部室の扉から現れた。でもその姿はなにやらぐったりしていた。

「ロイヤルミルクティー入れて」……」

「はい」

紬はそんなさわ子の姿に動じず、普通にさわ子の注文を上機嫌に受け取った。

「どうしたんだよさわちゃん？　なんかあったの？」

「今年の一年生にちよつと厄介なのがいてね……」

ははは、なんだ調子に乗ってる男子生徒がいるのか。

「ええ、授業サボっては他校の子と喧嘩して、先生の話听不懂で……」

「教師も大変だねえ」

律が同情する。まあ高校や中学の教師なんてそんなものだろう。

「そいつ、なんて名前なんだ？」

「1年3組の白銀準也君……」

……　白銀、準也？

「うわあ、名前からすごいそう……」

「でもかっこいいなあ〜！　ねえりょうくん……？」

……　おいおい、あいつ、まさか桜高に来ちまったのかよ。

マジかよ。冗談じゃない。なんであいつがここに来るんだよ。

「どうしたのりょうくん？」

「どした〜、遼祐？」

「え、あ、ああ……　なんでもねえよ」

俺はロイヤルミルクティーを一口口に入れながら、白銀準也の事を思い出した。

白銀準也は俺の楠中の時の後輩で、2年生ながら、俺の次に喧嘩が強い奴だった。

あいつは俺に憧れており、常に俺の横をとことこ歩いているような奴だった。俺もあいつの事を結構気に入っていた。

だがまあ俺もいつのまにか喧嘩辞めてちゃんとした高校に入って、しばらくあいつとは会ってなかったが……。

「まさか、ここに来てたとはな……」

正直驚きすぎている。あいつ頭あんまり良くなかった。……あれ、良かったっけ？

そうだ、良かったんだ。いいよなあ、俺なんかめっちゃ頭悪かったのに。

そんな事を思いながら、俺は下駄箱に入れてある靴を履き、さつさと学校から立ち去る。……つもりだった。

「日暮さん！」

……聞き覚えのある声がする。声の聞こえた方を向くと、そこにいたのは……。

「……久しぶり、白銀」

「お久しぶりです！日暮さん！」

その白銀準也が、俺の目の前にいた。

「まさか、お前が桜高に来るとはなあ……」

白銀と共に家路につく俺。

相変わらずこいつは『いかにも』不良の様な風貌だった。

金髪はもちろんの事、ズボンに入れてないカッターシャツ、その中から緑色のシャツが見えた。さらにネクタイはしてない。

……お前、そりゃ指導室連れていかれて当然だぞ。

まあ俺もあんまり人の事言えないが。俺もカッターシャツの中に黒いシャツ着てるし。

「ええ、まあ余裕でしたけど」

いいよなあ、頭いい奴は。

「日暮さんだつて頭いいじゃないっすか」

「お世辞なんかいらねえよ……、って言うかお前、早速色々やらか

してんじゃねえか」

「しょうがないっすよ、向こうから喧嘩売ってきたんっすから」
「やれやれ、ケンカ売られたからって買う事はないだろう。……まあいいか。」

こいつは俺と違って不良辞めた訳じゃないし。

「お前、もしかして俺が桜高にいるから入学したのか？」

「当たり前っすよ！！俺は日暮さんについて行きますよ！」

……そういう事言ってるから、後に同人本やネットとかでネタにされるんだ。そういう発言は控える。

「すみませんでした。……日暮さん」

「ん？」

「……戻ってくる気は、ないんっすか？」

そういう理由もあるから入学してきたのだろうか。

そんな事を思ったが、あえて口には出さなかった。

「……ねえよ、完全にそういう事からは足洗ったんだし。それに、こいつもいるし」

俺は背負っているギターを軽くポンとたたく。

「ああ、日暮さん軽音部なんっすよね。新勧ライブ見ました。かっこよかつたっすよ！」

そりゃどうも。

「……まあ、そういうとは思ってましたよ」

「そうかい」

なら質問するなと言いたかったが、やはりあえて口に出す事はしなかった。

「実は、俺もこういうこと辞めて、ちゃんと生きていこうかなって思うんっすよ」

「ほお。なんかきつかけでもあったのか？」

「まあ色々……とにかく、もう喧嘩とかはきっぱりやめようと思っただんすよ」

でも今日の事聞いたぞ。

「やっぱり、俺、そういう事から離れれなくなって……、だから、日暮さんのところで、どうすればそういうことからきっぱり離れられるかって言う事を学びたかったんす」

「俺から学ぶねえ……」

こいつも頭いいが、その他はバカだから正直こいつのことを言うてくるのが少し、というかかなり驚いていた。

なので少し返答に時間がかかったが、やがて、

「そんなの本人の気持ちの強さなんじゃね？」

「え？、どついう事すか？」

「だから、お前が本当に喧嘩とかやめるって言う意志が強かったら、とつくに辞めてるんじゃね？」

でもお前結局そついうことから離れねえだろ。だから、そりゃあお前の意思が弱いつて証拠だろ」

「……」

「意志を強く持てよ。そつすりゃ、きつぱりやめれるから。實際俺がそつだったんだし」

「日暮さん……、ありがとう……、ございますー!!」

俺に頭を下げる白銀。そんな白銀を、俺は微笑みながら頭を上げさせる。

頭を上げさせると、白銀の目から涙がこぼれていた。

「ったく、ほらふけよ。みつともねえ」

俺はポケットからハンカチを手渡す。

「……すいません、何から何まで迷惑かけちゃって」

「気にすんな。後輩が困ってたんだ。助けてやるのが先輩の役目だろ？んじゃな」

「あ、日暮さんこのハンカチ！」

そのまま俺はそれぞれに家路についた。

ハンカチはまあ明日明後日に返してもらってもいい。むしろ洗って返してほしかった。洗濯物を増やさなくて済むし。

「ただいま……って誰もいないんだつたな」

鞆を部屋に投げ飛ばすと、キッチンへ入り、冷蔵庫を開いて今日の晩飯を考える。

なんか思いつかねえなあ……。カレーでいっか。

人参とじゃがいもと玉ねぎを引つ張り出しながら、俺は夕食の準備を始めた。

……なんか、やっぱり1人じゃ寂しいなあ。こんな日に誰か友達でも来てくれたら……。

ピンポン

「そんで、何しに来た……唯」

「えへへ……今日は憂がないからご飯一緒に食べようかなと思っ
て」

そのご飯は俺が作るんだろうに。

って言うかお前なんで俺のところ？真鍋の家があるだろうに。

「和ちゃんは用事があっていないんだよお」

「あっそう。んじゃテーブル座っておとなしくしてる。飯作るから」

「うう、りょうくんがなんだか冷たいよ」

そうか？って言うか正直焦ってるんだぞ俺。

いきなり唯が俺の家に来て、しかも一緒に飯食うんだから。

「わたしも手伝うよ」

「いいよ別に。お客なんだからおとなしくしてる。その前に料理あんまり上手くないだろ」

「むう……、じゃがいもの皮をむくのなら負けないよ」

そんなもんガキでもできんだろ。

だがそこまで言うって唯のプライドはスタスタにされそうなので言うのはやめておいた。

そしてカレーをぱっぱと作り、テーブルの上には付け合わせで作ったサラダとスープと共にカレーも置かれてあった。

「ん〜、りょうくんのカレーすっごく美味しい〜」

「そりゃどうも」

そんな感じで食事を終え、ソファーへと場所を移しおしゃべりタイムとなった。

って言うかなんか完全に行動が夫婦じゃねえか。そう考えるとだんだん恥ずかしくなってきた。

……夫婦か。俺と唯が結婚したらどうなるんだろうな……。

『ただいま〜』

『お帰り〜！りょうくん！』

『うわっ、いきなり抱きつくな！びっくりすんだろ！』

『ごめんなさ〜い！あ、ご飯にする？お風呂にする？それとも……』

『先に飯。その後に風呂』

『うっ、最後まで言わせてよ〜』

『悪い悪い。……まあ、『お前』は最後だな』

『……りょうくんのエッチ……』

『自分から言い出したんだろっが。……あ、やっぱり今からにしょ』

『りょ、りょうくん……』

ぐふ、ぐふふふふふふふふふ。……っていかんいかん！何を變な妄想しとるんだ俺は！！

唯の方を見ると……、

「……なんだ寝てたのか」

唯は既にお休みになられていた。まああんだけはしゃいでたんだ、疲れてもしようがないか。

……寝顔が可愛すぎる。すっすつと規則正しい寝息をしているところもまたいい。

やばい、このままじゃ理性が破裂しそうだ。って言うかもう寸前ま

で来ていた。

落ち着け！落ち着くんた俺！クールになれ日暮遼祐……！！

……よし、いい子だ。とりあえずどうする？このまま泊めていくには色々とまずい気がする。

だが起こすのもなんだか気が引ける……、しかしここはやはり起こすしかなさそうだな。

「おい唯。起きろ。寝るんなら自分の家で寝てくれ」

「ん〜、もう少し……zzz……」

「もう少しじゃないって、いいから起きろ」

その後、起こしても起こしても中々起きなかったが、やがて目が覚めて、なんとか唯を帰宅させれる事が出来た。

そして俺の家の玄関。

「ごめんね、勝手に来ちゃって」

「いいよ、気にすんな」

「ありがとね、じゃ、おやす」

扉を開けようとした時だった。唯が俺の靴に引っ掛かって、こけそうになる。

俺はこけそうになった唯を手で持ち上げようとしたが、俺もバランスが崩れて、

「うわっ！」「ひゃん！」

変な声あげるな！隣に勘違いされる！

心の中でそう思っていると、俺は背中に激痛を感じた。どうやら唯がこける寸前に止めたのはいいが、俺が床にこけたらしい。

「いててててて、唯、大丈夫か」

目を開けると、そこには唯の顔が超ドアップで視界を覆っていた。どうやら、今の体制は、唯が俺を押し倒している体制らしい。

……顔がものすごく熱くなったのを感じた。唯の顔も赤くなってる。だがどうしてだろう。中々離れようとしても離れなかった。唯も一緒だ。

声も上げれず、ただその体制を続けてしまっていた。……その時だ

17 「また合宿！そして異変？」

もう、いっちゃうの？

うん……。

もう、あえなくなっちゃうの……？

多分……。

やだよお……。くんとずっとあそびたいよお……。

ごめんね……。でも、おおきくなったら、あいにくよ。ぜったい。

……。ほんとう？

やくそくするよ。おおきくなったら、ぜったいあいにくよ。

じゃあ、おおきくなってあえたら、わたし　くんのおよめ

さんになる！

うん、わかった。やくそくだよ。　ちゃん……。

……。ついに俺の頭も暑さでイカれたのだろうか。夏の青空を見ながら、そんな事を思う。

記憶にもないような出来事が、勝手に頭の中で回想される。でも、本当の様な気もする。……。これが記憶遡行と言つものだろうか？違つか。

ベランダでボーっとしていた俺は、手元をみる。そこには俺の私服が。ああそうだ。洗濯物干してるところだった。

そのまま私服を干して、さっさと洗濯干しを終わらせ、ベランダからリビングへ戻る。

……。つい、俺は携帯を取ってしまつ。午前中なので、誰か捕まるはずだ。俺は携帯の電話帳を走らせ、目についた人物に通話を開始した。

「どいつ？最近の軽音部」

普通の喫茶店でアイスコーヒーをストローで吸い上げながら、浩史が質問する。

どうにもこうにも、平和だよ。

「そりゃよかった、平和が一番だよ」

当たり前だ。軽音部にBETAが侵略しに来たとも思ってたのだよ。

「まさか」

「……って言うかお前、陸上部の練習はしなくていいのかよ？」

「あのねえ、昨日大会だったんだよ？少し心を落ち着かせる時間が欲しいなあ」

そりゃそうだよな。笑いながら、コーラを飲み干す。

……暑い夏にやっぱコーラだな。

「そういえば遼祐、今年も合宿するの？」

「ああ、まあな。今年も海だったよ」

「そうなんだ。練習頑張ってたね」

「練習？とんでもない、遊ぶよ俺たちは」

「……何のために合宿してるの遼祐たちは……？」

気にするな浩史。そうやって俺たちは友情を深め、チームワークを大切にするんだよ。

「ただ遊びたいだけじゃ……？」

さて、次の日。夏休みだと言うのに部活は相変わらず行わなければならない。暑いよ。

俺は現在の桜高の職員室へと唯と律と共に向かっていた。さわ子を合宿に行くかどうか聞きに行くのだ。

って言うか顧問は絶対に着いて行かなくてはいけないのではないだろうかと思うが、あの人に事なので面倒とか言っていけない様気がする。

「失礼しあゝす」

俺は適当にそういいながら、ドアを開けて入ってすぐにいるさわ子

の所へ向かう。

見るとさわ子は机にぐったりしてうちわであおぎながら、だるそうにしていた。おいおい、それが生徒の手本になる教師の姿かよ。

「いいのよ、こんな事は誰も真似しないわよ……」

いやするって絶対。ガキはこういう悪いところだけ真似するもんなんだぜ？

「それで、何の用？」

「軽音部で、合宿するんだけど……」

「先生も来るかな？」と思つて

「まあ別に来ようが来まいが好きにすればいいけ」

さわ子は俺の後ろに回り、首絞めを行つてくる。バカな、こいつCQCが使えるのか!？」

つて冗談を言つてる場合じゃない。マジ苦しい。

「やめるさわ子! おしとやかな先生キャラで通すじゃなかったのか!？」

はっ、と元の(多分)おしとやかな先生に戻つて、自分の椅子に戻るさわ子。

「合宿わね……」

なんだよそのめんどくさそうな顔は。

「じゃあいいよ、私達だけで行くから」

唯が口を尖らせて言う。

「声かけなかつたら怒るのに声かけたらこれだ」

「まあしょうがないよ。ささ、こんなめんどくさがりな顧問はほつといて俺らだけで」

再びさわ子が後ろに回り込み、今度はお馴染みのヘッドロックを行つてきた。だから痛いっちゅーに!!

さて、その日の夕方。部活も終了し、全員が片づけに入っている。

俺もギターをケースに入れた直後、律が椅子の上に立って、

「よし、久しぶりにみんなそろつた事だし、合宿の買い物に行く

か！」

……さてと、俺は帰るわ。

「お前も来い！！」

「やだ！！俺はまた去年の悪夢を繰り返さなきゃいけないのか！？」

「悪夢とはなんだ！宿命だよ」

「あゝもう、うるさいうるさいうるさい！！やだったらやだゝ！！」

俺は嫌だった。あんな悪夢を繰り返すなど、絶対に嫌だ。

その悪夢とは何か？……お馴染みの回想モードON。

去年の今と同じ時期。部活終了のチャイムと同時に律が

「よゝし、合宿の買い物に行くぞゝ！！」

「何買うの？ご飯？お肉？バーベキューセット？」

「なんで食べ物関連しか出てこないんだ唯さん。……ま、いいんじゃない？さっさと行こうぜ」

この時、俺は知っておくべきだった。律がそれを言った直後、目を輝かしていた事を。

商店街に向かい、早速入ったのは、なんと水着が売ってる店だった。

……なんだ、遊ぶ物しか買わんのか。まあ大体予想はついてたが。

俺も行くべきなのかと聞いたが、律が入り口で待っててと言ったので、俺は大人しく待っている事にした。

そして30分後、それぞれ小さな紙袋を手に店から現れ次行くんなら行こうぜ、と言おうと思っただった。

「じゃあはいこれ」

……律は全員の紙袋を取り上げ、全部俺に渡す。……おい、何の真似だ。

「よゝし次行くぞゝ！！」

「話聞けええええええ！！」

その後、俺はまあとにかくこの女子4人組の荷物を全て持たされることになった。しかも全員を家に送り届けるまで。

……その次の日、俺は見事に筋肉痛に悩まされていたのだ。

回想モードOFF。さて、俺は用事を思い出したので先に失礼する。

「待て待て！逃げるなよお、りょうくん」

お前にりょうくんと呼ばれる筋合いはないぞ律。

「まあいいじゃん、荷物ぐらい持ってよ」

……はあ。溜息をつき、俺は観念して荷物持ちをする事を決定してしまった。

しかも去年より1人多いからなあ……、また筋肉痛に悩まされるなこりゃ。

そして買い物を終え、全員を家に送り、自宅に戻ると飯も食わずにそのまま玄関にぶっ倒れ、俺は安らかな眠りについていた。

……腰と腕がいたいよお。

そして合宿当日！！俺は現在砂浜に敷いたマットの上でのんびりしている！！

なんで海に来て泳がないのかだと！？俺は海が一嫌い（怖い）からだ！！何故かは知らんがな！！

ちなみにプールでは泳げるぞ！！

え、なんでテンションがそんなに高いのか！？なんかもう目の前に怖いものがあるから逆におかしくなってるだけさ！！気にすんな！！

「先輩、そんなに海が怖いんですか？」

「はい！！すつげえ怖いです！！さわ子と漣の次に怖いで」

ボコオ！

「……さわ子の次に怖いです」

「よろしい」

力づくで黙らせるなあく、卑怯だぞ溇く！

「うるさい！！」

「あずにゃんもりようくんも一緒に遊ぼうよ〜！」

嫌だアアア！！海に行くんなら死んだ方がマシだ〜！！溇のげんこつの方がマシだあ！！

涙ながら訴える俺を律は笑いながら、

「そんなに怖いのか、海？」

「はいっ！！」

「まあ怖いなら無理しなくていいよ、あずにゃん、一緒に遊ぼう？」

「結構です」

「はは〜ん、さてはスポーツとか苦手な人？」

律がからかうように言う。って言うかからかっているな。

すると梓はムキになって、

「そんな事ありません！やってやるです！」

……見事に挑発に乗りやがった。

梓も案外ガキっぽいところがあるんだな。

「溇先輩、遼祐先輩」

「どした〜、梓？」

近くにあった海岸のところまで適当にぶらぶらしていると、梓が声をかけてきた。

後ろを振り向くと、梓が藤壺を木でつついている。……なんとなく、梓がこれから話そうと思っっている事が分かった気がする。

「藤壺の話って知ってます？」

……やっぱり。溇を見ると、なんかもうギャーな顔をしていた。

「昔、藤壺で足を切った少年が　「きゃああああああああああああああ！！」み、溇先輩！？」

話しが終わる前に溇は悲鳴を挙げ、どこかへ駆け出して行ってしま

った。……やれやれ。
と、ふと横を見ると、律が梓にサムズアップを行っている。……お
前ら、後で遷に謝つとけよ。

「おい、みんな早く早く〜!」「待て〜、唯〜!」「こら律!い
きなり走るな!」「せんぱ〜い!」「待って〜、みんな〜!」

……なんか、平和だな。

青空の下、海で遊んでいる5人を遠くで見ていた俺は、ふとそんな
事を思い始める。

みんなの無邪気な笑顔を見て、俺はそれだけで十分報われている
と思う。

あんだだけ落ちこぼれてた自分が、今じゃこんなに平和な毎日を通
していると思うと、やっぱり俺は自分を幸運だと思いきんでしまっ
ていた。

でも、それで十分だ。幸せと感じれるなら、幸せと感じた方が当然
いいに決まっている。

こっちこっち〜!早く〜!

……え?

待つてよ　ちや〜ん!

また変な記憶だ。なんなんだよこれ。

一緒に遊んでいる男の子と女の子の記憶が突然再生される。最近こ
んなことが多い。

あ!　　くん!!

……あ。

何かに気付いた女の子が、男の子にその気付いた事をしらせるが、男の子の動きはそのまま停止して……。

「りょうくん？」

「ッ！！」

気がつくのと、目の前には、海の水で髪がちょうどいいぐらいにはねている唯の顔があった。

水の粒と、それが太陽の光で反射されて、唯がすごく色っぽく見えた。

そう思うと、自分の顔が暑くなってきているのが感じた。

「どうしたの？」

「え、あ、いや、ちょっとボーっとしてただけだよ」

「良かった。りょうくん熱中症になったかと思ったんだよ？」

大丈夫だよ。そんな簡単に熱中症になるか。

「ん？」

頭に何かかぶらされた感覚が頭を襲う。

頭上を触ってみるとざらざらした感じが。……麦わら帽子か？

「これかぶっていると眩しくなくなって熱中症になりにくいって、憂

が言ってたよ。貸してあげるね！」

いや、だから熱中症になった訳じゃ……。

「お〜い、唯〜！早く来いよ〜！」

「う〜ん！！じゃあねりょうくん」

唯はそのまま律達のところへ戻っていく。

……はあ、なんだか知らないが溜息が出る。

「ホント、優しいって言うかなんて言うか」

そう思いながら、俺は唯がくれた麦わら帽子を深くかぶった。

……このまま海賊王にでもなるか。

さて、海でのお遊びも終了し、練習モードに移る。

だが律はアームハングリーな状態でかなりぐったりしていた。そりゃそうだ。あんなだけはしゃいだんだから。

練習する部屋に向かうと、そこには最新型のアンプや、ドラムが置かれてあった。

それを見た瞬間に律の目が輝き、そのままドラムのところへ座った。なんて現金な奴なんだ。

「よし、んじややりますか」

各自準備が完了すると、

「1、2、3、4……」

……無理だ。流石の俺も腹が減ってきた。って言うかもう動けん。

「お腹すいたぞ〜、経理担当権限発動しちゃうぞ〜」

「どんな権限だ」

結局、他に紬や律も空腹で限界が来て、結局その日の練習は終了、ダイナータイムとなった。

「……もう、無理……」

俺は外にあるテーブルの上でダウンしている。あの後、夕食の買い出しに近くのスーパーに行って来た。

だが、唯が食料の入った重いビニール袋に悲鳴を上げていたのでかっこつけて俺が持ったわけなのだが、なんせ紬の別荘からスーパーまで近いと言えば近いのだが遠いと言えば遠いと言うなんとも中途半端な位置にあるので、着いたころには体力も空腹度も限界を超えていた。

「さあみんな、後は頑張れ……」

「お前が一番料理できるんだから遼祐が頑張らないとダメだろ」

うるさああああい！！俺は腹が減ってるんだ！！

くそお……こうなったらやってやる！やってやるさチクシヨオオオ
ー！今こそ、俺の本気を見せてやるううう！！

「……流石遼祐」「まさかここまでやるとは……」

へっ、どうだ……、俺だって、このぐらい……。

そのまま椅子にふらふらしながら座りこむ。後は焼いて食え。今日のディナーはバーベキューに、おにぎり、さらに俺が本気を出してスープにポテトサラダ、さらに焼きそばも作った。ざまあみやがれ!!

……だがそこまでして既に体力は最大値を下回り、そのまま俺は力尽きてしまった。

そして最初に焼けた串の何本かを高速で奪い取り、さらに俺はその日のディナーで一番食べたで賞を受賞した。ディナーは完食した。いや、美味かった。流石俺だな。

「肝試しをやるう!」

「おー!」

はてさて、よくそんなに次から次へと思いつくもんだな。

「やっぱり合宿と言えば、肝試しだよな〜!」

「私はやらないぞ」

漣はやっぱり欠場を表明する。

「あ〜そっか〜、漣は怖いのが苦手だもんね〜」

「なっ……ぜ、ぜんっぜん余裕よ。やってやるうじやない!!」

知らんぞ俺は。思いつきでそんな事を言ったら。

その結果、その日の夜の森に、女の人の悲鳴が響き渡りましたとさ。めでたしめでたし。

『あ〜、日暮さん合宿でいなかったんっすか〜』

「ああ、まあな」

俺の現在地は別荘内のリビング。俺は携帯で白銀と電話している。どうやら白銀は俺がどこへ行ってたのか知らなかったらしい。まあ言っただけだったもんね。

ちなみに、現在うちの女子部員+顧問(さっき合流した)は入浴中だ。

『ところで日暮さん、あれはもうしたんっすか?』

「あれって？」

『合宿と言えはのぞきっすよのぞき』

「……切るぞ」

『冗談っすよ日暮さん！』

お前の冗談は本気の言葉としか思えんのだが。

『信頼ないんっすか俺………』

「そうじゃない。普段から冗談をいすぎなんだお前は」

『そっすかあ、ってやべ、そろそろ俺寝るんで』

「おう、お休み」

きゃあああああああああ！

……梓の悲鳴だ。しかも風呂場。

『な、なんすか日暮さん、さっきの悲鳴!?!』

「分からん!!今から行ってみる!!」

俺は急いで風呂場へ向かう。

えっと、こっちじゃなくて、こっちじゃなくて……あ、ここだ!!

勢いよく、俺は風呂場のドアを開ける。

「どうしたみんな!?!」

……あ、そいや、今言えば、みんな、風呂入ってたんだ……。

だが時は既に遅し。

「………」

「あは、あはははははは………」

その後、顔面に何かが激突し、そのまま俺の意識は闇に葬られた。

意識が消える寸前、再び悲鳴が聞こえたが、まあこの際どうでもい

いや……。

ちなみに今の悲鳴は梓で、唯が日焼けしている梓を無理やり風呂の

中へ突っ込んだからである。

……罰として俺はなんと星が見える最高の特定席で寝れる事になっ
た。

……イコール外ですよ。テーブルについている長椅子で寝なさいっ

て事つすよ。

ふざけんな！俺は心配だったから様子を見に行っただぞ！？冗談じゃない！！

許さない……全てさわ子のせいだ……、あいつがこんな事を言ったのだからな……。

「ぶうえつくしよい！！……風邪引いたなこりゃ」

さつきからくしゃみが止まらない。今何時だろう。

時計を見ると3時過ぎ。外は夏のくせして寒いし、うっすい毛布一枚だけなのでもう風邪引き確定だ。

……もうやだよ。なんでこんな目に遭わないといけないの俺。

もうやだよ……、帰りたいよお……。

……まただ。また変な記憶だ。なんなんだよ一体。

俺は毛布を椅子に置いて壁に寄りかかり、夜空を見る。……綺麗だ。でもなあ、やつぱこんな所を男一人で見てもつまらんしなあ……。

「りょうくん」

そうだ。唯だ。唯と一緒に見ればいいんだ。

よし早速……、

「つっていたのか」

「えへへ、よいしょ」

俺の横に唯は座った。その行動を確認すると、俺は再び夜空を見る。……静かだ。虫の音ぐらいいしか聞こえない。つまり静かではないわけだが。

「……みんな、りょうくんの事怒ってないよ」

「そうかい」

「わたしたちの事心配して来てくれたって、みんなすっごく喜んでたよ。りょうくん、モテモテだね」

いや、それほどでも……。

いいかけたやめた。モテモテだねって言った時の、唯の顔が少し寂

しそうだった。

ふと、先日の『あれ』を思い出す。

今思うと、もしあのまま白銀達が来なかったらどうなっていたのだろうか。

あのまま唯と恋人同士になって、それで、今もきつと二人つきりだから……。

……また始まったよ俺の妄想癖。いいかげんやめようと思ったのに。

でも、今回ばかりは、妄想じゃないのかな。唯は、やっぱり俺の事好きなのかな？

ふと隣にいる唯を見る。空に広がる夜空を見ていた。

「あ、あのさあ、唯」

「ん？どうしたのりょうくん？」

……ダメだ。言えない。好きだって言えない。

たった3文字。それだけなのに。言えない。

このヘタレめ。孝之や誠に笑われちまうだろうが。……あんな奴らに笑われるのは嫌だ。

「……その」

「……」

「俺は……だから……」

「……ぐう」

「……は？」

唯の頭が俺の肩に乗っかる。……寝やがった。空気読めよ。寝るなよ。寝るなよ畜生。

まあ、いいか。こうしてるときだけ、なんとなく恋人同士になっているし。

「ぐう……りょうくん……」

「え……？」

俺の夢でも見てるのだろうか。……どんな夢だろう。

「……」

ふと、俺は唯の顔に近づく。

……残り2センチ。

……残り1センチ。

……途中で動作が止まる。

「……こいつが起きてからだな」

そう思うと、肩の力が抜けて、俺のまぶたも重くなってきた。

そのまま意識は遠くへ飛んで行ってしまった。

次の日、軽音部全員にからかわれまくった（特に律に）のは言ってもない。

……泣けるぜ。

18 「軽音！そして大好き！」（前編）

ホントに、いいのか？

……うん。

そんな、俺、だって、こんなのだぞ？

こんなのなんかじゃないよ、わたしは、ただりょうくんが好き
なだけだよ。

唯……。

だからね……。

……。

死んで。

「……………」

……ふざけんな、あんだよこの夢……。

息も切れて、汗もダラダラかいている。時計を見ると既に6時過ぎ。

「……精神状態、あんまりよくないのかな……」

好きな人から殺される様な夢見てると思う事はよっぽどだ。

……もしかしてうつ病なのかな俺。

「……ま、そんなこと、現実であるわけないしな」

そうだ、唯が人を殺すなんてそんなバカな事をするわけがない。

それに俺が一体あいつに何をするって言うんだ。バカバカしい。

「さてと、弁当と朝飯作るか」

ベッドから立ち上がり、いつものように俺はキッチンへ入り、冷蔵
庫の扉を開ける。

さてと、今日はどんなメニューにしようかな……、キャラ弁でも作
ろうかな。恥ずかしいからやめよう。律に笑われるのがオチだ。

さて、夏休みも明けていよいよ学園祭の季節。

どこの部活も準備に大忙しだ。もちろん我ら軽音部も準備している。まあ準備と言っても曲の練習するぐらいだが。

と言っても、練習は3割。放課後のティータイムが8割だ。ホントに大丈夫かよオイ。

まあいいさ。このところみんな結構調子いいし。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

……………だが、一つ問題がある。

「唯、今日も休みかな？」

そう。唯が、学園祭まで後4日なのに、学校に来ない。……………不登校ではないぞ。

どうやら熱をこじらせているらしい。現在俺たちは律たちの教室で緊急会議を開く。

しかし誰一人としていい案が出ない。って言うかななぜ会議をする必要があるのだろうか。そう思うがそう思ったら負けなのだろう。

「憂ちゃんのところに行って唯がどんな様子か聞いてみた方がいいんじゃないか？」

……………そうするか。

俺と律、澁の3人で憂ちゃんのクラスに向かった。

「あの調子だと、多分明日も明後日も……………」

「そっか……………」

どうやら容体はかなり深刻らしい。困ったものだ。

「このままじゃ、学園祭に間に合わないかも……………」

……………はあ、やばいよな、確かにこのままじゃやばいかもな。頭を掻いて考え込んでいると、始業のチャイムが鳴った。

「じゃあ私たちは行くから……………」

「は、はい」

そのまま澗と律は教室から出る。俺も後に続くこうとするが、ふと足が止まった。

俺はそのまま回れ右をして憂ちゃんの方を見て、

「憂ちゃん」

「な、なんですか？」

「頼みがある」

現在午前9時58分。学校ではとくに授業が始まっているのだが、俺は今唯の家の前に立っている。

つまりこれはサボリになるのだが、そんなことどうでもいい。俺は唯の家の鍵を開けて家に入る。

……なんで俺が唯の家の鍵を持っているのか。憂ちゃんに無理を言っただけで貸してもらったのだ。

はつきり言つと俺もそれだけは絶対にしなくなつたのだがこのままじゃ俺の気持ちがおさまらなかつた。

俺は唯の部屋へ向かう。部屋の位地ぐらい知っている。

だが、その部屋に近づくとつれてギターの音が聞こえてくる。しか

もこの曲は……、

「ふわふわ時間タイム……」

俺は走つて唯の部屋へ向かう。

「唯！」

部屋の扉を開けて、部屋に入る。

「あ、りょうく　げほっげほっ！」

……顔が真っ赤になつてる。おいおい、熱が酷くなつてるんじゃないか？

「お前、何やってんだよ！そんな事していると余計熱上がっちゃうだろ！」

「でもっ、このままじゃ1人だけ遅れちゃうよ……」

「だけど無理してたら遅れるどころか出れねえだろ！」

ついカッとなつて唯を怒鳴ってしまう。

「……ごめん、でも」

「分かってるよ……、本当は寝てなきゃだめって」

「じゃあー！」

「でも！」

唯が珍しく、強気で反論する。しかも真剣な顔で。

「でも……でも……」

唯の体がふらふらと揺れ始める。そしてベッドの上から床に衝突し
そうになり……。

「唯っ！！！」

ぎりぎり唯の体を支える。

なんとか衝突は免れた。けど、唯の体は服の上からでも十分熱かつた。

「はあ……げほっげほっ！」

「もういい、とりあえず寝てろ」

お姫様だっこをして、唯をきちんとした姿勢でベッドに寝かせる。
布団をかぶせると、唯の口が開く。

「りよ、くん……、なんで……？学校は……？」

「ああ、サボってきた」

「どうして？行かなきゃダメだよ……」

「分かってるよ。けど……」

唯の頭をついなでながら、

「心配だったからさ、唯の事」

「りようくん……」

「ごめんな。やっぱり迷惑だったか？」

「ううん、そんな事……ないよ。わたし、すっごく嬉しかったよ」

苦しそうな顔で俺に微笑みかける。無理やり笑顔を作って、なんだ
かすごい心が痛かった。

「りようくん」

「どした？なんか欲しいか？」

「……手」

え？

「手、握って。ギュって」

……正直、俺はかなり驚いた。

風邪をひいたら人はかなり大胆になるのだろうか。いや、違うか。

唯は怖いんだ。

もし自分のせいで学園祭にみんなが出られなくなつて、そんな事になるのが嫌なのだろう。まあそこまで深刻になる事でないが。

その場で代役立てるなり何かするなりすれば唯以外は出れるが……。

……違う。そうじゃない。唯は違う意味で怖いんだ。

自分がライブに出れなくなるのが、怖いんだ。

唯はみんなと一緒にライブをしたい。演奏がしたいんだ。

だけど結局自分のせいでこんな事になつて……。

唯の気持ちを勝手に想像してしまっているが、多分そうだと思う。

……だから俺は。

「……ああ」

唯が差し出した手を、俺は両手でしっかりと繋いだ。

熱い。けど、なんだか力が入ってなくて、なんだか切なくて。

「……」

唯は安心したのか、瞼を閉じて眠りについていた。

「……大丈夫だよ、唯」

「もしも、お前が出れなくても、俺たちがきつちりやってやるさ」

「まあお前が出れば一番いいんだけどな」

「だから今はゆっくり休んでる唯」

「絶対、絶対、ライブ、成功させるから。いや、一緒に成功させよ

う」

手を握る力が余計強くなる。俺の想いの強さが力に出ているのだろうか。

「……唯」

うん。遼祐だからりょうくんだよ。

あ、りょうくん！ねえねえ、私入る部活決めたよ！

本当にありがとうね！わたし……ギター買ったら毎日練習するからー！

泣きたい時に、泣いてもいいよ。そういうのは、我慢しないでいいんだよ。

みんなすっごく喜んでたよ。りょうくん、モテモテだね。

……ここでようやく気がつく。

俺が今、ここにいるのは、全部こいつのおかげだった。

もしあの時、唯と出会っていなかったら、唯に声を掛けなかったら、きつと今頃あの時と同じ事を繰り返していたかもしれない。

だけど、唯が軽音部に入って、俺も半ば流れで入って、だけどいつのまにか軽音部が大好きになって、唯の事も……。

唯は、俺の中ですっごく大きな存在だった。

ふと俺は唯の横に置いてあるギターの存在に気づく。えっと、確かにギター太だっけ？

ギターに名前をつけるねえ……、まあ唯らしいと言えば唯らしいが、静かに唯の近くに置いてあるギター太を手に取り、専用のスタンドへ置く。

置いた後、ギター太のそばにしゃがんで、

「……お前の持ち主、すっげえいい人だな」

やれやれ、俺も唯に影響されすぎたな。ギターに話しかけるなんて周りから見れば十分おかしい奴にしか見えない。

「いいよなお前。唯のそばにずっといれて、俺からすれば、すっげ

え羨ましいぜ。

だから、実は俺な、結構お前に嫉妬してたんだぜギー太。

唯にあんなに大事にしてもらえて、雨の日なんかお前守るためにあいつびしょびしょになってさ。ホント笑えるよな。

ギー太、お前も願ってくれないか？唯が早く元気になるように。

一緒にライブしようぜ。それで、客から大歓声を浴びような？男と男の約束だ」

ギー太にすつと触れる。……この俺とギー太の会話（っていうかギー太はなんにもしゃべってないけど）、唯聞いてないよな？

ふと唯の方を見ると、ぐっすり眠っていた。……よかった。

さてと、いつのまにか昼じゃん。……なんだか、俺も眠くなってきたなあ。

つい唯の部屋の床に転がり、俺はいつのまにか眠りについてしまっていた。

お休み、唯、ギー太……。

19 「軽音！そして大好き！」（中編）

どこか遠くで、「ごそごそと音が聞こえる。カチャと言う音も聞こえた。

何だろうと思ひ、俺は重い体を起こした。

「あ、ごめんなさい、起こしちゃいましたか？」

「憂ちゃん……？ってことはもう昼過ぎか……」

頭を掻いて、のろのろと立ち上がる。唯は未だにぐっすり眠っている。

ふと、俺の体に毛布が乗っけてあった事に気がついた。……憂ちゃんがかけてくれたのか？それとも唯か？

「遼祐さん、お姉ちゃんのお世話してくれて本当にありがとうございませす」

憂ちゃんは俺にお辞儀をしてくる。本当に出来た妹だ。

「気にすんなよ、俺が好きでやった事だし」

「あの、リビングでお茶でもどうですか？」

まあ、いいか。俺と憂ちゃんはリビングへ向かった。

ダイニングテーブルに備え付けてある椅子に座って待っていると、憂ちゃんがお盆にお茶とお菓子を乗せて現れた。

俺の前にお茶とお菓子を置くと、自分も向かい側の椅子に座った。

「……お姉ちゃん、高校に入ってから、すっごく笑うようになったんです」

元々よく笑うだろ。

「そうなんですけど、中学の時よりもっと多く笑うようになったんですよ」

「軽音部に入って友達が増えたからじゃないか？」

「そうかもしれないね」

俺はお茶を一口。

「それから、お姉ちゃん、よく遼祐さんの事を話すんですよ」
「俺の事？」

「はい、すっごく楽しそうに」

……なんだか照れる。つい頬をポリポリと掻いてしまう。

「あの……」

「ん？」

憂ちゃんが顔を赤くしながら俺の方を見てくる。……まさかこれは
!?!?

……んな訳ない。いつ俺は憂ちゃんとそんなフラグを建てた。

「お姉ちゃん……その、遼祐さんの事……、好きかもしれないんで
す……」

「へっ？」と、俺は間抜けな声を上げることしかかできなかった。

「今日は本当にありがとうございました」

「気にすんなって。んじゃお休み」

「はい、おやすみなさい」

憂ちゃんは自宅の扉を閉じた。俺はそれを確認すると、鞆を肩にか
け、家路につく。

……明日先生に怒られるだろうな。まあ慣れてるからいいか。

家に帰ると、俺は鞆を放り投げてベッドに横になる。

そうしながら、俺は今日憂ちゃんの言った事を思い出す。

『どづいう、ことっ』

『……分かりません。はっきりした事は言えないんですけど……、

お姉ちゃん、遼祐さんの事を話すとき、本当に、本当に楽しそうに
話してくれるんです』

『はあ』

『ごめんなさい、変な事言っちゃって……でも、本当の事かもしれ
ませんし……』

……唯が俺の事を好き……か。俺や憂ちゃんの勘違いじゃない事を祈りたいな。

でも、仮に唯が俺の事を好きで、それで俺はどうすればいいんだろう？ ホントエロゲとかするくせにこういう事は実際になるとそういう知識が役に立たない。

まああれは二次創作だし、頼りにしていると事故るよな絶対。うん。

……俺に、あいつと付き合う資格、あんのかな？

あんだだけ迷惑かけて、心配かけて……正直怖い。

そんな時は、そんなにすればいいかな。……ダメだ。絶対決められるわけがない。

どうすればいい、俺は。

「おい遼祐、なんで昨日急に帰っちゃうんだよ」

次の日の放課後、気が晴れぬまま俺は部室へ顔を出す。

先生に怒られたのはどうでもいいが、それより唯の事で頭がいっぱいだっただ。

「え、あ、ああ。ちよつと体調悪くなつてな」

「遼祐くんも風邪ですか？」

「大丈夫だよ、気にすんな。さて、早く練習して」

ガチャと、部室のドアが開く。

多分さわ子か和かと思っただが、

「やつほ」

「……唯ちゃん（先輩）！？」

唯が……来た。

最悪だ。なんでこんなタイミングで……。頭がますますおかしくなりそうだった。

頭を下に下げた。その時だった。

「…………あれ」

…………なんだ、そういう事か。なら安心だ。
それによく見ると…………間違いはない。确实だ。

「なんで授業来なかつたんだよ」

「いや、昼になって急に調子が良くなって」

「授業サボりたかつただけだろ」

…………ホント、出来た人だ。

「よっしゃ！早速練習だ！」

律が声を上げ、そのまま唯も巻き込んで練習を開始した。

「…………」

「…………気のせい…………だよな？」

「漣も同じ事を考えてたか、あたしもだ」

「もう一度やるう！」

「…………完璧に合いすぎる！今までこんな感触なかつたのに！」

「唯のリズムキープが完璧すぎるんだ。何があった!？」

「な、何にも…………」

そりゃそうだ。だって…………。

「茶番はそこまですたら？いいかげんいいんじゃない?」『憂』「ちや
ん」

ははは、やっぱさわ子も気づいてたか。

「ってなんでお前がそこにいる!!」

後ろの机を見るとさわ子が紅茶を飲んでいた。バカな、奴め一体ど
うやって!？」

まあいいか。

「みんなの目はごまかせても、私の目はごまかせないわよ…………、唯
ちゃんより胸が大きいわ!!」

「そそそ、そんなこと!!」

「じゃあ私のあだ名言ってみて!」

「あああ、あずさ2号!」

「……偽物だ」

間違いない。确实だ。

「なんだみんな気付かなかったの?俺気づいてたぜ?やっぱ俺って名探偵」

と言った瞬間、どうにも空気が重くなる。

……言っただけじゃなかった。俺のイメージが下がったようにしか思えない。

「やっぱ遼祐ってそういう奴だったんだな」

「ちちちちち違う!!んな訳ないだろう!!?俺は下履の色でだない!!」

だが事実そっちの方も気づいていたので、正直言っただけでイメージが落ちても仕方ない……。ごめん、みんな。

「ごめんなさい……」

とりあえず全員椅子に座って話をする。

「それにしても似てたな……全然気付かなかった」

「でも、憂ちゃんギター出来たのね」

「いえ、お姉ちゃんに何回か触らせてもらってたので……」

この人ひょっとして天才?ふとそんな考えがよぎる。

「このまま唯に休んでもらった方がいいのかも……」

やめてくれ、そればかりは可哀想だ。って言うか俺が悲しい。

「本当にすみません、ベッドに寝てるお姉ちゃんを見てると、いてもたつてもいられなくなって……」

こんなに出来た妹さんがいて、唯、お前幸せ者だなホント。と、思ったその時だった。

「やっほ」

次も偽物か。こんどは律が変装したか？

「あたしはここにいる」

ですよね。え、じゃあ……本物！？

「ごめんね心配かけて」

みんなでどうやら本物である唯の周りに集まる。手にティッシュをもっているがはたして何の意味を示しているのだろうか。

それに唯の顔も少し赤くなっている。……おいおい、まさか。

「本当に大丈夫なんですか先輩？」

「うん、さつき起きるとね、元気になつててね、少しは練習にへっくち！！」

……律の顔に何かが飛び散る。唯の鼻水だ。

「だからもう大丈夫」

「嘘つけ！！」

「あ、ギー太！こんな所にいたんだ〜！」

人の話を聞け。お前はなんで前から人の話を聞かんのだ。

唯は俺たちをかきわけ、長椅子に置かれているギー太の所へ向かう。けどそこまで向かう足がふらふらで……。

ギー太を手にとった瞬間ぶっ倒れてしまった。

「熱全然下がってないじゃないか！」

漣が怒る。当たり前だ。俺だって怒るさ。って言うか正直キレ気味だった。

なんで無理してまで来たんだよ。俺が言ったこと忘れたのかよ？

紬がぬれタオルを長椅子で寝ている唯のおでこに乗つける。

「やっぱりダメだね……私抜きで本番の方がいいかも……」

「そんな……」

「りょうくん、あずにゃん、ギターお願いね」

……ッ！！その言葉を聞いた瞬間、頭の線が一本切れたような気がする。

「ふざけんなッ！！！」

「りよ、遼祐！？」

「何言つてんだお前は！！俺らだけで出て一体何の意味があるんだよ！？」

「せ、先輩……！！」

「俺たち6人で、『放課後ティータイム』じゃねえのか！？」

放課後ティータイム。つい先日、俺たちで、って言うかさわ子が命名した俺たちのバンド名だ。

だけどその名前はいかにも俺たちの事を指していて、だからみんなで考えて、この名前にした。

「ギターの梓とお前と俺！ドラムの律！ベースの漣！キーボードの紬！それで放課後ティータイムだろうが！！」

誰か一人が欠けてそのまま出て、そんなの……そんなの放課後ティータイムじゃねえよ！！！」

拳を壁に叩きつける。ダメだ、完全に止められない。あん時の俺が、憑依している。

……痛い。拳が痛くなった。みるとかなり赤くなって、皮もいくらか剥けて血が出ていた。

コンクリートのはずなのに、はは、ちよっと力入れすぎたかな。めっちゃいてえや。

「遼祐、ちよつと落ち着けて……」

「落ち着いていられるかよ！！……もういいよ、勝手にしてるよ。出るなり出ないなり勝手にしろ！俺はもう知らねえよ！！！」

鞆とギターの入ったケースを乱暴に手に取り、部室の扉を開けて、そのまま部室から俺は飛び出した。

……誰も追いかけてこない。まあいいさ。この方が。後が面倒じゃないし。

「……最低だ、俺」

河原の草原に寝っ転がって、赤に染まっている空を見ている。なんであんなことで怒ったんだろ、俺。何やってんだよ。女の子にキれるなんか、最低じゃねえか。

でも、やっぱりまだイライラしている。唯たちの事も少しはあるが、自分に対してもだ。

「はあ……」

ふと、鞆の小さなポケットから四角い白い紙の箱を取り出す。……煙草だ。

中学のグレてた時によく吸っていたが、高校に入って一切やめた。だけど手放す事が出来なくて、結局吸わなくても持ってはいるのである。

「……吸わないって、決めたのにな」

一本手にとって口にくわえる。……そこから出来ない。

手にはライターがある。だけど、そこから火をつけて先端に点けると言う事が出来ない。

「……遼祐？」

後ろから声が聞こえた。振り向くとそこにいたのは……。

「……漣か」

漣がいた。

「……ダメだろ。煙草は成人になってからだぞ」

「ごめん」

優しいよね漣。煙草持っているとこ見られたのに、ただこれだけだ。

「……手」

「え？」

「大丈夫なのか……？」

やば、そいやそのままだった。

見ると血はさつきほどではなかったが、まだ出ている。

「あ、ごめん、漣」

漣は痛い話だったり、それを実際に見たりするのが苦手だった。

今思いだした俺はすぐに見えないところに隠す。まあいいさ。右手だし。……って利き手か。

「……俺な、結構な悪だったんだぜ、中学の時」

「そうなのか？確かに今でもそんな感じは少しはあるけど……」

「楠中つてあるだろ？あそこにいたんだ俺」

えっ……と漣は信じられない様な顔をしている。それと同時に何やら怯えたような顔をした。

そりゃそうか。漣からすりや悪夢の学校だよな。

「そ、そうなんだ……」

「……どうだった、みんなは？」

「……梓も、遼祐程じゃないけど、同じ事言ってた」
そっか。

「唯、少しシヨック受けてた」

「だろうな、あんな事言つて、ホント、最低だよな俺」

「……確かにそうかもしれないけど、私も遼祐と同じ意見だ」
なんだ、結構味方いたんだ。安心した。

「でもあんなに怒るのはよくないぞ」

「……反省してます」

「1年生の時、唯、私や律とムギに、ある事を相談したんだ」
相談？なんの？

「恋の」

「……俺には関係ないだろうな？」

「……こっから先は言っちゃだめって言われてるんだけどな。特に遼祐には」

……はは、そっか。やっぱり、俺の勘違いじゃなかったんだ。

「気づいてたのか」

「気づいてた訳じゃないけど、ただの勘違いだと思ってた」

「残念、それは本当の事だ」

……吹く風が、頬に当たって妙に温かく感じる。

「……ま、分かったよ。とりあえず明日の学園祭、ちゃんと行くよ」「良かった。唯にも謝つとくんどうぞ?」

分かった。……ありがとな、漣。

「え?」

「なんかスッキリした。そろそろ決着つけないな」「立ちあがって、鞆とギターケースを持って帰る。」

「ホントありがとな、漣」

「……うん」

気のせいかな、漣の顔が赤くなっている様な気がする。いや、多分夕日だな。

漣と別れて、俺は家路についた。

FINAL 「軽音！そして大好き！」（後編）

次の日、昼過ぎぐらいに俺は部室へ向かった。

……寝坊したんだよ。

「……うす……」

みんなの反応が気になる。……昨日あんなだけわやしちまったからなあ……。

「遼祐！」

「先輩！良かったあ、来てくれて！」

律と梓が俺のそばに来る。

少し遅れて澪と紬も来た。

「その……昨日は、ごめん」

「いいんだよもう。気にすんなって！」

「あ、そういえば手、大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫だよ。まだ痛いけど、演奏するのに問題はねえよ」

俺は包帯を巻いた右手を見せる。上げたりすると地味に痛い。

「……唯は……？」

「うん、まだ……」

って言うか、来れるのか？

「分かんないんだよ……」

「そっか」

俺は溜息交じりに答える。

その時だった。扉が開く音がしたので、全員の視線が扉に集中する。誰もが唯が来ることを期待したが、そこにいたのは真鍋と浩史、そして白銀と……。

「……このバカ姉貴。何しに来た」

白銀の後ろには俺の大馬鹿姉貴がいた。

「何って失礼ねえ、弟のライブに来るのに理由なんているの？」

去年は来なかつたくせに。

「って言うかお前字が見えないほどアホになったのかよ、関係者以外立ち入り禁止って書いてるだろ」

「アンタの関係者じゃない」

「そりゃそうだけど……」

俺は頭を抱える。もう、なんかもう疲れた。

突っ込むのをやめて俺はなぜみんなが来たのかを聞く事にした。

「13時からステージ入りだから、それまでには準備をしておいてね。えっと、メンバーは全員いるから……」

待て待て。お前の目は節穴か？どこに唯がいるんだよ。

「……唯はね、一個の事に集中する事と他の事が見えなくなるから」

「……ああ、なるほどね」

真鍋が言いたい事が大体理解できた。

つまり、あいつは俺たちのライブの事で唯が集中すると、熱の事を忘れて……って言うか、それは分からんけど。

「とにかく、平沢さんを信じようって事じゃないかな？」

浩史が言う。みんなは頷き、再びいつもの笑顔に戻る。

すると再びドアが開く。今度は誰だ？

「やつほ〜」

……空気読めよさわ子。

「どした、さわ子？って言うかお前何してたんだよ今まで」

「ふふふふ、実はね、今日着る衣装の浴衣の防寒バージョンを作っていたのです」

そのやる気をもっと違うところで見せる。

この場にいる誰もがそう思ったろう。

「そして、これがその衣装です！」

扉の方に手を向けてさういうさわ子。誰かモデルがいんのか？

誰が来るか少し期待していたが、俺はその人物を見た瞬間、衝撃が走った。

「失礼しま〜す」「唯!？」

「お前、着てたんなら真っ先に部室に来いよ……」

「ご、ごめんなさい……」

「心配したんだぞ、みんな」

「うん……」

……ホントに、ホントに心配したんだからな……、バカ。

つい俺は無意識に唯を自分の胸に引き寄せてしまっ。それを見て周りからわあって声が出たような気がするが気にしない。……って何やっとなるんだ俺は。

「え、りよ、りょうくん!？」

「ホント、心配したんだぞ。それで、昨日はごめん」

「……うん」

このまま唯が背中に手をまわしてくれば最高だったのだが、まあそこまで期待すると罰が当たるだろう。

俺は唯を引き離す。

ふと、俺はある事に気がつく。

「あ、お前ギー太は？」

「あれ、わたしここに置いといたよ？」

唯は長椅子を指さす。……まさか窃盗!？な訳ない。

「あっ!あれ憂ちゃんが持って帰ったぞ!!」

律が声を上げる。……おいおい、嘘だろ。もうライブまで取りに帰る時間ないぞ!？」

「……あ、山中先生が代わりにして、その間に取りに行きゃいいんじゃないっすか？」

それだ白銀!ナイスだ!流石天才児!

「いいか、さわ子？」

「……しょうがないわねえ」

さわ子は一回部室の外に出て再び部室に戻ってくる。白いエレキギターを持って。

「……行ってきなさい、唯ちゃん」

「は、はい！」

唯は部室から出る。

「あっ、やべ！」

俺は唯が出た直後に外に出る。

階段の上から、下にいる唯へ声をかける。

「唯！」

「なぐに!？」

「……ライブ終わったらさあ、部室残つとけ！」

「……うん!!」

満面の笑顔で唯は駆け出して行く。

……さてと、何を言うと思ってるのかな、あいつ。

「遼祐、準備はいいか？」

横を見ると既に浴衣に着替えている律たちがいた。

「……あつたりまえよ」

俺はギターケースを部室から引つ張り出し、共に講堂へ向かう。

……2回目のライブ、始めようぜ!!

講堂のステージで最終チェックを行っていた。

俺はギターの音を調整していると、軽音部のみんなが俺の元に集まってくる。

「どした、お前ら？」

顔を見ると律と紬と梓はニヤニヤしまくっている。……怖いぞ。

「……あんだよ」

「『ライブ終わったらさあ、部室で待つとけ!』」

俺は即律の後ろに回って首を絞める。

ギブギブとか言ってるけど俺にはどうでもいい事だ。そのままくたばれ。

それにしても似すぎだろ。気持ち悪いんだって。

「先輩、ついにですか？」

梓、キャラ変わってる。

「はあ、ついに軽音部にラブラブカップルが……」
細、何を変な想像してる。

「そつだ、いい告白方法がある」
漣がいきなり何かを言い出す。耳を貸してそのいい方法とやらを聞く。

ふむふむ……ええええええええええ！？

「なにになに〜、どんなの〜!？」

「えつとだな……」

「待て待て！無理やつちゅーに！！第一タイミングが！」

『次は、軽音楽部『放課後ティータイム』による演奏です』

幕越しても歓声が聞こえてくるのが分かる。……うわ、そんなに期待されてんの？

まあ去年のが結構評判になってからなあ……、まあいいか。
だったら期待にこたえてやるか。……さて、あれも実践するべきなのだろうか。

「頑張れ、遼祐！」

漣、お前顔が輝きすぎだ。落ち着け。

「ま……、やってやるか。ちよつとアドリブ加えるけど」

「……えつ？」

まあ、ついでに軽音部のみんなにも教えとくか。俺の過去。
え、嫌われたりするかもしれないだろつて？

大丈夫だよ。1年と半年間一緒にいてんだから分かるよこいつらの性格ぐらい。

こいつらはそんな事で嫌わない。100%。絶対にな。

「……んじゃ、おっぱじめようぜ！」

「……了解！」

……すっかり定番になったなこれ。元ネタ知ったらどう反応するんだろつ。

まあいいか、バルドスカイはエロゲーじゃなくてアクションゲームだし。ホントはエロゲーだけだ。

そして幕は完全に開き、観客の姿が視界いっぱいに移る。去年よりいっぱいいるな。まあ、いいけどさ。

「1、2、3、4！」

全員の楽器から一斉に音が出る。曲は「ふでペンボールペン」だ。

……それにしてもこの1年と半年、色んな事があったなあ。

最初はなんだっけ、あ、そうだ。姉貴の勘違い……じゃねえ、俺の勘違いで入学式に早く来ちまったんだっけ。

それで仕方なく学校ブラブラして、それで唯と会ったんだよな。今思えば、あれがなかったら今頃こんな所にいなかったなあ絶対。

それでどうだっけ、唯と一緒に軽音部見学に行って、半ば流れで軽音部に入部したんだよなあ。

その後ギター買って、合宿行って、最初の学園祭のライブして、クリスマス会、新勧ライブして、また合宿して……。

楽しかったな、ホント。でもいい事ばかりじゃなかったな。

親父とお袋が離婚した真相知って、壊れかけて、でも唯にあん時色々と世話になったなあ。

結局、俺が何かをやっているときには、唯がいたんじゃないか。

あんなに近かったのに、なんであいつの気持ちに気づいてやれなかったんだろ。

近すぎたのかな？距離が。だから、そういう対象で見れなくなってたんだろうな、きっと。

でも今思えば、俺が鈍すぎたんだろうな絶対。

唯が俺の家に来て、あんな事になった時に、気づいてやるべきだったんだよ。なんで気づいてやれなかったんだ。

でもいいさ。気づけたんだから。今日決着つけるんだから。

……横で小声で漣が声をかけてくる。何やってんだよ、お前ボールだろ？

「違う！MCMC！」

あ、忘れてた。俺MCだった。

マイクに慌てて近づいたので、マイクの先で鼻先を打ってしまった。いて！

「え、えっと、桜高軽音楽部、放課後ティータイムです。今日は、学祭ライブに来てくださったって、ありがとうございます」
パチパチと拍手の音が聞こえる。気持ちい〜。

「じゃあまずは部員の紹介をしたいと思います。まず俺の横にいるベースとボーカル担当の、秋山澪！」
ベースの音を出す澪。

「続いて、リズムギターの中野梓！」

梓はギターを鳴らす。

「ドラムの律！」

ドラムを豪快に叩く。

「キーボードの紬！」

キーボードの音を鳴らす。

「そして、本当はもう一人いるんだけど、事情があつて今はいない平沢唯。で、ギターの俺こと、日暮遼祐。俺たち6人で放課後ティータイムつていいいます。」

ちなみに今唯の代わりにギターを弾いてくれているのは、顧問の山中さわ子先生です。

放課後ティータイムつて言うバンド名は、さわ子先生がつけてくれました。

理由は……まああんまり恥ずかしくて言えないけど、俺たちいつも放課後に紬が持つて来てくれたお茶とお菓子で、毎日ティータイムをしてるんです。

だから放課後ティータイムです。……なんか、最初は単純すぎて嫌だったけど、俺らの事を少ない文字で表わしたら確かに放課後ティータイムなので、渋々これにしました。

まあ、今は、俺はこのバンド名がすっごく気に入ってる。俺たちの始まりも、ティータイムでした。

って言うか、入って最初にした事がティータイムだからね。ホント、最初入った時は軽音部じゃなくて喫茶店部にしろよって思いました。

話が変わるんだけど、俺は半ば流れで入ったんです。でも、最初はまあ暇つぶしになるからって思ってたんですけど、こうやってみんなとお茶して練習していくうちに、いつのまにかこの軽音部が、大好きになりました。

そんで……本当に、この軽音部で、好きになっちゃった人が、います。

そいつは、ドジで天然で、何考えてるのかよく分からなくてふわふわしてて、お菓子とか甘いものが大好きで、でもすっごく優しく、いつも俺を心配してくれてました。

俺、実は中学の時は楠中において、今思えばつまらない毎日を送ってました。親も離婚して、バスケット部に入ってたけど、肩壊してできなくなつて……。

ホント散々でした。だけど、そいつはそんな俺の事をいつつも心配してくれて、世話になって。

なのに、俺はそんなあいつに何一つ恩返しができなかったんです。……恩返しって言ったらちよっと、嫌だけど、とにかく俺は、そいつの事が好きで、好きでしょうがないんです。

……だから、俺は……」

バンツと扉が開く音がする。いた。唯が。ぴったしのタイミングだ。やっぱ今日の俺はついてるかもしんない。

「……俺は、そんな……平沢唯って子に、俺の想いを伝えます」

「俺こと、日暮遼祐は、この世界中の誰よりも、平沢唯と言う女の子を、愛しています」

……言った。言ってしまった。こんな大観衆の前で。
その唯は、扉の前で、息を切らしてポーっと立っていた。

「……………！」
唯が何かを呟いている。いや、遠いから聞こえないだけだった。

「……………！！！」
ついにこっちに走ってくる。

……泣きながら。

俺は少ししゃがんで手をのばす。

唯はその手を掴んで、勢いよくステージに飛び乗り、俺に抱きついてきた。

「わたしも……………わたしも、りょうくんの事……………」

「大好きだよ！！！！りょうくんの事、大好きだよ！！！」

……………やった、やったよ。俺。

大好きな人と、両思いになれた。

本気で好きな、誰よりも愛している、女の子と。

「りょうくん……………！！りょうくん……………！！！」

「ごめんな、唯……………！お前の気持ち、気づいてられなくて……………！！！」

「ぐす、いいよ……………今、こうやって両思いになれたもん……………！！！」

「唯……………！！！」

抱きしめる腕の力がますます強くなる。唯も余計強くなった。

「ずっと、ずっと一緒にいような……………！！どんな時でも……………！！！」

「うん……………！！うん……………！！！」

俺は、こいつを一生守って生きていくんだ。

俺の大好きな女の子。世界中で一番愛している女の子。

それ以上に幸せな事はない。……………俺は、この子を守って生きていく。

もう離したりしない。ずっと一緒にいるんだ。

「……二人とも」

「……ああ(うん)!!」

一旦離れて、唯はギターケースからギター太を取り出す。

「おい唯」

「ん?」

「……帯くらい結んどけ」

俺は唯のほどけている水色の帯を結ぶ。

「……あれ?どうだっけ?」

「蝶ちよ結びだよ」

「ごめん、俺こぶ結びしかできない」

どうやらマイクでこのやりとりが聞こえていたらしく、観客に笑われる。

今思えば、俺つてもしかして欠点ばかり?

「貸してみる」

漣が割り込んで帯を手慣れた動作で結ぶ。

……なんか悲しくなってきた。

「頑張れよ、『唯の彼氏』さん?」

漣がウインクする。……やべ、唯が好きじゃなかったら漣に惚れてたかもしんない。

「……うゝ、りょうくん……?」

「あ、あ、悪い!!悪かつたって!!!!」

再び爆笑。……恥ずかしい。

「んじゃ、行くか」

「うん!!」

「「ふわふわ時間タイム!!!!」

唯と梓と俺のギター、漣と律と紬、そして客の手拍子で始まる。

そしてしばらくして、漣のベースと律のドラム、紬のキーボードも

入って本格的に演奏になる。

……そっか、分かった。

ふわふわ時間タイムの歌詞。

唯だ。唯の視点だ。

つまり、俺らの事はみんな知ってたって事か!?

……誰か言ってくれよ。

やがて、演奏が終了する。

……完璧だ。今まで以上に完璧な演奏だった。

つい自分たちの演奏を自画自賛してしまった。

その時だった。キーボードの音が突然聞こえてくる。

すると今度はドラム、漣のベース、梓のギターと、みんなが急に音を鳴らし始める。

……そういう事か。

俺もギターを鳴らし、唯もギターを鳴らす。

そして……。

「けいおん大好き!!」

「いや〜、やっぱり今回の演奏も凄かったな〜!」

律がお茶を飲みながら一言。まあそれは俺も同感だな。

「……あ、そいや用事があった〜」

律がいかにも嘘っぽい言い方で言います。まったく、もう少し演技上手くしよっぜ。

「私もだ〜」

「私も〜」

「わ、私も〜」

……はあ。頼むよお前ら。

「んじゃ、またあとでね〜」

ボタンと扉が閉じられる。

その後、残された唯と俺は同時にちらっと見る。

そしてお互い笑いあう。

「……あ〜、えっと」

「……りょうくん」

「どした？」

「……えっと、その、もう一回、言って」

「何を？」

「……あの告白」

「え、言うの……？めっちゃ恥ずかしいんだけど」

「お願いだよ〜」

「……あ〜、その、『俺こと、日暮遼祐は、この世界中の誰よりも、

平沢唯と言う女の子を、愛しています』……いいだろ？」

「うん！ありがとねりょうくん！」

「やれやれ……」

「それとね」

「まだあるのか」

「……」

唯がいきなり目を瞑って、口を少し突き出す。

これはつまり、そういう事なのだろうか。

「……えっと」

「ん！……」

溜息をついて、俺は微笑み、唯と同じく目を瞑る。

そして少しずつ近づいてゆきやがて……。

唇に柔らかい何かが触れると同時に、俺たちの距離は零になる。

……大好きだ、唯。

俺は、こいつを守る。

一生かけて、ずっと唯を好きで居続ける。

それ以上の幸福は、俺には必要なかった。
そのまま俺たちは、ずっと唇を重ね続けていた……。

エビローグ 「それから！そして……」

空に広がるのは青と雲……それだけだった。

雲は少しずつ移動していき、青い空はそのままだった。

窓から眺めるその景色はいつも眺める景色と同じで、俺はその景色を頬杖についてボーっと眺めている。

遠くでざわざわ聞こえるが現在は昼休憩で、どの生徒も弁当を食べたり友達としゃべったりと、思い思いの行動をしていた。

でも俺はどうにも食欲……って言うか、弁当を食べると言う気があんまりしない。

誰かが一緒に食べようと言ってくれば鞆から弁当を取り出して一緒に食べるつもりだが。

「遼祐」

横から声がしたので見ると、そこには10年来の親友、浩史が弁当を持って笑いながら、

「一緒に食べよ？」

「……まあ、いいけど」

弁当を風呂敷から広げて取りだすが、どうにも食べる気がしない。

やっぱり食欲がないのだろうか、自分でもよくわからない。朝もあんまりいっぱい飯食ってないし。

「どうしたの遼祐」

「え、あ、ああ、あんま食欲ないからさ」

浩史が俺の顔を覗き込むように見ていたが、その表情がやがてニヤニヤして、

「平沢さんの事考えてた？」

「……どうだか」

箸を持って、唐揚げを口に運ぶ。少しでも食べないと昼まで持たないからな。

「凄いよね、遼祐と平沢さん、もう学校中で話題だよ」

「そりゃそうだろう、あんな告白したら話題にならない方がおかしいっつーの」

「ははは、そりゃそうだよね」

浩史は白米を2口口に放り込む。

俺も卵焼きを口に入れる。……砂糖多すぎたかな。

「あれからどうなの、二人とも？」

「ああ、いつもと一緒だよ」

「デートとかしたの？」

「まだ」

「キスは？」

「した」

「……あつちは？」

「殴るぞお前」

浩史ははたして中学の間に何があったのだろうか。

小学校の時は保健の授業するだけで鳥肌全開な奴だったのに。

「それにしても凄いよねホント。桜高史上2組目だって、あんな告白したの」

「なんだ初代がいたのかよ、一部の先生はまたかって思ってるだろうな」

はたしてそんなバカなカップルはどんな奴なのだろうか、見てみたい気がする。

だがどうせ未だにキヤキヤしてるか、とっくに別れてるかどっちかだろうな。ってどんな告白でもこんな感じだろ。死別とかしてない限り。

もしくは遠距離恋愛とかじゃない限り。

「まあ、随分、前みたいだよ、いつだったっけ、22年前だったかな？」

「そんな昔かよ。って言うかそんな昔から桜高あったんだ」

まさかこの高校がそんな昔からあるとは思わなかった。

まあどうでもいいが。

「平沢さん、最近凄いいんだよ。毎日の様に色んな人から遼祐の事聞かれてるみたいだよ」

「マジか。……そいや俺もよく唯の事聞かれるな」

「やれやれ、そんな事あいつ一言も言っただろ」

「まあいいか。そんな事気にしてもしょうがないし。」

「それにしても、本当に凄かったねあの告白。驚いたよ僕」

「驚いたのは告白じゃなくて俺の過去だろ」

「……まあ、ね」

あの告白の時、俺の過去をみんなに暴露した。

だが軽音部のみんなも、クラスや周りの奴らはそれで俺に失望したりしなかった。

特に律達なんか、悪ノリして変な奴らに絡まれたらよろしくねとか言い出しやがった。まったく……。

まあ別に悪い気持ちはしなかったけど。やっぱり軽音部のみんなだなあと思った。

「まったく、そもそもお前ら、知ってたんなら言えっちゅーに」

「いや、これは言ったら面白くないかなあと」

実は俺と唯が両思いだったって事、軽音部のみんなだけじゃなくて浩史や和、さらにさわ子まで知っていたんだとさ。

マジで酷い。それにしても浩史、面白くないって……お前人の恋愛何だと思ってる。

「ごめんごめん」

「はあ……、まったく」

弁当の米を口にかき込み、弁当を空にする。結局全部食っちゃった。まったく、最近ホントこいつ性格が悪くなってきてる気がする。……

……でもなんとなくこんな感じだった気がする。

俺は弁当を鞆にしまっただけそのまま教室を出た。ふと、腹ごなしの散歩がしたくなっただけだ。

……どうしてだろう、つい校舎の裏側にあるあの樹に来てしまった。ここで確か唯あいつと初めて会ったっけか？……そうだったな。で、確かしゃがんでんとう虫見てるあいつに俺が声を掛けて……。……樹の付近でしゃがんでいる女子生徒がいる。焦茶色の髪で、ショートカットの少女だ。

何やってんだあんなところで。

そんな姿を見ると、つい口元がゆるむ。

「よっ」

返事がない。

「もしもし」

女子生徒の体がピクンと反応して、こっちを振り向く。

「……何やってんの？」

「え〜とね」

このてんとう虫さん見てたの！

草に止まっているてんとう虫を指さしながら、唯は笑顔でそう答えた。

俺はそばに歩み寄り、隣にしゃがんで、その小さなてんとう虫を、共に見た。

あとがき

これにて「けいおん！ LOVE！LOVE！LIVE！」第1期終了となります。長らくたくさんのご声援、ありがとうございました。

やはり最終回はこのような終わり方となりましたが、後日談や番外編を行いたいと思います。

基本的には番外編は「冬の日！」と「ライブハウス！」の話です。また、「もうひとつの世界」の話も考えております。

これは、遼祐が唯ではなく、別のヒロインキャラを選んだ場合の『もしもの』お話です。本編には関係ありません。

一応、澪編を現在制作中です。

さて、この物語は第2期「けいおん！ LOVE！LOVE！LIVE！アンコール！！」へ続きます。

第2期は主に未だ残されている謎の一部を解き明かし、そして3年生編を行いたいと思います。

基本的にけいおん！！の2期に準じたストーリー構成になると思います。

そしてエンディングは作者完全オリジナルとなっています。はたしてどんな結末になるか、ご期待ください。

さて、最後になりましたが、今までご声援してくださった皆さまへ本当に感謝いたします。

感想を11件も書いていただき、ありがとうございます。

それだけが、僕の励みになりました。本当にありがとうございます。これからも「けいおん！ LOVE！LOVE！LIVE！」シリーズと伝説・改を、よろしくお願いいたします。

ご声援、ありがとうございました。

番外編 「プレゼント！そしてライブハウス！」（前編）

「ライブハウス？」

もう冬休みかあ、とはしゃいでいた冬のある日の事。

部室で律がライブハウスに出ようなんて事を言い出した。

中学の時の友達に誘われたかららしいが、俺らにそこまでやれるような実力は果たしてあるのだろうか？

だが！……こんなチャンスはないかもしれない。

そうだな、ここで一度俺らの力を試すって言うのも悪くないかもしれない。

「私は反対」

「わ、私もです！」

漣と梓は反対サイドか。唯と律は賛成サイド。俺と紬の票によって全てが変わると言う事か。

だが俺は賛成サイドだ。……つまりこれでもし紬が反対サイドにいけばどうするのだろうか？

「私、行ってみたい！」

どうやら反対サイドの場合の対策は考えなくても良いらしい。

こうして、俺たちのライブハウス参戦が決定した。……賛成したのはいいが、果たして大丈夫なのだろうか？

嫌な予感もするが、なんとかなるだろうと心の中で適当に言いくるめ、俺は素直にライブハウスへの参戦を喜ぶ事にした。

「ライブハウスっすか！？いいなあ、俺も行ってみたいなあ……」

現在地はトイレ。部活中にトイレに行きたくなって行ってみるとたまたま白銀に遭遇した。

そんでさっきの話をすると目を輝かす。……なんでだよ。

「だって日暮さんのライブっすよ！？俺も見たいっすよ！」

ストーリーかこいつは。って言うかひょっとしてお前、『これ』な

のか？

俺は裏返した左手を右頬にあてる。……同性愛者なのかと言う事だ。

「酷いっすよ日暮さん！俺はただ憧れとして……」

「ああ分かった分かった。悪かったよ」

でもそこまで来るとそう疑われても仕方ないぞ？

と言おうと思ったがけっこうシヨックだったみたいなのでやめておいた。

その後、白銀と別れて、俺は部室へと戻った。

さてその日の帰り。俺たちはそのライブハウスに向かっていた。

なんでかって？そりや当たり前だろ。参加しますって言いに行かないといけないんだから。

それにしても寒い。

「りょうくんりょうくん！今日は鍋にしようよ〜！」

……へいへい。

あれから唯は毎日の様に俺を自分の家に連れ込む。

憂ちゃんは全然OKで、夕飯もよく一緒に食べる。

ちなみに唯たちの両親には既に俺と唯の関係は言っており、あっさり認められて唯の親公認となった。

そいや、唯の両親、いかにも唯の親だったなあ。唯のあの性格は親譲りだったか。

唯の親父さんなんか反対するどころか大賛成で、さっさと結婚しろとか言い出してくる。

お母さんもお母さんでなんかもう本当に唯と憂ちゃんの親だなあと言う感じだった。本当になんか変わった家族だった。幸せそうなのでいいけど。

「まったく、熱々ですな〜」

「何が熱々だ。そんな事言う暇があれば助けてくれっつーの」

唯は俺の首に巻きついてそのまま離れない。やめて、恥ずかしいから。家や部室の中なら好きなだけやっていいけどここではやめて。

あ、でも部室でも出来たらやめて。

「大丈夫だよ、愛の力で復活できるって」

律が冷やかしてくるように言ってくる。

まあ別に助けなくてもいいが。

唯は付き合ひ始めてからものすごいスキンシップをしてくるようになった。なんとなく梓や憂ちゃんの気持ち分かる気がする。

憂ちゃんは喜んでいるみたいだが。……こいつらシスコンか？

と、俺は嫌がつている様に見えるが、実際は別にかまやしない。

しか〜し！！……せめて場所を考えよう。うん。

「あ、ここだここ」

いつのまにかライブハウスに到着していた。

なんかいかにも怖そうな人が気持ちいいほどいそうな場所だが律は気にせずに扉を開ける。

……おい漣、戻ってこい。漣は既に気絶しかけていた。こいつもそういう雰囲気とか感じれるのか。

「す、すいませ〜ん」

律は扉を開けて声を上げる。その数秒後には〜いと言う声が出て、すぐそばにあるカウンターから女の人が姿を表わした。このライブハウスのマネージャーさんか。

俺たちはカウンターの前に律を先頭に集まる。

「あ、あの！出演希望なんです！放課後ティータイムです！」

勢いよくライブのポスターを見せる。

女の人はそれを手にとって、俺たちを見渡した。

「ああ、話は聞いているわ。ラブクライシスのマキちゃんの紹介ね」

ラブクライシス！？かっこよすぎだろ。オトメクライシスとかタイムクライシスよりかっこいいぞ！？

いや、タイムクライシスの方がかっこいいか。って関係ねえし。

……なんか、今思えば放課後ティータイムって、ほわわんとしすぎだな。

「放課後ティータイムって、なんだか可愛いバント名ね」

褒められた〜！イヤッホオオオイ！！

とりあえずカウンターの近くにあったテーブルに座り、マネージャーの人に俺らの演奏を聴いてもらう。

それにしても漣、準備良すぎ。普通女の子が鞆にラジカセなんか入れてないぜ？

「こんな感じなんですけど……」

「うん……」

マネージャーの人はしばらく考える。はたして俺らは出る事ができるのか？

「じゃあ、この参加申込書を書いてくれる？」

……改めて参戦決定した。みんなの表情が緊張したものから笑顔へと変化する。

さてと、これからが大変だなあ、猛練習だなこりゃ。

早速ライブハウス内の案内を開始する。

まずは楽屋だ。……どんな楽屋なのだろうか。まあどうせ共用だろうけど。

マネージャーの人が楽屋の扉を開けると、唯が目を輝かす。どんな想像してんだか。

「あ、あのー！」

絨がマネージャーさんに何か質問する。

「暖簾とかかけていいですか！？」

良い訳ねえだろー！！

「それで、この扉からステージに……」

少し分厚い扉を開くと、そこには俺たちが立つ事になるステージがあった。

俺以外の軽音部の全員は走ってステージの真ん中ぐらいへ向かう。

やれやれ、お前ら子供か。

「見て見て！ミラーボールもあるよ！」

……ホントだ。はじめてみた。

「演奏中の照明のプランも、考えておいてね」

「もうピカピカのキランキランで！！」

恥ずかしいからやめる。もうちょっと控えめにしてくれ。

薄じゃなくてもそればっかりはお断りだ。

「じゃあ本番もよろしくね」

「……………よろしくお願ひします……………」

大体の説明を受けると、俺たちはライブハウスを後にした。

その後、全員で唯の家でミーティングだ。

唯の家へ向かう途中、唯がふと足を止めた。

店のシヨウウインドウに食いついて何かを見ていた。

「おい唯、置いてくぞ〜！」

「え、う、うん！」

唯は先頭にいる律達のところへ駆け出していく。

俺はそのウインドウの中を見た。

「……………なんだそついう事か」

その中にある物見て微笑むと、俺は唯の後に続いた。

……さて、明日ももう一度ここに来る事になるなこりゃ。

唯の部屋でただいまミーティング中。俺は唯の机の椅子に座り、ミーティングに参加する。

その途中、憂ちゃんがあつたかいお茶をお盆に置いて部屋に入って

来てくれた。ありがたい！

「え、ライブハウスに？」

「そ。いまからその打ち合わせ」

「す〜いお姉ちゃん！」

唯は後頭部を搔いて、えへへと照れる。

「えっと、曲目は4つだったな……………、ふでペン、ホッチキス、カレ

「ふわふわでいいかな」

「って言うか俺らそれしか歌うのねえじゃん。」

「何着て歌う!?!」

唯が声を上げる。そうだなあ、ゴスロリと浴衣はやったからなあ…

…。

今度はナースか?それともミニスカポリスもいいかな。

「そんな物着て出れるか!?!」

「いいじゃん別に。減るもんじゃないだろ」

「嫌だ!?!」

澪が必死に拒否する。ちえ、見てみたかったのに。

あ、でももしたら俺1人着るのがなくなるな。この前の学園祭も結局俺一人制服だったし。さわり用意しといてくれ。

結局澪と梓の必死の説得により、制服に決定してしまった。まあそれもそれで悪くないか。

それが決まった後、唯が何かを思い出したのか、ポケットから紙きれを取り出す。ああ、ライブのチケットか。

確かマネージャーの人から7枚ぐらいもらったな。

「はい、これ憂と純ちゃんの。二人で見に来てね!」

そういうと、憂ちゃんはそれを手にとってにらめっこを開始する。

そして呟くように、

「お姉ちゃんが初めてライブに出る記念のチケット……もったいな
くて使えない……!」

いや使えよ!使わないと入れないぞ!?

「後は和ちゃんにも渡さないと……、りょうくんも、門村くんと白銀くんに渡しておいた方がいいんじゃない?」

そうだな。俺は唯からチケットを2枚受け取った。そいや誰かもう一人呼ぼうかなと思っていた人がいるがまあいいか。あいつは知らん。

「ぶえつくしよい!!」

「栗紅、風邪？」

「多分」

「ほれ、浩史」

次の日、教室で机に座っていた浩史に唯から受け取ったチケットの内一枚を手渡す。

受け取ると俺とチケットをちらちら見比べる。あのなあ、俺ってチケットと同じくらいの人間じゃないんだぞ。

「へえ、ライブハウス出るんだ。凄いやん遼祐」

「まあな。サインが欲しいならやるぞ？」

「いいよ僕は。それより白銀くんの方が欲しいんじゃない？」

「そらそうだな。まあいいや。欲しくなったら言え」

「う、うん」

……絶対いらないだろお前。顔に書いてあるぞ。いらぬなら素直に言えって。

その後、俺は白銀にチケットを渡した。

「よし、んじゃ今日はここまで」

律の終了宣言と共に全員帰る支度を始める。

俺はさっさとギターケースにギターをしまい、鞆を持つと、

「悪い、俺先に帰るわ」

「え〜!?!一緒に帰ろうよりようくん!」

腕を掴んで先に帰ろうとする俺の動きを停止させる。

だがどうしても俺は行かなきゃいけない場所があるので、俺は適当に理由をつけてさっさと退散した。

ごめんな唯。

そして、残り7日でライブをしなきゃならないクリスマスライブの夜。俺は唯の家のベッドでゴロゴロしている。

本当は去年の様に軽音部全員でクリスマス会をするはずなのだが、残念ながらみんな理由があって今年は個別でクリスマスライブを過ごす事になった。

ちなみに唯はと言うと俺の横でゴロゴロしている。

……おいそこで変な想像した奴、決して違うからな!? そういう事してないからな!?

「そういえばりょうくん」

「なんだ?」

「……なんでもない」

唯は上半身だけ立ち上げ、窓から外を眺める。

今日は妙に唯の元気がない。なんかいつもの唯とは違う感じがしてどうにもこっちも身構えてしまう。

……そうだ。

「……えいつ!」

「ひゃん!」

だから変な声上げるな。どいつもこいつもなんでひゃんなんだ。作者の趣味なのか!?

俺は後ろから唯に抱きつく。……こうすれば嫌でも元気出るだろ。

「急にどうしたのりょうくん?」

「いや、なんか今日あんま唯元気なかったからさ」

……しまった、失敗だった。再び唯がしょげてしまう。

しょうがない。俺は上着のポケットからクリスマス用のラッピングされた小包を取り出して唯の手に乗せてやる。

「ほれ、クリスマスプレゼント」

「え、いいの?」

「いらぬなら返せ。遷とかにあげて浮気してやる」

「ひ、ひどいよりょうくん!」

するわけないだろ。自分から告白してそんな酷い事しやしない。
唯は顔を赤らめて包装紙をはずして、中に入っている白い箱を開ける。

そこに入っていたのは……。

「……え……？」

「欲しかったんだろ、これ」

そこには金属でできた星が付いているネックレスが入っていた。

「この前のライブハウスから帰るときにお前これ見てたからさ。欲しいかなって」

「……うん。……ありがとね、りょうくん」

気にすんな。

そういうと、唯は早速ネックレスを首にかける。

つけると、なんか唯がかなり大人っぽく見えた。だが、……せめて服だけでもなんとかしろよ……。

まあそんな事を言うと、空気が崩壊しそうなので言わないでおいた。

「似合う？」

「うん」

「ホントに、ありがとね」

「うん」

「……りょうくん」

なんだ？

「わたし、プレゼント用意してなかった……」

ああ、なるほどね。

「その、「めんね……？」」

「いいよ別に。ああ、その代わりに……」

「え……？ちよ……！！」

俺は唯を押し倒して、唯の上に覆いかぶさる。

さて、どうするべきか。正直ここから先考えてない。

「……唯がいるから、別にいいよ」

唯の顔がみるみる真っ赤になっていく。

当然、こんな台詞を言った俺の顔も十分真っ赤になっただ。
……めっちゃ恥ずかしい。

「……りょうくん」

「……唯」

俺たちはそのまま顔を近づけてキスをした。

何十秒、何分していたが分からないけど、ものすごく長く感じた。
唯がいれば、プレゼントなんかいらさない。

唯の存在そのものが、俺へのプレゼントなのかもしれない。

「りょうくん」

「なんだ？」

「……ライブ、成功させようね」

「……うん」

手を深く握り合って、俺たちは再びキスをした。

絶対成功させてやるさ。絶対に、絶対にな。

こうして、俺たちのクリスマスイブの夜が過ぎて行った……。

番外編 「プレゼント！そしてライブハウス！」（後編）

……遠くでブーンって音が鳴っている。しかし俺は起きない。

何故なら今日は糞晦　ゴホンゴホン！大晦日なのでゆっくりさせてもら。

「って、大晦日ってライブじゃねえかああああ！！」

飛び起きて携帯のパネルを見ると溲と言う文字が。

俺は恐る恐る通話ボタンを押して、耳に当てる。

「……ういゝす……」

『おはよう……』

「……おはようございます」

……ごめんなさああああい！！！！

「まったく、あれほど寝坊するなって言っただろ？」

いや、しょうがないじゃん。冬休みは言って練習ばかりしてるし、夜は遊び疲れてるんだから……。

「遊んでるのに疲れるな」

ソリー、溲。

溲に怒られながら、俺たち放課後ティータイムのメンバーは、ライブハウスへと向かう。

そしてライブハウスの前に到着すると既に人だかりが。おいおい、まだライブまで何時間もあるんだぜ？

「……お疲れ様です！」「……」

「他のバンドの子達かな？」

ファンの子じゃね？

律がそういうと唯は納得する。

ああ、なるほどな。俺もてっきり他のバンドの子かと。

「こんにちは〜」「よろしくお願ひしま　ひい!〜!」
律が扉を開けた瞬間、あいさつの声を止める。

何かと思うと、目の前にはそれはまあいかにもバンドしてるっぽい子達が既に到着していた。

……怖。俺の第一声だった。いつのまにか俺もビビりになったもんだなあ。

昔はあんなの見ても特に気にしなかったのに。って言うかあんなのしか見た事なかったし。

隣の漑が、後ろへ逃げ出そうとしていたが、俺はコートの袖を引張る。逃げんなバカ。

「おはよ〜」

「おはようっす〜」

「よろしく〜」

あれ、結構フレンドリーな方たちじゃない?良かった〜。安心したわ。

肩に入れていた力が一気に抜けた。……マジビビってたんだぞ俺。

「あ、りっちゃん〜ん」

ふと壁の端っこに座っていた少女の1人が律に近づく。

ああ、この子がマキちゃんか。

「マキちゃん〜ん、久しぶり〜」

「漑ちゃんも久しぶり」

ははは、どうやら本当にマキちゃんらしい。

「みんな紹介するね。この子がラブクライシスのドラムのマキちゃん。このライブに誘ってくれた子」

ドラムか。まあなんとなくそんな雰囲気してるな。

「よろしくね」

「こ、こちらこそ!いつもりっちゃんがお世話になってます!」
唯が緊張しながらも挨拶をする。

って言うか『が』じゃなくて『に』じゃね?まあいいか。

「わ〜、漑さんだ〜」

「うちのベースのアヤ。漣ちゃんの大ファン」

ひえ〜、他のバンドにまで知れ渡ってるのか。すげえな漣。恐るべし。

「学園祭のライブ、かつこよかったです」

「見に来てくれたんだ〜」

「あ、遅れてきた人」

言ってるやるな、それは。

「それに後ろにいる人ってあの恥ずかしい告白を大観衆の前で言った……」

「うるせえ！！そればかりは言わないでください！！」

恥ずかしい。あれが他校にでも知り渡ってみる。もう俺と唯お終いじゃん。

そう思っていたが唯は「でへへ〜」と何か知らんが喜んでいる。：

…おい。

「あ、遼祐じゃん」

ふと、もう片方のいかにもバンドと言う感じの女性陣の中の1人がこっちに近づいてくる。

どうやら俺の事を知っているみたいだが……。

「えっと、どちらさん？」

「アタシだよ。里伽子だよ。楠中の時にいただろ？」

……ああ！思い出した！

確か女子不良グループの中でもトップクラスでワルだった奴だ。

俺とは1つ学年が上だったのだが、確か留年して2つぐらい年上だったはずだ。

しかし里伽子がなんでこんな所に？

「バカ。バンドしてるからに決まってるんだろ」

ああ、なるほどね。

「へ〜、アンタ楠中卒業して桜高行くなって言ってたけどまさかこんなかわいい子を捕まえるとはね？」

「捕まえるとは失礼な。ちゃんと同意の上だ」

こいつとは案外仲が良かったのでこういう軽口を叩きあうのはいつもの事だった。

……あ、しまった。

後ろにいる唯を見ると、なんだかつまらなそうな顔をしていた。

すると里伽子は俺の心の中を察したのか、唯の方へ向かう。

「えっと、遼祐の彼女だよね？」

「は、はい」

「遼祐、バカだけど『多分』頼りになるから、しっかりついて行ってやんな」

「わ、分かりました！」

……良かった、なんとか解決した。

それにしてもバカとか多分とか言うなよ、なんか悲しくなるから。

「だって事実じゃん」

「うっせえー！」

「ねえねえ、わたしたちもロゴマークとかあったらいいね！」

ラブクライシスのマキちゃんからもらったCDを眺めながら、唯がそんな事言う。

そいや俺らそついうの考えてねえなあ。

「どんなのにするんだ？」

「え〜とね……」

どこからかペンを取り出して手のひらにロゴマークを書き始める。

そして書く動作を終了させ、こちらにそのロゴマークを見せる。…

…って

「なんだよこれ！温泉マークじゃねえか！！俺ら温泉同好会じゃねえんだぞー！？」

「え〜、一生懸命考えたのに〜」

口をとがらせて唯が唸る。そんな事言ってもこればかりはやだぞ。

「ティーカップも書いたらどう？」

紬が提案する。……ああ、確かに温泉マークにちょっと付け加える

ただだし、なにより俺らのバンド名とぴったりだし。

そういうと早速唯が書き始める。そして書き終わると、

「おお、いいじゃん」

「うんうん！まったりお茶するいい感じ！」

「ねえねえ、あたしのドラムスティックにも書いて！」

「じゃあ私のキーボードにも……」

「私もベースに」

「私はピックに……」

自分たちの持ち物に書いてとねだる女子部員の皆さん。

やれやれ、緊張とかしねえのかな？遠くで眺めている俺はそう思いながら笑みを浮かべている。

「じゃ、ミーティングはじめます」

マネージャーの人がカウンターの隣の扉から現れる。

唯たちは同時に顔を見合わせ、

「よっしゃあ、行くぞお！」

「……オー！」「……」

……俺も一応手だけ上げておいた。

ミーティングで手渡された紙に書かれていたのは、演奏の順番とかが書かれてあり、俺らは2番目だった。

遷は非常に残念がっていたが、いつやるうとも一緒に反応をしているだろうと俺は思う。

「すいませ〜ん」

後ろから俺らを呼ぶ声があったので振り向くと、そこにはメガネをかけた青年が何かを持って立っていた。

「これ、バックステージパスです」

「あ、どうも」

全員、受け取った後、青年はお辞儀をして立ち去った。

「バックステージパスって？」

唯が俺に質問してくる。

まったく、それぐらい知るところぞ。

「これはな、ライブハウスに出るバンドの人だって事を証明する為のチケットみたいなものだよ」

「そうなんだ、あ、シールみたいになってる。どこに貼ればいいのか？ あ」

唯は何かを目を輝かしてみる。

その視線の先にはバックステージパスがたくさん貼られている他のバンドの器具のケースだった。

あ、やばい。こいつ絶対勘違いする。

「じゃあわたしも……」

やっぱりだ。

「違うよ、当日は服につけなきゃ入れないんだよ」

「そうなんだ、じゃあ……」

唯はタイツの上に貼る。なんでそこなんだよ！？

「え、違うの？じゃあ剥がそ」

あ、タイム。俺が剥がしてやるよ。

「やめる遼祐！息が荒いぞ！」

んな訳ないだろ、ハア……ハア……、人聞きの悪い事を……、ハア

……ハア……

つて、かなり荒いな。

「冷静に納得するな……！」

「わあ見て！放課後ティータイム様だつて！凄いよ様だつて……！」

ああ、はいはい。分かったから落ち着け。

まったく、なんかさつきから唯がものすごい興奮している。こいつは行事前にはテンションが上がるタイプの人間らしい。

「お茶にしようか？」

細、お前もお前もリラックスしすぎだ。

唯までとはいかないがそれぐらい興奮してもいいんだぞ？

「あゝ、美味しいね〜」

「この為だけに生きてきたって感じ〜」

「同感〜」

「この子たちの人生って一体……って言うか前もこのやり取りしたような」

「忘れたよそんな事〜」。

と、後ろに誰か人が立つ気配がする。

俺の後ろを取るとは……やるじゃないか。

「あゝ、いい香り〜」

見ると他のバンドの子達が並んでいた。

「よかつたら一緒にどうですか？」

「いいの？」

「じゃあ、いただきますか」

やっぱり紬は最強だ。俺はそう感じた。

「へえ、じゃあ色んなコンテストに出てんだ」

「中々入賞できないんだけどね」

「でも、絶対にプロになりたいからさ」

なるほどなあ、みんな大変なんだな。

それとも俺たちがむしる樂をしすぎなのか、それとも何も知らなさすぎなのだろうか。

どっちにしろ少なくとも俺らはどうにも……なあ。

「そっだよね、諦めたら終わりだもん」

「ずっと音楽していきたいし」

やっぱ、みんな音楽がやりたくてバンドやってるんだな。

目指せ武道館って言ったのが恥ずかしいな……。

こんな話ができるのも、唯や紬、みんなに会えたからだな。

……まあ、俺らは俺らでしっかり頑張ればいいんだ。

さてと、しっかり頑張ろう。うん。

「放課後ティータイムさん！！早くリハお願いします！！」

しまった、まったりしすぎた！
……まずはこういうところからだな。

現在唯と一緒に歩道を歩いている。

理由はお菓子を買いに行っていたからだ。

「つたく、ホント甘い物好きだよなお前、太るぞ？」

「いいもん！わたしはいくら食べても太らない体質なんだもん！」

……澁と紬が怒るぞ？いつだったか、あいつら冬太りするからって
なんか色々愚痴ってたし。

「あ、和ちゃんに憂と純ちゃんだ！お〜い！」

前方を見ると、そこには真鍋と憂ちゃん、それとその友達、純ちゃん
んがいた。

「すごい盛況ですね」

ライブハウスの前を見ると既に人の行列が。

すげえなおい。まさかこんなに人がいるとは。

「あ、見てみて〜、これバックステージパス！」

「あんだ、緊張しないの？」

「してるよ〜、お菓子食べて緊張ほぐしてるんだよ〜」

ああ、ただ無意味に食べてる訳じゃなかったんだ。

案外こいつもそういう事考えてたんだ。

つと、思っていると後ろで俺の名前を呼ぶ声があった。

振り向くとそこには浩史と白銀、そして意外な……。

「なんだ姉貴か、どうした？」

「どうしたじゃないわよ！アンタ、なんで呼んでくれなかったのよ
！」

ああ、そうか。誰かを呼ばなきゃいけない様な気がしたんだけど姉
貴だったのか！

「本気で忘れてたのね……」

「はいっ……！」

そう言った瞬間、姉貴はヘッドロックをしてくる。なんでさわ子も

こいつもヘッドロックばかり!?

「さわちゃんから教えてもらったのよ」

「いらん事を……」

服を整えて、溜息をつく。まあ整えると言っても服のシワを取るだけだ。

「それにしてもすごいすね、この人数。頑張ってくださいよ、

日暮さん!」

「はいはい」

まったく、それしかお前らは言う事がないのか……。

そしてステージへ入る扉。

俺たちは今のバンドの演奏が終わるのをまだかまだかと待っていた。1人だけ待っていないかったが。

「……」

澪の体がぶるぶる震えている。

俺は何か声をかけようかと思ったが、どうにも言葉が見つからない。

「み〜お」

律が澪に声を掛ける。流石律だ。後は任せたぜ。

「こけない様に」

俺は律の頭をぶんなぐる。

「いって〜! 酷いぞ遼祐〜!」

「うるせえよ、もう少し別の言葉はなかったのか?!」

と、俺がそう突っ込むと、紬が笑いだす。

続いて唯と律と梓が笑い、最後に澪が笑う。

……流石律。澪の性格良く分かってるぜ。

「放課後ティータイムさん、そろそろ出番です。ステージへの移動
お願いします」

青年が後ろから声をかける。

全員既に取りラックスしており、完全に準備万端だった。

「……んじゃ、やるか! Let's partyだぜ!」

「……了解！」

……本当に定番になってんじゃねえか。

バルドの登場人物の皆さん、ごめん。

俺は勢いよくドアを開けて、全員でステージへ飛び込んだ。

そして……。

「いてっー！」

漣ではなく俺がこけた。

「あゝ、終わったあゝ！」

ライブは終了、空には雲ひとつない晴れた夜空が広がっている。

それにしてもやはり冬の空は寒い……。手袋持ってくればよかった。

「お疲れ様」

前を見ると、そこには浩史や真鍋たちがいた。真ん中にはさわ子までいた。

え、来てたの？知らなかった。

「なんですってえええ！？」

「だから痛いって！！なんで一日に二度も同じ事されなきゃならんのだ！！」

みんなが笑う。まったく、いいかげんこのパターンも飽きてきた。

「遼祐、かつこよかったよ」

「日暮さん、かつこよすぎっす！マジ凄かったすよ！」

「アಂತも成長したわね」

そりゃどうも。って言うか姉貴、もう少し言葉はないのかよ。

「ホント、良かったわね。みんなかつこよかったわよ」

真鍋がそういうとみんな素直に喜ぶ。

いや〜、なんか照れるなあ〜。

「んで、これからみんなどうすんだ？」

「アタシは帰る〜」

あっそう。んじゃバイなら。

「もう少し他に言葉はないのおお!？」

「お前が言うなああ!！」

またヘッドロックされる。もうやめよう、グダグダだよ。

結局、姉貴と浩史と白銀以外はみんな唯の家で最後の年を過ごす事になった。

「つて俺しか男居ないじゃん」

「いいなあ日暮さん、ハーレムじゃないっすか」

俺は唯一筋なんだよ。

「とらミミもどうかしら〜？」

「嫌です!」

やれやれ、ライブが終わると結局この流れか。

溜息をつきながらも、その様子を微笑みながら見る。

「みなさ〜ん、年越し蕎麦もありますよ〜」

待ってました大統領。

憂ちゃんの蕎麦を頂き、すぐろくやらババ抜きやら紅白で盛り上がり、結局1年の最後の日は唯の家で過ごした。

つて言うか、何が悲しくて1年最後の日に悪魔の譲り合いをしなけりゃならんだ。新年一発目で嫌な事が起きない事を祈りたいものだ。

……ああそうだった!紅白家で録画するの忘れてた!奈々様が出るんだった!!!

遠くで声が聞こえる。つてまたこのパターンか。いいかげんにしろ作者。もう少し他の起こし方はないんか。

薄眼を開くと、唯の顔が目の前にドアップであった。まさか寝起き

を襲うのか！？……違うわボケ。

「どおした……？新年早々泥棒でも進入してきたのか……？」

本当に悪い事が起きてしまったか……、これからはババ抜きはなるべく禁止しよう。

「違うよ、いいから起きて」

ああ、分かった分かった、今起きるから……。

俺は上半身を起こして、あくびをする。

「んで、なんだよ。こんな朝早くから」

「初日の出を見に行こうよ」

「めんどくせえよ、眠いからパスな」

「もう、こんな時に寝てどうするの！」

「お前が言うなよ……」

結局初日の出を渋々見に行く事になった。

律や澪達も起こして軽音部全員（顧問を除く）で見に行った。

「さわちゃんも連れて行かなくて大丈夫かな……？」

いいんだよ、ほっときゃいいさ。いたら面倒だし。

俺は唯の手を掴んで、高台に上げる。

そして全員で横に並んで、初日の出を見る。……すっげ、綺麗だ。

「でしょでしょ？ここ穴場なんだ」

へえ知らなかった。まあ知らないから穴場なのだが。

「あ、そういえば……」

澪が何かを思い出す。深呼吸すると……。

「あけまして、おめでとございます」

ああ、そいやもう新年だった。忘れてた。

そういうとみんなもあけましておめでとと口々に言う。

「りょうくん」

唯が小声で俺に話しかけてくる。

どうした、唯？

「……その、これがわたしなりのプレゼントなんだけど、ダメかな

「？」

ああ、そうだったんだ。

「みんなもいるけど、その……どう？」

「クリスマスプレゼントじゃなくてどう考えてもお年玉だろ」

「うん。でも、どう……かな？」

「……ありがとな、唯」

そういうと、唯は満面の笑顔をこっちに向けた。

来年も、ここで初日の出見るか。……唯と一緒にな。

輝く初日の出を見ながら、俺は心の中でそう思った。

「そいや梓、そのとらミミ外さないの？」

「にゃっ！…！」

番外編 「冬の日！そしてまったりな1日？」

冬休み明け。俺は現在学校へと向かっている途中だ。
コートのポケットの中にあるi pod 転がしながら、とことこと歩いている。

吐く息が濃い白の気体となって宙に舞う。……めっちゃ寒い。
今日は確か4 ぐらいって言ってたな。冗談じゃない。死ぬぞこの寒さは。雪降るんじゃないこれ。

空を見ると灰色の雲が冬の空を覆っている。やれやれ、太陽もう少し活躍しろよこの役立たず。

と、そんな事を言うと太陽が地球に迫ってきそうなのでやめておいた。……寒ッ！

「ホント寒いね」

浩史はポケットに入れているカイロを触りながら呟く。

俺はそんな様子を頬杖について見つめているだけだった。

「カイロもう一個ない？」

「ないよ」

そんな笑顔で言うな。腹が立つ。

溜息をついて、窓に目をやる。

運動部は現在朝の練習をしている。寒いのによく頑張るよな。

「まあ運動部だもん。仕方ないよ」

「おめえもだろつが」

「陸上部は、あんまりにも寒い日はしないの」

知るかそんな事。俺には関係ねえよ。

「……寒いね」

「……ああ」

そして放課後の部室でのティータイム。

あつたかい紅茶は非常においしいのだが、やっぱり寒い。

しかもなんだか唯以外何故か全員お通夜みたいな顔をしている。つて言うか唯は現在席をはずしている。……おいおい、大丈夫かよお前ら。

再び窓に目をやりながら紅茶をずると飲む。うまい。あつたかい。でもやつぱ寒い。

つて言うか誰か会話をしろ。しゃべってくれ。

だがこのままじゃ永遠に喋る事はないので、俺が喋る事にした。

「……いや、いい天気だな〜!!」

窓に目をやると、灰色の雲が空を包んでいる。……そいや今日は天気が悪いんだった。忘れてた。

みんなを見るとなんだか嫌な目と言うか、なんか哀れみを含んだ目でこつちを見ている。やめろ、そんな目で俺を見るなあ!!

なんかますます心が寒くなると、ガチャとドアが開く音がした。

見ると、唯がとことことこつちに歩み寄ってきた。鼻歌交じりに。

お前はいいよなあ、気楽で。

「いや、寒いね〜」

みんな少し笑いながら唯が席に着くのを見る。

律の隣に座ると、唯は一息つき、

「……あ、そういえばりっちゃん」

「どした〜?」

律は唯の方を見る。そして、

「えいつ!!」

「ひゃあ!」

唯は両手を律の頬へ当てて。……うわ、寒そう。

冷えた唯の両手は律に大きなダメージを与えているが、負けじと律も唯の頬へ手を置く。

……まったく、平和な奴らだ。

実は俺、寒いのは超苦手な超苦手で寒い日は動きたくなくなる。だから冬は

嫌いなんだ。

まあ家に帰れば暖房まみれの天国が待っているのです。それまでの辛抱だ。大人しく待ってしよう。

だが寒くなると、やっぱり動きたくない。俺の指もそんな事を言うてさつきからまったく動いてくれない。

使えない指め、少しは動け！と言いたい。が本人が冬になると使えないため、何にも言えなかった。

どうやら唯もそんな感じらしい。はてさて、このままじゃ俺も唯もギターが弾けないぞ。

「そうだ！手袋して弾けばいいんだ！」

……やってみるよ。

そういうと唯は手袋を手に装着し、ピックを持つ。

しかしそのピックはポーンとはねて上空に舞う。唯はなんとかキャッチして、地面との衝突を回避した。

手袋してピックを持つと滑るぞって聞いた事ないのか？

言いたいけどなんとなく経験させた方がいと思うので、俺は黙って唯の手袋をつけてのギター演奏を大人しく見ていた。

……だが手袋がギターの絃に引っ掛かって、うまく弾けない。

「あ〜ん、弾けないよ〜！」

当たり前だ。

唯は手袋を長椅子へ置き、

「失望したっ！」

どこの絶望先生のマネをして、薄に「そりゃそうだ」とツッコまれる。当然の事だ。

まったく。だがそんな天然な唯はやっぱり可愛かった。

「あ、そいや律。お前この前俺が貸したゲーム返せ　って」

律の方を向くと、何やらボーっとどこかを見つめていた。

「律？」

名前を呼ぶが反応は無い。……どうしたんだ本当に。

「りっちゃん」

「律」

唯と澪も呼ぶが反応なし。ついに律の活動が限界時間まで来たか。

「そんな訳ないだろ」

「ですよ」。

「おい、律。律！」

肩を揺さぶると、はっ！と目を大きく開く。

やっと活動再開したか。

「どうしたんだよ律」

「え、あ、ああ、なんでもない！！」

笑いながら律はごまかす。……なんだってんだ？

「そうだ、全部冬がいけないんだよ。りっちゃんがポーっとするのも、ぶーくるろちゃんが活躍できないのも」

なんだよぶーくるろちゃんって。手袋の事か。

まったく、こいつはなんでもかんでも本当に名前をつけたがるよなホント。

「また名前つけてるんですか。って言うか冬のせいにしないでください」

「そうだ！！今度の日曜、うちで鍋しようよ！」

聞いてないし」。

……鍋かあ。

「ああ、別に俺はいいぞ」

「ホント〜！？みんなは〜！？」

周りのみんなの表情を見るがどうにも重い。……冬のせいだ！とか言うなよ。

「ああ、ごめん。その日は弟を映画に連れていくって約束しちゃってさ」

「私も……、どうしても外せない用事があって……」

「私も、その日は家から出られそうにないんです」

律と紬と梓は無理。じゃあ澪は。

「私もパス……。新しい歌詞書きたいし……」
ははは、残念でした。

と言う訳で日曜日俺と唯と憂ちゃん、そしてギー太の4人(3人)で鍋となった。なんか悲しい。

さて、時はぶっ飛び日曜日。

ただいま俺は唯の家へ向かっている途中だ。まったく、相変わらず寒い。

コートのポケットに手を入れて、かなり遅めのペースで歩いている。……寒すぎて普通に歩けないんだよ。しょうがないだろ。

と、そんな事を思いながら歩いていると、視界の中にある人物が映る込む。

「……唯？」

唯がいた。白い息を吐きながら、電柱の前で座り込んでいる。なにやってるんだあいつ。

俺はちよつと走って、唯の近くに行く。

「おい唯。何やってんだそんなところで」

「あ、りょうくん来た！」

俺の顔を見ると、一目散に飛び込んでくる。俺はなんとかその体を受け止め、すぐに引き離す。

だから言っただろ、外でスキップしてくるな。

「だつて〜」

口を尖らせて唯が唸る。……まあいいか。

「そんで、もしかして俺待ってたの？」

「うん！りょうくん早く来ないかなあ〜って」

微笑みながら、唯はそう言った。

俺は遅めに家を出た事を少し後悔してしまった。

もう少し早く着いてれば唯が寒い思いをせずに済んだのに。

「ごめんな、こんな寒い中待たせて」

「うづん、さつき着いたばかりだもん！」
……心にあつた後悔は無くなった。

「あゝ、あつたかゝい……」

唯は俺の腕にしがみついてそのまま動かさない。俺もあつたかいからそのままにしておいた。

俺は唯の家にとつと行こうと言ったのだが、唯がまだ昼過ぎだからいいよもう少し後でいいよと言って適当にぶらついている。

まあいいか。こうやって唯と歩くのも久しぶりだし。

「なあ、みんな今何してんだろうな？」

「うづん、りつちゃんは弟くんを映画に連れていくって言ってたし、あずにゃんは純ちゃんから猫あずかかってるらしいよ」
へへ、だから家から出られないって言ってたのか。

「澪ちゃんは歌詞書いてるだろうし……ムギちゃんはなにやってるんだろう？」

うづん、家の用事か？

……待てよ、そういえば紬、このごろ付き合いがあんまり良くないなあ……。

「まさか、彼氏がいるとか!？」

ああ、そうかもね。

まあ紬も女の子なんだから彼氏がいても不思議じゃないだろう。

「そうだよね。……彼氏かあ」

唯が俺をじーっと見つめてくる。……なんだ。

俺も見つめていると、唯がくすつと笑い始める。

「どうしたんだよ」

「ふふふ、わたしたち、そういえば付き合ってるんだったなあって何をバカな事を言ってるんだこいつ。寒さでついに頭までイカれたか。」

「うづ、ひどいよりうづくん!」

「冗談冗談」

あはははと唯が再び笑い始める。俺もつられて笑ってしまった。

「あはははは　げほっ、げほっ！」

「大丈夫かお前。まさか風邪引いたんじゃないだろうな？」

「違うよ、わたし笑ってるよね、たまに咳が出ちゃうんだ」

にこやかに言う事じゃありません。

こいつは体が弱い方なのだろう。でもじゃあなんで風邪引いた事なかったんだ？

……よくわからん奴だ。

「あ、りょうくん、わたし新しい鍋を開発したんだよ！」

「へえ、どんな？」

「マシユマロ豆乳鍋でしょ、チョコカレー鍋で……」

「やめろ、そこまですると『鍋』が可哀想だ」

「うっ、せつかく考えたのに……」

まったく、こいつは本当によくわからない奴だ。

その時だった。

「ぐっ……!!」

ねえねえ見て見て！マヨネーズ飴だよ！美味しいよ！

気持ち悪いよ　ちゃん……。

「どうしたのりょうくん……？」

唯の声が聞こえた瞬間、俺は我に帰る。

……またこれだ。一体なんの記憶なんだこれは。

「いや、なんでもねえよ。そいやゆ」

「あ、ここわたしの通ってた幼稚園だよ！」

……聞いてください。

唯は横にあるその幼稚園を指さす。

その辺にありそうな特に変わったところはない普通の幼稚園だった。

「へえ、そうなんだ」

「りょうくん、もうちょっと別の反応してよ〜」

「どんな反応すればいいんだ……」

「そういえば唯、お前さあ、幼稚園の時仲良かった男の子とかいなかった？」

俺は率直に聞く。もしあの記憶の中の女の子が唯だとすれば、男の子はおそらく俺だ。って言うか確実に俺だろう。

ただどあんな記憶俺にはない。でも一応聞いてみるのも悪くないだろう。

「え？う〜ん……あ！」

「もしかしていた！？」

「ほとんど和ちゃんとしか遊んでない様な記憶が……」

……そっちな。って言うか聞いてごめん。

さて、唯にそんな記憶はないらしい。

じゃああの記憶は一体なんなのだろうか。ひよっとして俺は昔記憶喪失にでもなったのか？

ないよなそんな事。あつたら姉貴とか言ってるはずだし……。

いや、その方がかえって言わないか。

「どうしてそんな事聞くの？」

「え、いや、まあ……色々とな」

そうなんだ……。と言って唯はまた腕に巻きつく。

また唯にいらん心配を掛けてしまった。もう心配をかけないと決めたのに。

結局、その後は無言のまま唯の家に到着した。

そしてそのまま憂ちゃんも加えて夜の鍋に入れる材料を買いに行く事にした。

「えっと、これで全部かな？」

「まあ、こんな感じだろ。お〜い唯。置いてく」

唯を見ると、携帯をいじっていた。誰かにメールしているのだろうか。

「何やってんだ唯？」

「うん、マシユマロ豆乳鍋と、チョコカレー鍋、どっちがいいかなってみんなにメールしてるの」

やめんかバカたれ。そんな事聞くんじゃないやありません。恥ずかしい。

「え、でももうメールしちゃったよ」

……既に遅かったか。

溜息をついて、仕方なく俺は憂ちゃんと一緒に唯のメールの返信を待つ事にした。

そしてしばらくして……。

「あ、あずにゃんだ」

梓か。どうせツツコミの電話だろ。

そう心で思っていた。唯は通話ボタンを押す。

「もしもしあずにゃくん、どうだ　え、うん」

……あれ？

「……うん、あずにゃん落ち着いて。すぐ行くからね」

そういうと唯はピツと押して携帯を閉じる。

「どうかしたのか？」

「純ちゃんから預かってる猫の調子が悪そうなんだって！すぐ行かないと！」

「え、なら早く行かないと……」

よし、じゃあ早速行く　って。

走り出そうと思った時、俺はある事を思い出す。

猫の調子が悪い。つーことはなんか吐いたのかな？

……あ。

「どうしたのりょうくん？早く行かないと……」

「いや、大丈夫だと思っぞ」

「え？」

だっ……。

「……お騒がせしてすいませんでした」

梓は頭を下げる。いやいや、しょうがないって。

俺はそう言っただけで梓に頭を上げさせる。

「よかつたね、あずにゃん2号なんでもなくて」

おいおい、人の家の猫に勝手に名前つけるなって。

「知りませんでした、猫が毛玉吐くなんて……でも遼祐先輩どうして知ってたんですか？」

「え、ああ。たまたまネット見てたら知ってたんだよ」

……だっただけと思う。実は本当はどうして知ってたか自分でもよくわからない。

ただなんとなく、そんな知識が頭に浮かんだだけだ。

「あくん」

唯が梓にマシユマロを差し出す。

「はい、あずにゃん」

梓はそのまま口を開けて口の中にマシユマロを入れる。

「やっぱこのままの方がおいしいねえ」

「当たり前だ。何がマシユマロ豆乳鍋だよ」

「酷いよりよくん！わたしの芸術をそんな風に……！」

「どこが芸術だ！」

溜息をついて、肩の力を抜く。

梓と憂ちゃんが笑って、その後に唯も笑い始める。……ま、よかつたよかつた。

あずにゃん2号を見て、俺は微笑んだ。

「あ、みんなからもメール来てる。え、ムギちゃんバイト！？遷ちゃんは海に……、りっちゃん、今どこ？だっただけ。え〜と、あずにゃんの家って……」

「びっくり、ムギちゃんがバイト始めたなんて……」

まあそりゃそうだな。一生バイトなんて縁のなさそうな子がして

るんだもん。

ポテトを食べながら、紬のバイト姿を見つめる。ああやってみると、ただの女の子だな……、って普通の女の子か。お金持ちな点を除いて。

「あ、あずにゃん、純ちゃん子猫引き取りに来たの？」

「うん」

そう言っつて梓は席に着く。

「あ、澪ちゃんお帰り〜」

澪も同じタイミングで現れた。

「お、いい詞が……出来なかつたんだな……」

どうにも不機嫌そうな顔で、澪は律の隣へ座る。

まあまあ、ゆっくり考えて焦らず書けよ。

「でもかっこいいよね〜、一人で海なんて……！あ、みんなわたしを置いて大人にならないですよ〜。りっちゃんは変わらないよね〜？」

「な、そんな事ないぞ、あたしだって！」

……あたしだって？

「……いや、やっぱなんでもない」

「ああそうだ律。この前ポストに入れた歌詞どうだった？」

「……はい？」

あ〜、なんか話がよくわからんってきた。

つまりだな、話をまとめると、ちよつと前に律の家のポストに手紙が入っていたらしい。

その内容は、どうやらラブレターだった。

だがしかし実際はそのラブレターはラブレターではなく、澪の歌詞だったらしい。

「……へ、じゃあ、あれは……澪が……？」

「頑張つて、パソコンとか使ってみただけど……どうしたの？」

……このパターンは……。

この先の展開が読めた気がする。

「あれ書いたの澪だったのか〜!!」

「郵便受けに入れとくっていったらだろ!？」

「うるせ〜!! ややこしい事するなあ〜!!」

…… はははは、だろうなやっぱり。

その後、紬も到着して、結局この日は唯の家で全員そろっての鍋となった。

これは、俺たち軽音部の寒い冬の日の、とある1日。

こんな感じで、俺たちは、ちよつとどたばただけど、まったり、ふわふわな毎日を送っています。

…… あんまり、まったりすぎるのも、よくないけどね……。

番外編 「冬の日！そしてまったりな1日？」（後書き）

これにて、本当に1期は完結となります。

本当はもうひとつオリジナルストーリーの番外編をうpしたかったのですが、事情によってこれにて終了となりました。

今まで応援ありがとうございました。それでは、また第2期

「けいおん！ LOVE！LOVE！LIVE！アンコール！！」
でお会いしましょう。

場でOKしてもいいはずだった。

なのに、俺はなんで保留にしたのだろう。自分でも理解できない。

「……はあ」

と、溜息。そしてまた考えが最初に戻る。そのループだった。

結局その日はそれで授業が終わってしまった。俺、こんなので大丈夫なのかよ。

ちなみに溇は今日は何にも話しかけてこなかった。そりゃそうだが。

そしてもう一つ。俺を悩ますものがあつた。

「……モテるのって、案外色々ときツイんだな」

俺の手には手紙が。女の子からのつまりラブレターだ。

他のクラスの子で、どうやらライブをした俺に一目ぼれしたらしい。まあ、俺は断るつもりだが。

ただでさえ、溇の事で困ってるのにますます困る。

どっちにしろその子はあんまり俺は好きじゃないし。

部室に行くと、溇は既に到着しており、唯や律達もいた。俺が最後かよ。

「遅いぞ遼祐」

「じゃあねえだろ、色々あるんだよ」

その子とは部活が終わったら話をするつもりだ。

どう断ればいいのやら……。

「お茶でもどうぞ」

ありがとな。細からもらったお茶を一口。ああ美味しい。

さてと、この調子じゃ、今日は練習はしないのかな。

今日は寒いからみんなやる気なさそうだし。

で、本当に練習しなかった。少しでもいいから誰かしよって言うおしげ。

そして俺はその子がいる教室へ向かっている。

入ると、既にその子は到着していた。そりゃそうだが。

「……よっ」

「……」

「……手紙、読んだよ」

「……わたしと、付き合ってください！」

お辞儀をしてくる。

……告白を断るって、結構辛いな。

「ごめん、その……俺は……」

「……やっぱりでしたか」

「ごめんな」

「いえ、ダメで元々で言いましたから」

その子は笑顔でそういう。だけど、顔は泣くのを必死に我慢していた表情だった。

「……それじゃあ」

「ああ」

その子は鞆を持って教室から出て行った。

……胸が痛い。告白された事がないからな。

いや、あるにはあるが。昨日。

「……さてと、俺も帰るか」

教室の扉を開けて、右に回る。

……そこには漣がいた。

「漣……？なんでこんなところに……？」

「……なんでふつたんだ？」

「……なんてって、別にあの子の事が好きな訳じゃないし」
「……って言うか、見てたの？」

「……たまたま通りかかった」

「……そうか」

その先に何をしゃべればいいのか分からなくなる。

俺はどうすればいい？何を言えばいいんだ？

……逃げるべきか？冗談、そんな選択肢、選ぶわけがない。

じゃあどうする？

「……遼祐」

「なんだ？」

漣から声を掛けてくれた。良かった。

「……やっぱり、昨日の話、なかった事にしてくれないか？」

「……なんでだよ。」

「遼祐、別に私の事なんか興味ないんだろ？唯や律たちの方がいいんだろ？」

「……違う。」

「分かってるよ、私みたいな子なんか、興味ないんだろ？」

「違っつて言っただろ！！」

「え……？」

つい声を荒げて言っってしまった。

漣は驚いた表情をしていた。

「分かんねえんだよ、俺は本当に漣と付き合っただいなのか、漣の事が好きなのかどうか……！分かんねえんだよ！」

「遼祐……」

「……ごめん、帰る」

俺は走ってその場を後にした。漣を残して。

なんなんだよ、なんなんだよ……。

俺はどうすればいいんだよ？

別にいいんじゃないのか、漣と付き合っただい、合わなかったら別れりゃいいじゃん。

「……ダメだ、こんな考えの時点でとっくにダメなんだよ。どうすりゃいいんだよ、俺……。」

その日、俺はほとんど寝れなかった。

次の日、澪は学校を休んだ。風邪と言っているが、恐らく昨日の事が原因だ。

何やってんだ俺は。俺の無神経さが、澪を苦しめてるんだ。

……本当に俺はどうすればいい。

澪か……。

最初、あいつ確か俺の事が苦手だったんだっけ？

いや、俺が苦手と言うか男が苦手なんだっけな。

で、いつのまにかコントみたいな会話するようになって……。

……そこでようやく気づく。

俺の中で、澪がいかにも大きな存在なのか。

やっと、気づいた。やっぱり俺、澪が好きなんだ。

「……ホント、バカだよな、俺」

これで澪と付き合う理由が出来た。んじゃ、決着つけに行くか。

澪の家まで来ると、俺は携帯を取り出す。

そして澪の携帯に通話を開始する。

4コールほどすると、澪がようやく出た。

「澪か？」

『……どうしたんだ』

その声は非常に元気がなかった。

「……おまえんちの前まで今来てるんだ」

『どうして……？』

「当たり前だろ、心配してたんだぞ。学校来ないんだから」

『……そうなんだ』

「顔、見せてくれよ。話したい事、あるからさ」

『……うん』

そういつと通話は終了、しばらくすると澪がドアから姿を現した。

「……よっ」

「それで？」

あんまり元気がない。目も真っ赤だし。

……やっぱり、昨日の事だろう。

「……好きだ、漣。俺と付き合ってくれ」

「……いいの？」

「自分で言っただろ。もう一度言っ。好きだ」

漣は顔を下へ向ける。そしてしばらくして……。

「うわっ!!」

いきなり俺のところへ飛び込んできた。あぶねえ、もうちょいで「
けるとこだった。

「……バカ」

「なんだよ、その言い方」

「ずっと、私も好きだったんだからな」

「そうかい」

そう言っていると嗚咽が聞こえる。肩の方が少し湿っている感じが
してきた。

俺は漣の頭を撫でてやる。

「……でも、俺だってもっと好きだ。いや、大好きだ」

「私だつて大好きだ」

「やっぱ違う。超好きだ」

「……超つて言っな。バカ」

バカバカ言っな。これでも期末試験合計395点だぞ？

「私は421点だ」

まいりました。降参します。

「ふふ……」

漣が笑みを浮かべる。

やべ、こいつ笑うとこんなに可愛かったんだ。今さら知ったぞ俺。

「……遼祐、大好き」

「俺も」

そう言っつて、再び抱き合っ。

……っつてあれ？

「普通この後キスじゃないの？」

「え、キ、キス!？」

「ふん、そつか。恥ずかしいんだ」

「あ、当たり前だ!!こんな、誰か見てるかもしれないのに……!!」

なんだよ、なら家の中ならいいの？

「……バカ。エロ遼祐」

「好きな子にだけエロいんだよ」

「いっつもエロいくせに」

「ほっとけ」

そういうと、澪は俺の手を引つ張って、家の中に入れる。

「おい、いいのか？親いるんじゃないのか？」

「ママもパパも今出張で……!!」

ふん、『ママ』と『パパ』か。へ、そうなんだ。

「うわああああ!!バカバカバカバカバカ!!」

澪がポカポカと俺の胸を殴ってくる。やめる、地味に痛い。

その後は澪を抑えるのに大変だった。

「みお」

「……なんだ」

澪は俺の腕の中にいる。

現在俺たちがいるのは澪の部屋で、なんかもうさっきからイチヤイ
チヤしまくっている。

部屋の壁を背もたれにして、俺が澪を後ろから抱きついていてる様な
体勢になっていた。

キスとかあの辺はしてないけど。

「……俺の事好きか？」

「……うん」

「俺無しじゃ生きていけなくなってしまうただろう？」

「……もう、バカア……」

「そうそう!その甘えたバカアが聞きたかったんだよ、くう!!」

「……変態」

漣専用変態だ。気にするな。

「漣、ずっと一緒にいような」

「……うん」

漣は俺の手を握る。俺も握り返した。

大好きな漣。

俺は、これからこいつと一緒にいるんだ。

そんで、いつか結婚して、一緒に暮らすんだ。

……漣、大好きだからな。

番外編「もうひとつの世界 漫編」(後編)(前書き)

一部R-15的要素が。ご注意ください。

番外編「もうひとつの世界 澪編」(後編)

あれから既に5年。俺は現在大学4年生だ。

そうだぞ。こんな俺でも大学行っただぞ？半分澪のおかげだが、でもまあいいさ。そのおかげで。

「遼祐〜！」

澪と一緒にの大学に行けたんだからな。

あの後から色々つまあとにかく大変だった。

まずは律達に付き合ってる事がバレた事。

澪は絶対にバレてほしくないとか言ってたけどどうせ言わなきゃいけないんだからいいだろ。

「どうして？」

「そりゃ、例えば……俺らが結婚したときとか？」

……みるみる内に澪の顔が真っ赤になる。

ふふふ、可愛い奴め。

まあ別に嫌と言うほど祝福されたので問題ないが。

ただその後、唯と梓が実は俺の事が好きだったと言う事が発覚して色々大変だったが。

ちなみに澪が大声で

「私が一番遼祐の事が好きなんだー！！！」

って言うのと解決してしまった。その後言った本人がぶっ倒れてしまったが。

んでその次は澪のファンクラブ。

俺は正直この存在を思い出した時には死を覚悟していたが、ファンクラブのみんなは誰も俺を殺しに来たり脅迫してきたりしなかった。良かった〜……。

……女性陣だけね。男性陣からは脅迫電話がきたり、ケンカ売られたりした。まあボコボコにしてやったけどね。

え、喧嘩はしないんじゃないかなかったって？

……おほん、澪の為だ。ごめんよ。

その後は澪の両親。

お義母さんは大賛成だったが、お義父さんは色々と面倒な人だった。色々と大変だったが、なんとか交際を認めてもらった。

今では結構仲が良くなっている。

んで、その他色んな災難を乗り越え、澪と同じ大学に通えた。

ちなみに他にも律もこの大学だ。

「それで、今日はこの後どうするの？」

「どうするって……このまんまバイト行って帰って飯食って寝るだけ」

「じゃあ遼祐、ご飯作って待ってるね」

「いいよ別に。お前だって忙しいだろ？」

「そうだけど……遼祐に、私のご飯食べてもらいたいから……」

……澪が上目遣いでこっちを見てくる。

ダメだ、耐えられない。こんなに可愛い澪のお願いを断る事なんてできない！！

「……無理だけはすんなよ、頼むから」

「うん！」

一気に満開の笑顔で頷く澪。

こんな感じで、俺たちは毎日を過ごしていた。

「おいりよ〜すけ〜、お前また澪に変な事言っただろ〜？」

律が大学の中でこんな事をいいながら肩を掴んでくる。

何の話だ。変な事なんか言っただよな記憶はない。

「まったく、澪の奴口を開くと遼祐の事ばかり……、羨ましいぞ

コノ〜！」

「ほっとけ」

と言っているけど、澪の愚痴を言い続ける律。

こんな所見られて誤解されたらどうする？

「大丈夫だつて。……つて言うか、結婚しないの2人とモ」

結婚？そりゃしたいさ。けどさあ、学生結婚なんて大変だぞ。

「でももうあたしたち卒業じゃん」

ああ、そっか。もう少ししたら卒業だつた俺たち。

現在1月15日。後数カ月で大学卒業して俺らも社会人だ。もともと既に社会人だが。

「んで、どうすんの？」

「……ま、指輪は買ってるんだけどな」

「へ〜……つてええ！？」

律は廊下だと言う事を忘れて叫ぶ。

誤解されるだろ、やめる。

「よし、漣に言いに行こ「やめる律！」はなせ〜！」

何バカな事言つてんだバカ！もし漣がたまたま通りかかったりでもしてみる！確実にややこしい事になる！

そっいいながら俺は律の手を掴んで、必死に動きを止める。

「……あ」

やっと諦めたか。律が抵抗をやめる。

俺も手を離し、ふと前を見る。

「……漣……？」

漣がいた。

最悪のタイミングだ。

「いつからいたの……？」

「……指輪の話のところ」

「……あ、あのだな、これには……」

「やっぱり、そうだったんだ」

「……？」

「私より、律の方が好きなんだな」

いや違う！！違うつて！！そりゃ誤解だ！！

「何が誤解だ！！……遼祐のバカ！！」

漣は泣きながら後ろに回れ右をして駆け出していく。

俺はただその背中を眺める事しかできなかった。

「……………あゝらら、どうすんの、遼祐？」
プチン。

「てめえのせいだろうがあああああ！！」

俺は律の後ろに回り込み、思いつきり首を絞める。

さて、どこにいるのだろうか。家か？行ってみるけどハズレ。

俺の家も行ってみたがやはりいなかった。

桜高？ますますおかしい。なんでそこに行く。

……………もしかすると。

俺はある場所を思い出し、そこに向かう。

あの思い出の場所に。

「え、デート？」

高校2年の春休み。漣の家に遊びに来てた俺はデートのお誘いをする。

って言うか家で一緒にいる時点ですでにデートと思うが、残念ながら俺はカウントしない。

「ああ、明日。場所は俺が決める。……………ダメか？」

「ううん、全然全然！！さささ、早く行こ！！」

「いや、だから明日だって。今日は無理」

漣はちえーと言った顔をする。漣のそんな顔を見るのは珍しかったので、俺はつい笑みを浮かべる。

「あー、今遼祐笑っただろ？」

「さあね〜？どうだろ〜？」

そういうと、漣は俺に軽くタックルしてくる感じで、俺の肩に寄りかかってきた。

まったく、本当に可愛い奴だ。

……最近俺、完全に溇に溺愛しちまつてるよな。うん。

「りよ〜すけ〜!! はやくはやく〜!!」

溇は走りながら、花畑の中を駆けだしていく。

俺は歩きながら溇についていつている。……めっちゃはしゃいでるし。

今俺たちがいるのはフラワーパークと言う花がたくさん咲いているまあ大きな公園の様な所だ。

最初は俺もこんな所に来て溇が楽しんでくれるかと思っていたが、そんな不安は来た瞬間に消えた。

どうやら溇、花が結構好きらしい。……都合良すぎ。作者、ご都合主義だけはあんまり多くするなよ。

「りよ〜すけ〜! 見てみるって! すごい綺麗だぞ〜!」

はいはい、そう呟きながら俺はしゃがんで花を見ている溇の横にしゃがみこむ。

「綺麗な花だぞ〜! すごいすごい!」

ははは、そうかい。

目を輝かして見ている溇はなんか本当に女の子そのものだった。…

…可愛い。

そんな感じで、疲れないのと言っぐらい、今日の溇ははしゃぎまくっていた。

……花が好きだけでここまでじゃぐ?

違うか。……これが、俺たちの初デートだからかな。

普段学校で話したりしてるからな。別にデートなんか誘わなくても十分楽しいと思っていた。

だけど、律からこんな事を言われた。

『溇寂しがつてたぞ〜、遼祐が全然デートに誘ってくれないって。私嫌われてるのかな〜って』

漣が俺の背中に手をまわしてきた。俺も漣を抱きしめる。

「……………大好き」

「俺も」

……………漣はそういうと顔をあげる。

その表情は真面目と言っか、何と言っか。顔は少し夕日のせいか、赤くなっていた。

「どうした？」

「……………キ」

「へ？」

「お、お礼にキスしてやる」

そういうと、漣は目線を横にした。恥ずかしかったのだろうか。

……………お礼って。なんか違うような。

だが、そんなツンな漣も中々可愛かった。

恥ずかしくって、自分でもどう言えばいいだろうと一生懸命考えて、その結果がこれだ。

「……………いいよ、喜んで」

俺がそういうと、漣はこっちに顔を近づけてくる。

目を瞑って、俺も少しずつ近づいて行く。……………そして。

「んっ……………」

俺と漣の唇が重なり、そのまま動きが止まる。

……………そうだ。いい事思いついた。

ただどこれしたら漣怒るかな……………？まあいいか。なんともなるか。考えた俺は、漣の髪をちよつと撫でて……………。

「んっ……………！？」

唇の間から、俺の舌を漣の口に割り込ませる。……………大人のキスって奴だ。

「あっ……………んっ……………りょ……………すけえ……………」

ピチャピチャと水音が耳に聞こえてくると同時に漣の喘ぎも聞こえてくる。

……………どうかんがえてもR指定つくだろこれ。作者、ちゃんと対策考

えとけよ。

それが1分して、長かったような、短かったようなキスタイムが俺が唇を離すと同時に終了する。

澪の目から少し涙が。そして顔が真っ赤で。

「……遼祐のエッチ」

「うるせえ」

やっぱこのパターンか。

「……苦しかった」

「ごめん」

「でも、気持ち良かった」

「もう一回する？」

「……やだ」

「なんで？」

「……噴水終わってる」

え……？

見ると既に噴水は出ていなかった。人はいなかったのが唯一の救いだ。

……良かったあ〜。

「……人いないんだからいいじゃん」

「やだ。家でする」

「……なに、気に入ったのあれ？」

「……うん」

澪は軽く頷く。

「……じゃ、続きはお前の家で」

「やだ」

「なんでよ」

「ママとパパに見られると恥ずかしい」

「……分かった。んじゃ俺の家な」

「うん……」

そついうと、澪は顔を再び赤らめ、俺の手を握る。

俺も握り返して、

「……………帰るか」

「うん」

俺たちはそのまま家へ帰る。

ちなみにその後、『本当に』キスしかなかった。

なんだよ、ここまでできたらするんじゃね普通？

「恥ずかしい！！」

この一言で却下された。……………ぐすん。

なんか悲しくなった。

「……………いるのかな」

そして現代。俺はあの時と同じ場所に来ている。

でもいるのかよ、いたらそれこそご都合しゅ。

「いたし」

ご都合主義全開だ。……………でもこれってご都合主義と言えるのだろうか？

まあどうでもいい。そんな事読者のみんなに聞いてもらえばいいさ。

俺はしゃがんでいた漣の少し離れたところで足を止め、声を掛ける。

「……………漣」

「……………バカ遼祐」

第一声がそれですかい。

そんなこと思ったのだが、俺は気にせず話を続ける。

「……………だからあれは」

「分かってる。私の誤解だ。さっき律から電話が来た」

んじやなんでそんなところでしゃがんでるんだよ。

「……………やっぱり忘れてる」

なんだよ、何を忘れてんだよ。

「……………」

黙ってたら分かんねえだろ。何か言ってくれ。

「……………誕生日」

……………。

「今日は、私の誕生日なんだぞ」

……………なんだそんな事か。それで怒ってるのか。

「そんな事って何だ！私、遼祐にお祝いしてもらえるのがすっごく
楽しみで……………！」

「覚えてるさそんな事。俺が忘れるわけないだろ」

「えっ……………？」

「あのなあ、大事な彼女の誕生日を忘れるわけないだろ」

「……………そうだったんだ」

「今までその事に関して言っていなかったのは、ちょっと驚かしてや
ろうかなって思っただけ」

「……………」

「ま、泣かしたのは事実だ。ごめん」

「……………分かった」

漣はそう言って、立ちあがって俺の方を見る。

「……………プレゼントいる？」

「……………うん」

俺は漣に近づいて、真正面に立つ。

漣のその顔は、真剣そのものだった。

俺がなんか企んでいると思っっているんだろうか。……………まあしょうがないか。

いつだったっけ、確か大学2年の時……………。

『ほれ、プレゼント』

『ありがとうな、遼祐！なんだろう……うわああああああああああ……』

『へへへ、プレゼント型びっくり箱だ。驚いたろ　って漣！？大丈夫か！？』

なんて事があって、それ以来漣は俺からのプレゼントをもらうときはいっつもこんな感じだ。まったく、少しは信用してもらいたいもんだ。

「……ああ、そのだな」

「もしかして今は無いとか？」

「いや、あるにはある。だけど……」

漣は疑問符を頭の上で泳がせている様な顔を始める。

「あのだな……」

「うん」

「……結婚、するか」

「……へえ！？」

もっと別の驚き方は無いのか。女の子っぽくないぞ。

「え、いや、だって……え！？」

「いや、結婚しようって言うてるの。プロポーズ」

……漣はどうすればいいのだろうと言う顔を始めた。

それと同時になんだか目に涙をためていた。そんなにびっくりしたか。

「そ、そうじゃなくて、いや、だから……嬉しかった……」

ああ、なるほど。

「……んで、どうする？」

「……その前に聞かせて」

「どっぞ」

「……律と話してた指輪の話って」

「ああ、うん。婚約指輪の事」

俺はそういうと、上着のポケットから指輪の入っている小箱を取り出す。

それを見ると、漣は両手で口を押さえる。そんなに驚く事か？予想できるだろ。

「……だけど、嬉しくって」

そっか。

「……条件がある」

「何だ。就職先ならとっくに決まってるぞ」

「違う」

「んじゃなんだ」

漣は少し黙って、左手を差し出す。

これは……まあそういう事だろう。

「……その指輪、つけてくれたら」

お安い御用さ。

そういうと、俺は箱を開けて指輪を取り出す。

箱をポケットにしまうと、漣の左手を持ち、薬指にその指輪をゆっくりはめる。

「よかった、ぴったしだ」

「……」

「手が大きいから、指も他人より太いかと思った」

ポコお！！

「いってえ〜！！殴る事無いだろ!？」

「うるさいバカ！最低!」

……ふふふ、はははははは。

つい笑ってしまう。漣もつられたのか、同じように笑う。

さて、これで条件はクリアしたぞ。

「……漣、もう一度言う。結婚するか？」

「……うん」

そういつた瞬間、ブシャアっと言った音が耳に届く。周りを見渡すと、水の壁が俺たちの周り囲んでいる。

「あの時と、同じだな」

「まったく、噴水も空気が読めてるって言うか」

と言うか空気読みすぎ。演出担当サンクス。

「……えっと、その、遼祐？」

「なんだ」

「……キス」

ああ、そういう事か。

「……普通の」

「……はいはい」

まったくわがままな奴だ。そういうところも好きなんだけどな。

俺は漣をこっちに引き寄せ、そのまま唇を重ねる。

輝く夕日を、バックに俺たちの影も共に重なった。

「ずっと一緒にいような、漣」

「うん……私の、旦那さま」

……どこのツンデレヒロインが頭によぎった俺は重症なのだろうか。

そして月日が経って……。

「……んじゃ、行こうか、漣」

「うん！」

黒のウエディングドレスに身を包んだ漣の手を取り、俺達は歩きだす。

え、なんで黒かって？……漣と言えば黒だろ。それに超似合ってるんだぞ。

「では、誓いの口づけを」

目の前にいる神父がそういうと、俺たちは向かい合う。

「……漣」

「……遼祐」

俺たちはそのまま、キスをした。

永遠に、ずっと一緒にいると言う、誓いのキスを。

……これからは俺は、ずっと漣といる。

愛する恋人、いや、妻の顔を少し薄眼で見ながら、俺はそんな事を思った。

漣、大好きだからな。

けいおん！ LOVE！LOVE！LIVE！ 漣ルート fin .

番外編「もうひとつの世界 溇編」(後編)(後書き)

オチが弱いような気がします。まあいいでしょう。

これにて溇編完結です。……次回の冬の日編で本当に1期完結です。では、またお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9852/>

けいおん! LOVE!LOVE!LIVE!

2011年8月9日14時05分発行